

# 地域交流研究

2008年度  
年報 第5号

# 目次

## 第5回地域交流研究フォーラム

始めの挨拶	西本 勝美	2
環境教育実践の報告		
全体説明	坂田有紀子	5
Ⅰ. 自然に学ぶ：フィールド・ミュージアムの広がりとの出会い	北垣 憲仁	8
Ⅱ. 農に学ぶ：自ら食を生み出す～大学農園の挑戦～	西本 勝美	16
Ⅲ. 地域に学ぶ：今夜は大家族！		
都留フィールド・ミュージアムカフェ奮闘記	河野 格	22
全体集会		
「みんなで語ろう！環境教育 私たちがめざすもの」		27
基調提案：高田 研		
パネリスト：上田 司・しらいみちよ・岡田 淳		
司 会：青木 将幸		
終わりの挨拶	畑 潤	48

## 2008 (H20) 年度活動報告

Ⅰ. 2008年度の活動について (概況)		52
Ⅱ. 各部門の活動		53
Ⅱ-1. フィールド・ミュージアム部門		
Ⅱ-2. 発達援助部門		
Ⅱ-2-1. 学生アシスタント・ティーチャー (SAT) 配置事業		
Ⅱ-2-2. 地域教育相談室		
Ⅱ-2-3. 地域情報教育		
Ⅱ-3. 暮らしと仕事部門		
Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動		72
Ⅲ-1. 第5回地域交流研究フォーラムの開催		
Ⅲ-2. 各種講座の開催		
Ⅲ-3. 『地域交流センター通信』の発行		
Ⅳ. 地域貢献活動		78
Ⅳ-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会		
Ⅳ-2. 都留市子ども教室事業		
Ⅳ-3. 文大ボランティアひろば		
Ⅴ. 地域交流研究教育プロジェクト		81
(付) 2008 (H20) 年度地域交流研究センター担当教員		92

# 第5回 地域交流研究フォーラム

フィールド・ミュージアムへようこそ！

— 地域とともに

自然とともに

私たちがめざすもの —

2009年2月21日（土）

都留文科大学

## 始めの挨拶

本学初等教育学科教授 西本勝美

西本：皆さん、ようこそおいでいただきまして、ありがとうございます。いま紹介にありましたように、現在、本学の地域交流研究センターという部局のセンター長をやっております西本です。昨年からで2年目になります。今回の第5回地域交流研究フォーラムは、一番最初の画面にありますように、二つのものの両主催（というふうに内々で言っているのですけれども）で開催させていただきます。



一つは地域交流研究センターの5回目になります公開のフォーラムということで、地域交流研究センターが一つの主催なのですが、もう一つは「文科省現代GP」です。現代GPではよく分からないので、通常われわれは「環境教育GP」と言っていますけれども、その説明があとであります。その両方が主催であるというような趣旨で、今回の会を開催しております。ですので、その主催者の一方を代表して簡単にご挨拶申し上げたいということになります。

地域交流研究センターといいますのは、展示のほうにパンフレットなどもあったと思いますが、平成15年度に開設されました。この大学と地域をつなぐ拠点として機能するという目的で開設されました。そして今年で丸6年になりまして、6年目になっているわけですね。この間に、センターの活動としては三つの部門を確立してきました、その部門の活動を中心に展開しているというわけです。

ご存じかもしれませんが、その三つの部門というのは、フィールド・ミュージアム部門、発達援助部門、暮らしと仕事部門の三つです。

昨年のこの会のご挨拶でも申し上げたのですけれども、文科省のGPという制度があります。これはGood Practiceということだそうなのですが、全国の大学から特色のある、力を入れている取り組みを申請して、一種のコンテストです。文科省のしかるべきところで審査をされて、いくつかのものが優秀であるというので、その活動をさらに発展させるという目的で、かなりの額の補助金がつくというものがあります。ちょっと制度が変わったのですが、全国の大学がそれを獲得しようとやっきになっています。それがあつたのですが、誇らしいことに、一昨年の7月、うちの大学は先ほど申し上げました地域交流研究センターの三つの部門のうちのフィールド・ミュージアム部門と発達援助部門それぞれがそれを申請しまして、同じ年に両方もが通ってしまったんです。こういうことは全国的にもかなり珍しいことです。それぞれの活動が表面的であつたり、底の浅いものであつたりするのではなくて、本当にきっちり積み上げてきた、そして発展可能性が十分にある活動だと認められたということを証明しているわけなんです。

一昨年の7月にGPが通つたわけですから、昨年の第4回フォーラムのこの時期にはGPがもう動き出していて、その年度末になっていたわけなんです。それで

今回と似たかたち、いま言った二つのGPのうちのフィールド・ミュージアム部門を基盤としたGPのほうの事業展開の一環という位置づけと、4回目を数える地域交流研究センターのフォーラムとを重ねるというかたちで、昨年も開催したわけです。

昨年のフォーラムは、われわれセンターとして非常に成功したということと、今後のセンター活動やフォーラムの開き方に非常に大きな示唆、ヒントを与えてくれたと判断しています。昨年の全体テーマは「つなぐ、はぐくむ、フィールド・ミュージアム——自然・食・暮らし・文化」というテーマだったんです。基調講演があり、午後がシンポジウムというかたちでしたが、そのシンポジウムのタイトルは「地域の自然と暮らしと農に学ぶ」というものでした。

そうしましたところ、そのフォーラムの参加者が過去最高の人数に上ったということです。しかも単に人数が多いだけではなくて、地域交流研究センターの活動の3本柱からしても、つながっていくことで豊かな活動が期待できるような、ぜひつながりを今後も継続してほしいと願うような幅広い参加者を得ることができたわけです。このことを我々はじっくりと議論、検討しまして、フィールド・ミュージアムという言葉、概念が当センターのフィールド・ミュージアムという部門という狭い意味合い、直接に環境保全や環境教育に限定されるような狭い意味ではなくて、地域交流研究センターの三つの活動を含めた全体を表現する、象徴する言葉として通用するのではないかという確信をいただいたわけです。

それはおそらく時代の要請に合っているということでもあると思うんです。例えば今日のご案内のチラシのどこかにもあったかもしれませんが、「自然と共存した循環型のライフスタイル」というようなこと、「持続可能な地域社会」というようなことです。これらは狭い意味での環境教育とか、いわゆるエコといわれていることにとどまるものではないわけです。その全体をフィールド・ミュージアムという言葉が象徴していくのだと考えたわけです。

このフォーラムは年に1回開催してきているわけですが、これまではフォーラムごとにテーマや内容を大きく変えて、その都度参加者もまた大きく変わる。それに関心のある方が変わって、前に来た方が次に来るというふうにはなかなかならないという形でやってきたわけです。むしろ広い意味でのフィールド・ミュージアムというテーマや内容を維持していくことで、その参加者の皆さんが毎年行ってみよう、毎年続けて行って得られるものがあるのではないかという仕組みにしていったほうがセンターとしても非常に豊かな実りを生み出すのではないかというふうに考えてきました。

ですので、昨年来ていただいたけれど今年は残念ながら来ていただけてない方も、いまお集まりの皆さんの中から「今度は行ってみたいよ」というようなことでどんどんつながりを作っていたきたい。そして「年に一度は都留へ」という、都留参りとでもいうような人の流れが作りだせたらという大それた企みといたしますか、展望を持っているところです。

そして、今回のフォーラムの中身ですが、広い意味でのフィールド・ミュージアムと言いましても、全体を漠然と扱うわけにもいきません。今回の場合、おそらく広い意味でのフィールド・ミュージアムと考えた場合も、いくつもの各領域、各要素をつなぐ結節点みたいなものがあるだろうと思います。おそらくその結節点の一つに環境教育という言葉や概念があるということは間違いのないことだろうと思いますので、今回の場合は、環境教育というところへ焦点づけるような組み立てを意識して考えてきました。

もちろんこの場合の環境教育というのも、例えば小学校で1学期に1回、こういう取り組みをやろうというような狭い意味での環境教育ももちろん含まれていますが、それだけではなくて、自然と教育や子育てと暮らし、生活といったものを貫くような方向性、指向性をもつものとしてとらえていただけたらいいのではないかと思います。

今日の組み立ては、午前中に、この環境教育GPとも深い関係のある本学の三つの取り組みについて、それぞれかかわっている者が報告いたします。私も一つそこで報告することになっています。

そのあと午後は、展示をじっくり見ていただく時間をとっています。その展示には、午前中の三つの報告に直接関係している展示もありますし、それ以外にこの間にこの地域交流研究センターがつながりをつくってきたたくさんの人々や団体や事業所の方々に、それぞれ意欲的な展示を用意していただいております。

すでにお分かりかと思いますが、隣の102という教室だけではなくて、ロビーや屋外にまで展示や実現などが用意されています。1時間半ぐらい時間をとってありますので、ぜひじっくり見ていただいて、スタッフがいますところもありますので、スタッフやかかわった学生などの声も聞いてみてください。

そして、その後、今日の最後のセクションは2時半から4時までの全体集会ということになっていますが、そこではまず短い基調提案を行いまして、それを受けて3名のパネリストの方にそれぞれコメントを出していただいて、それをもとにして今日参加していただいている皆さんとそれぞれの立場からの具体的な環境教育の手がかりとか、あり方を考え合っていくというにできたらいいと思っておりますので、ぜひご協力いただければと思います。

それでは、今日これからお昼をはさんで6時間ですが、まずは大いに楽しんでいただいて、そして、大いに交流していただいて、たくさん発言していただいて、何か一つはつかみ取って帰っていただくというふうになれば幸いです。それでは簡単ではありますが、ご挨拶とさせていただきます。(拍手)

## 全 体 説 明

本学初等教育学科准教授 坂 田 有紀子

坂 田： 先ほど西本センター長からご紹介がありました現在本学で推進しております「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み：フィールド・ミュージアムへようこそ」について少し簡単に全体の概要をご説明申し上げます。だいたいの話の内容は四つの部分に分かれております。まず、フィールド・ミュージアムとはどういうものか。ここにお越しの皆さんはこ



ういったことに興味がある皆さんなので、ご存じの方、あるいはだいたい想像がついている方もいらっしゃると思います。本学のフィールド・ミュージアムとはどういうものかということも併せてご説明申し上げたいと思います。

それから、GPの内容、そして、今回のフォーラムも含めて私たちが目指したいと思っているものについて簡単にご説明申し上げます。

それでは、まずフィールド・ミュージアムとはどういうものかということです。最近、フィールド・ミュージアムという言葉はいろいろなところで聞くようになってきました。フィールド・ミュージアムというのは、ミュージアムというので、もちろん博物館なのですが、これまでの屋内型の、展示を屋内に閉じこめるようなものではなく、野外で、野生生物本来の暮らしと姿を観察できる野外博物館、自然博物館というものを一般的には指します。

ですが、本学、都留文科大学のフィールド・ミュージアム構想というのは、過去20年間の非常に長い歴史がありまして、本学の名誉教授であります今泉吉晴氏が提唱され、北垣さんと一緒に実践されてきた取り組みです。

その内容はムササビの保護活動はもちろんのこと、そちらにあります写真のような、動物たちと出会える場所を発明したり、私たちの身近な空間に生き物を呼び込むというピオトープなどを実践してきました。

近年は、動物との出会いにとどまらず、自然、人、文化、暮らしなどをテーマに『フィールド・ノート』という雑誌を通して地域の皆様と交流するという活動を重ねてきています。また地域の歴史・財産、古い写真、当時の様子が分かるような貴重な写真を収集して、持続可能な地域をつくっていくのに役に立てようとデータベース化も始めています。

このように多岐にわたりますが、その思想は単に自然観察にとどまるのではなく、自然から学び、自然と人とが共存する地域社会を探究するというのが、本学のミュージアム構想の大きな柱になっています。

これまで蓄積してきたフィールド・ミュージアムの思想と実践があります。本学は教員養成系として数十年やってきたわけですがけれども、その教員養成の伝統と合わせて、今回、「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み」という

プログラムが文科省にめでたく採択されたわけです。

この取り組みの目的は、そちらにありますように、自然環境教育の得意な教員を養成すること。もちろん小学校、中学校の現場は、先生だけでは環境教育はとてやれません。教員だけではなくて、地域において一緒に学校とつながりながら、子どもたちを支えながら、地域全体で環境教育をおこなっていくという人材が必要です。そういうコーディネーター的な役割が果たせるような環境教育の担い手を養成しようというのがこのプロジェクトの目的です。

地域全体、山・里・町、子、人、そういう地域全体をフィールドとして実践的な環境教育を行っていくという大きな特徴を持っています。

内容は大きく三つのパートに分かれています。まず、自然に学ぶ、農に学ぶ、暮らしに学ぶという三つの領域から成り立っています。それぞれ自然環境教育とか、食・農・循環の学習、それから地域全体をつなぐ、人と町と自然をつなぐような地域研究というものを柱に据えています。概念的な図をこちらに示しましたが、それぞれの領域でいろいろな活動が行われております。

例えば、「山」、「自然に学ぶ」というところでは、ムササビの観察会や、エコツアー、それから地域の絶滅が危惧されるようなカジカやカワラナデシコなどの保全活動。地域のNPO「シオジ森の学校」との連携、Grow Wild Camp、ソロの小屋など、とても特徴的で創造的なプロジェクトが現在動いております。

それから「町」の部分では、町に学生たちが出ていって、『フィールド・ノート』の取材を通して交流が生まれたりしております。このあと詳しいことは北垣さんのほうから詳しい紹介があると思います。

また、「農に学ぶ」、「里」のほうでは、市内の休耕地を利用して、学生と先生たちが市民の方と一緒に畑や水田をやっている。あと大学食堂での食育展示等にも取り組んでおります。

「つなぐ」という部分もいくつかあって、例えば、富士急行さんとの連携、フィールドミュージアムカフェなど、とにかく人と町と自然をつなぐということを意識して、皆さん非常に活発な取り組みをしています。このあと3人の方に紹介していただきたいと思います。

これは時間がなくて削りたいと思いますが、本学の組織的なものを示したものです。地域研究センターが核となって、いくつかの学科の先生たち、市民の皆さん、企業、都留市とが連携しながらやっているという構想を示しています。現在うまくいっているものばかりではないのですが、少しずつこういった取り組みを発展させていきたいと考えています。

最後に、私たちがめざすもの、どういうことを目指したいのかということをもとめてみました。地域から学ぶというのはとても大事なことだと思っています。大学の教室に座って、教科書を読んで、先生の話の話を聞いているだけではなく、いろいろな宝が地域にいっぱいあるのですから、地域に出ていってほしい。それを通して、大学で学んだ理論的な知識と現実のリアルの世界での学びとを深め、学生も地域も、子どもたちも、地域から一緒にみんなで発展していければと考えています。

言いたかったのはここです。ゆったり・スモール・省資源、それから循環型持続的利用というものです。地域の昔ながらの文化、暮らし方というのは、一昔前の後退的なものではなくて、新しい視点で見れば、現在の環境問題を克服するようないろいろなヒントが詰まっているのではないかと考えています。こういったことを地域から学んで現代的に考えていく。私たちが今後どうやってライフスタ

イルを選んで実行していくかということのヒントになるようなものがたくさんあるということです。

目指すものとしては、地域の皆さんと一緒に自然と調和した持続可能な地域づくりをすることです。先ほどから何回も出てきましたが、小さな交流の輪をつないで、広げて、今まで点だった活動を線にして、面にして広げていくことによって、持続可能な地域づくりというものを少しずつ共有し、目指していければと考えています。

このフォーラムがそういった活動を広げていく一助になればいいなと考えています。長くなりましたが、私のほうから、G Pの概要説明と今回のフォーラムの趣旨について説明させていただきました。(拍手)

# I. 自然に学ぶ：フィールド・ミュージアムの広がりとの出会い

都留文科大学 特別非常勤講師 北垣 憲仁

皆さん、おはようございます。いま紹介していただきました北垣と申します。私は地域交流センターでフィールド・ミュージアム部門の一員として非常勤で働いております。今日はその中で特に環境GPという取り組みに重なるものを皆さんにご報告したいと思っております。

今日の皆さんへのご報告の柱は大きく分けると三つあります。時間の都合上、全部お話しすることはできませんが、一つは『フィールド・ノート』という取り組みです。これは皆さんお手元の資料に1冊入っているのではないかと思います、この冊子の活動です。これを一つご紹介したいと思います。

二つ目は、先ほども紹介がありましたが、写真コレクションというものです。地域の過去を撮影した写真を集めるとい活動、またそれを整理、保存して活用していくという取り組み、まだこれは途中の段階ですが、ご報告したいと思います。地域交流研究センターの中ではこれを大きくまとめて「オープン・アーカイブ」と名付けています。これはいづれどなたでも自由に活用していくという意味を込めています。

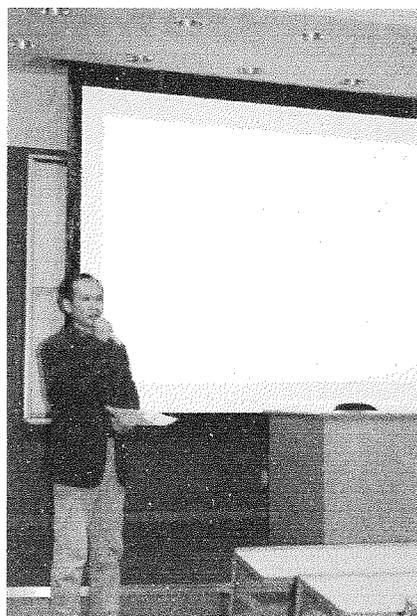
三つ目は、富士急行線をフィールド・ミュージアムにしてしまおうという取り組みです。これはいま始まった取り組みではなくて、実は非常に長い前史があります。フィールド・ミュージアムの構想がここに立ち上げられてから、長い間、こういうものが実現するといいなということで取り組んできたものです。これも始まったばかりで、途中の段階ですがご報告したいと思います。

それでは『フィールド・ノート』の取り組みをご報告したいと思います。これは2002年に取り組みを始めました。当時は私が学生と一緒に森の中に入って動物の観察をしたりするときに、学生は非常に貴重な体験をするわけですが、それをぜひ記録としてきちんと残していきたいというところからスタートしました。それはいまお手元にあるような冊子ではなくて、非常に小さなA4版1枚ぐらいの非常に小さな紙でスタートしました。そこに記録を書いて、そしてそれをまた授業でみんなに報告したり、活動を報告し合うというようなことを最初にやりました。

しばらくたつと、そういう経験を聞くうちに、仲間の学生が「ぜひ私も観察に行きたい」とか、あるいはこういう「体裁のいいかたちで、動物だけではなくて、他のことも記録したい」という学生が現れまして、一緒に編集ということをやってみようということで、活動を展開してきました。

このようになっておりますが、これは活動を始めた当初の様子です。ちょうど編集をするのに都合のよい環境が整い始めたのがちょうど2000年ころです。パソコン上でいろいろな情報を加工しながら冊子をつくっていくというのがだれでもできるようになってきました。以前はこれをつくるとなると、相当大変な作業でした。ほんの一部の専門家しかできなかったような作業がだれでもできるようになったというのが、一つ大きな要素としてあげられます。

これが中身の一部です。見栄えのいい体裁に整えて、取材した結果をきれいに報告していきます。ただし、この文章が完成するまでには非常に長い時間をかけます。学生が実際に取材に行き



ます。それを文章にします。しかし当然、そこで間違いやあやふやな部分が出てきますので、もう一度取材に行って、帰ってきて、それを繰り返して書いていくわけです。そして長い時間をかけて完成させていきます。

そういった技術が少しずつ学生に身に付いていきます。学生はそういった技術を身につけるのが速いですから、いろいろな部分でほかの活動にも広がっていきました。

例えば、キャンパスの中でいろいろな生き物の記録を取る。それを紹介する。あるいは地域のいろいろな見所を紹介するガイドマップをつくる。そういった活動です。

それから交流センターでは、いま『地域交流センター通信』というのを発行しております。それもお手元にあると思いますけれど、そういった冊子をつくったり、あるいは、センターの案内をするパンフレットをつくる。そういったところにも生かされております。

こういった活動がフィールド・ミュージアムへの学生参加の受け皿にもなっていますし、またそういったものをつくっていく環境がいまようやく整いつつあるということになると思います。環境GPでは、こういった取り組みを大学のカリキュラムにも生かすということを大きなテーマの一つにしています。

それで授業でも連携して、こういった地域の情報を学生と一緒に冊子にするという取り組みを始めました。これは取り組み始めてまだ3年目です。「地域の方々と交流し話を聞いているんだけど、文章を書いていると、自分と向き合っているような感じがする」という学生の言葉が今でも非常に強い印象として残っております。

多くの人とのつながりの中で、ただ単に言葉だけを受け取って書くというのではなくて、書くという行為そのものの中で自分と向き合っていく、あるいは何度も丁寧に書き直しをしていく中で、ものを丁寧に見る目を育てていく。そういった経験をしていく。それをそばで見ていると学生自身が少しずつ変化していく経験を重ねているなどというのが伝わってきます。これを「成長する」と言い換えていいのかわかりませんが、そういった効果があるように思っています。

次に、「オープンアーカイブ」の報告です。これは、市内の小中学校の教育機関や市民団体などの資料を通じて交流の拠点とする取り組みの一つです。私たちは写真というものに注目しました。地域で過去に取られた写真を集めるということです。

これは普通の博物館では一般に行われていることです。地域で写真を集め始めたのですが、最初はなかなか集まりませんでした。しかし、都留市にご在住の奥隆行さんが実は4000枚ぐらいの写真を集めて保管されているということで、いろいろお話を伺いに行ったりしながら、その写真の整理を進めてきました。

私の能力は歩みが遅いので、4000枚の写真を整理するのに、3年ほどかかりましたが、それを整理してデジタル化するという作業を昨年、終わることができました。そしてそういった写真の資料を地域の方々と、あるいは社会教育施設と連携しながら、公開していく。またそれを見ているいろいろな情報をそこに書き加えてもらうというような試みを始めました。

写真にあるのは、市立図書館での展示です。これは大学とは違った交流の拠点、図書館ならではのネットワークがありますので、そういったネットワークとも重ねているいろいろな方々に見ていただいて、そこでその写真にまつわるいろいろな情報を積み重ねていくという取り組みの一つです。

また、そういった写真を授業の中でも活用しながら、いま取り組みを始めています。これは博物館学の授業の一コマですが、授業の中で写真を手にして地域に出て、そしてそれにまつわる話を伺ってきて、それを展示するというものです。

学生はそこでいろいろな発見をしていくんですけども、一例だけご紹介したいと思います。これはご存じでしょうか。見た方はいらっしゃいますでしょうか。これは？金山神社あたりの昔の風景で、下駄スケートというらしいんですが、昔は子どもたちがこの田んぼを借りて、水を張ってスケートリンクにして遊んだという一枚の写真です。これを見た学生は、自分は経験があ

りませんから、分からないわけですね。これがいったいどういうものだったかという想像がつきませんでした。しかし話を伺いに行つて、まず下駄スケートというものがどういうものかというのを調べ始めます。そして実際に現場に行くわけです。

これが今の現場の写真です。昔とずいぶん様子が変わっているのが分かります。いろいろお話を伺っていくのですが、そのお話を伺った方から、今度は実物を見せられます。これが下駄スケートらしいですね。このようなものをはいて、昔はスケートをして遊んだ。子どもたちが自分たちのできる範囲で、自分たちで工夫を重ねながら小さな遊びの空間をつくっていった。その学生は、最初はまったくイメージがつかなかったらしいんですが、また話している内容も、さっぱり自分は経験したことがないので、たかだか20年、30年前の話もなかなか通じない。言葉の意味が分からないという状態だったらしいんですが、それが少しずつ分かるようになった。つまり自分のイメージする世界が豊かに広がっていったということを語っていました。それが非常に印象的でした。これは言い換えると、一枚の写真を通して、あるいは地域の方々の写真を通して、自分のイメージを膨らませていくことができた一例ではないかと思えます。

先ほどの『フィールド・ノート』もそうです。何度も書き直しをして、そして地域の方々と交流をする。あるいは写真を通して交流をする。そうやって自分を成長させていく地域というものは、そういった資質というものを鍛えていく場所になるのではないかなあという感じも学生から学びました。

そのような活動を展開していると、予期せぬいろいろな出会いに出会います。私たちは高尾町通りの「プオーノ」というイタリアレストランで、小さな写真展を開催してきました。それは3年目になりますが、小さな写真展です。店主の方々と一緒にきました。子どもたちがいろんな話をします。そしてこの子どもの中の一人が、この中の写真にあったピーヤという名前に非常にひかれて、そのピーヤというのはいったいどういうものなんだということで、夏休みの研究を仕上げたということもありました。

その写真展をしていると、たまたまそこに益子邦子さんという方が来ていらっしゃいました。そのお父さんに当たる方が非常に写真が好きで、その方が多くの写真を集めていらっしゃるといふことで、見せていただく機会を得ました。

これがその写真です。写っているのがどこかと言うと、いまちょうど都留文科大学前駅がありますが、そこの写真だそうです。そこで牛の後ろに子どもが二人乗っておりますが、前の子どもが実はこの写真を撮られた方の娘さんで、邦子さんです。その方が写真があるということで見せていただきました。非常に子どもが笑顔豊かに写っていますが、なかなかこういう写真は今は見られません。こういった貴重な写真がたくさん残っていました。

何度もお話を繰り返すうちに、じゃあ、これをぜひまたコレクションの一部にしようということで、いま話を進めているところです。

その中の一枚です。これはどこだか分かりますでしょうか。建物が一つもなく、一面畑の、本当に桃源郷のような世界ですが、これが実は今の都留文科大学がある田原の地区の様子です。これは昭和30年代の写真だそうです。

そういう写真のコレクションを生かす試みとして、いろんな地域の方々のお話を伺いながら、データに新たな生きた記録を付け加えていこうとする試みをいま始めております。

その試みの一環として、自然のつながりを回復していくためには、生まれながらの子どもたちの知恵に学ぶのがいいのではないかという言葉もあります。そこで昔の方々に集まっていたいで、昔の遊びというのはいったいどうだったのかというのを記録する試みを始めています。

これは懐かしい方が相当いらっしゃるのではないかと思えます。写真というのは不思議なもので、当時を生きてない方でも、懐かしい、あるいは共感を呼ぶ大きな力を持っています。そういったものをこれから大切に資料として蓄積していきたいと思っております。

それから最後に、富士急行線のフィールド・ミュージアムという取り組みです。これは実は最

近構想ができたというわけではなくて、古くはこの元学長であられた大田堯先生、あるいは今泉吉晴先生、こういった二人の方々の発想の中で長年温められてきたものです。ご覧のように大月駅から河口湖駅まで非常にコンパクトに駅が並んでいます。標高差がだいたい500mぐらいあります。大月駅から河口湖まで行こうと思うと周りの沿線のゆっくりした進みゆきの中で景色を楽しむこともできます。また桜などは一カ月ぐらいかけて、河口湖まで眺めることができます。また駅を中心として隣の駅まで歩くこともできます。また子どもたちは駅を中心として周りを散策することができます。こうした富士急行線を利用したい取り組みはないのかとずっと模索してきたんです。

2004年の11月にちょうど都留文科大学前駅が開設されます。その一画をお借りしまして、展示活動が続けてきました。小さな展示スペースです。そこで大学周辺の自然、文化といったものを紹介してきました。

またちょうど大学でビオトープをつくっていましたので、それと同じコンセプトで、構内にチョウチョがやってくる、あるいは自然に親しむ入口にしようということで、花壇をつくる、小さなビオトープをつくるという試みも続けてきました。

これとはまた別にいろいろな活動を大学ではフィールド・ミュージアムとして行っていました。

例えば、附属図書館では、チョウやトンボに親しむビオトープということで、いろんなチョウが吸蜜に訪れる花を植えて丁寧に育ててきました。

また、去年は市の方のご助力もありまして、駅の隣の土地をお借りして、市民の方々と一緒に小さなビオトープをつくる試みも始めてきました。

また、大がかりなものではなくて、コンパクトに小さな観察会をこれまで何度かやってきました。ただ単に裏山と一緒に歩くというだけという活動です。富士急行線がもしフィールド・ミュージアムというふうな位置づけられるならば、こういったものも一緒に取り込んで、駅からビオトープを楽しんでいく、あるいは小学校との交流を図っていく、あるいは小さな観察会を駅を中心として行っていくということもこれからできるのではないかと考えています。

一番最後のところに、駅をフィールド・ミュージアムの情報発信の基地にと書いてありますが、去年の11月に富士急行と日本民営鉄道協会とともに三者で協議会を立ち上げました。そして都留文科大学前駅をフィールド・ミュージアムの情報発信の基地にしていこうという取り組みをこれから始めるところです。こういったこれまでの取り組みをベースにしながら、いろんな情報を発信していく機会をつくっていきたいと思っています。

最後になりますが、新しい交流がこれから生まれようとしている兆しも見えて参りました。実は先ほどご紹介しました大田堯先生ですが、都留で自然博物館構想を最初に構想されましたが、今は埼玉の見沼のほうで広大な土地を今度は歴史自然博物館にしようという構想を立ち上げてらっしゃるそうです。そういった活動ともこれから交流する兆しがいま生まれつつあるということをご報告して私の今日の発表を終わりたいと思います。

今日いらっしゃる方、多くの方々にこれまでご協力を仰ぎながら運動を進めてきました。今後もいろいろお世話になると思います。まだ発表したのは本当に途中の段階ですが、これからもご協力をよろしく願いますという意味も込めて、お礼を込めて、今日の発表を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

——— 以下、質疑応答 ———

司 会： この段階で、質疑応答、意見・感想をお聞きする時間を取っております。いまご発表いただきました北垣さん、ならびに、それまでに話があったことの中で、聞いておきたいこと、こういった感想を持っていますということに関して、会場

の皆様からいただければと思っています。いかがだったでしょうか。どなたかいらしたらお願いいたします。では、どうぞ。

室(大月)： 大月から来た室といいます。持続可能とおっしゃった一部ですが、一部の中に、自然が重要なところを締めていましたが、その中に「人」というところがございます。その「人」の中に文化というのは含まれるのでしょうか。例えば、伝統的な文化の一部というものがその中に加わらないのでしょうか。

司 会： これは北垣さんへのご質問ですか。持続可能という話の中に文化というのが入ってくるのかどうかという問いだったかと思います。

北 垣： 文化というのは当然入ってくると思います。人の営みですので、文化というのは当然入ってくるのではないのでしょうか。

司 会： それがないと、持続という意味がないのではないかということですね。そのようにお考えになられたということですね。北垣さん、下駄スケートなんかもある種の文化だということをお聞きしましたが、そのようなとらえでよろしいのでしょうか。ああいったことをとても大切に引き継いでいく、その意味とか、その風景がどんなところだったのかも含めて大切にしてくのが文化を大事にされるということでしょうか。ありがとうございます。当然、文化も入ってくるということですね。ほかの方、感想、質問をいただければと思います。

清 水(都留市)： 都留市の清水と申します。ありがとうございます。下駄スケート、やったことがあります。実は十日市場の駅前にもありまして、写真がたぶん残ってないかなと思うんですけども、それはそれは懐かしく拝見しました。かなり前までうちのにも下駄があったような気がするんですけども、取っておけばよかったと思いつつ、見させていただきました。

一つお伺いしたいのは、住民とともに、私も少しかかわらせていただいていることもあるんですけども、私のようにどこにでも首を出すという人間は黙っていても出ていきます。けれど、いっぱい持っていらっしゃるのに、なかなかそれが見えないということがあります。おそらく大学側からも感じられないものがあると思います。先ほどお写真の中に、遊びとかいろんなことを聞く会の写真がありましたね。どう見ても男性しかいらっしゃらないんですね。で、高齢者で。

北 垣： なるほど、なるほど。遊びといっても、はい。

清 水： おそらく女性の立場からの遊びとか、生活の中のいろんな思い出って記憶がいっぱいあると思うんです。それをこれからどう引き起こしていくのか。どうしても形式的なものになってきますと、いつも同じような方たちが出てくるんですね。拝見したかぎり、「あの方たちだ」と思う方たちなんですけれども、それ以外の、普段の生活をしてらっしゃる方、普段はなかなか公的なところに出ていかない方たちこそ、もっともつと気が付かないものを持ってらっしゃると思うんです。私の周りにもいらっしゃいます。ただどんどん年を取っていきますので、今後そういうところにどういうふうアプローチするのか。それを私たち住人がどうかかわれるかということがこれからの課題と思うんですけど、それをお伺いしたいんです。

司 会： ありがとうございます。北垣さんお願いします。

北 垣： 実はこの取り組みは昨年からはじめまして、中に女性もいるんですけども、今は集まっていたいて話の感触を伺っているという段階です。これから実際にお宅にこちらから伺ってお話を伺っていかうと考えているところです。ただ、どうしても限界がありまして、どういう交流の場を、例えば写真を通してつくっていただければいいかということもこれからの大きなテーマになっていくと思います。

実はこのコレクションが完成しましたのがちょうど昨年で、これから有効な活用を検討していこう。これを利用して何かいい交流の資料にならないかということで、これから検討を始めていきますので、そういった中で交流のあり方、あるいは記録の仕方をぜひ学んでいきたいと思っております。以上です。

司 会： 北垣さんに僕から追加で質問させていただいてよろしいですか。今のご質問の趣旨の中に地域の住民として何かかかわれること、手伝えること、こういう身近な人で、遊びや生活の中で非常にいいことを記録としてやってらっしゃったんだけど、積極的に公の場に出てこないようなとき、知ってますよとか、かかわりがありますよというふうなときに、どうやってこの交流センターとかかかわれたり、行けるのかという話もあったと思います。何か知っていることがあれば、積極的に連絡くださいというような窓口みたいなものもあるんですか。

北 垣： はい、窓口を作りたいんですけど、実はまだ交流センターも、専任を置いて対応するというシステムにはなっていませんし、人的な対応の限界というのがあります。ですので、与えられた中で、どういうふうに応えていけばいいのかというの、今後の課題になると思われます。

司 会： ありがとうございます。どうぞ、続いてやりとりしましょう。どうぞ。

清 水： いまお聞きしながら、提案なんですけれども、これ、せっかくですから、地域へ持って回って、添乗していただく。特に高齢者が集まっております敬老会とか老人クラブとかに入り込んでいただく。そうするといろんな話が出ます。ものすごく出ると思います。ですから、積極的にぜひそういうところを利用していただきまして、私も60過ぎていますので、敬老会に入っております。名前がいやなんですけれども、一応入らせていただきました。そういうところへ来ていただくと、ものすごい話が出ると思います。そういうところはお手伝いできますので、ぜひ利用してください。お願いいたします。

司 会： ありがとうございます。ご提案、ありがとうございました。このように地域の方のご提案を受けて、さらに広がっていくような話もあろうかと思えます。皆さん、質問、ご意見、ご提案、ありましたら、いただきますが、よろしいでしょうか。

森 江 (本学名誉教授)： 都留にお世話になっておりました森江でございます。坂田先生のご努力でGPをおとりになって非常に敬服します。たいへんよく発展してきていると感じさせていただいております。もう一つの視点を加えて、ここは私が着任したときは「学園と繊維の町」というキャッチフレーズが都留市の駅前に立っていたんです。その繊維の痕跡がまったくかどうか知りませんが、都留に住んでない人間が言うのはおこがましいんですが、ないんですね。かつてはのこぎり屋根の工場や、その他のものもありましたし、川が染料で染まっていた時代も私の着任後にもありました。何かやはり糸から蚕へ、蚕から繊維へ、繊維から布へというプロセスを、このフィールド・ミュージアムの中に組み込んで、繊維の町であったということを継承していくということがあってもいいんじゃないか。特に機織りなんかお年寄りの方で、手織りでできるわけですから、そういうのを子どもたちや若い人たちに伝承したらいい。食の問題はいまいろいろ言われておりますけれど、衣の問題は使い捨ての時代になっています。そうじゃないので、私も毎年お正月には着物で講義をすることがあります。それは私の父が、50年以上前につくったもの。それが70年ぐらいたって使えるわけですね。だからリユースということから言えば日本の着物というのは大変お手本だったろうと思います。そういうあたりの視点をフィールド・ミュージアムの中に加えていただけた

らと思っております。以上です。

司 会： ありがとうございます。これも北垣さんからコメントをいただきますか。もしくはどなたかいただきますか。

坂 田： それでは、私が。私は森江先生の後に着任したわけです。当時は地域のことに、まったくといっていいほど関心がなく、自分の研究だけに邁進するという研究者だったんですが、ここ数年、地域交流センターやフィールド・ミュージアムにかかわりながら、地域の中で自分の知らないことがたくさんあって、それを知るだけですごく楽しいんですね。学ぶ喜び、知る喜びで、自分が自然とつながって生きてるんだということを実感するというのがとても楽しかったです。

この間、十日市場をぶらぶらと歩いていたら、ぱったりおじいさんが水田の水見をしてたんですね。そのおじいさんと話をしていると、そのおじいさんはごく普通のおじいさんなんですけど、いろんなことをご存じなんです。例えば、栗の木は草木染めみたいにすると黄色の色がとれるだとか、柳の木の皮からこんな色がとれるとか。いろいろ話を伺っていくうちに、昔は都留では繊維工業が非常に盛んで、自然の恵みを利用しながら、糸を染色して織物に仕上げていくということが普通に行われていたということです。それが私にとっては非常に新鮮で、かつ普通のおじいさんがそういうことをよく知っているというのが、さらに驚きで感動したことを覚えています。たぶん都留の中にそういった人たちがまだたくさんいらっしゃると思うんですね。たぶんこの機会を逃してしまうと、そういう伝統的な知恵や知識、自然からものを得て、うまく利用して循環型の生活、ライフスタイルとか、産業を興していくということができなくなるんじゃないかと最近、本当に思っています。

ですので、森江先生がおっしゃってくださったように、織物を軸にして何かできることがあれば、やっていければなあと思っていますが、それには私たち大学だけではなくて、地域の皆さんの協力がぜひ必要です。大学が何か先頭を切ってやるのではなく、地域の方たちが自分たちで組織をつくって、私たち大学もその組織と一緒にやっていくというような、パートナー的な役割を今後築いていければと思います。長くなりますので……。

司 会： ありがとうございます。繊維というのはとても大事な要素として位置づけられるのではないかとお聞きしました。もうひと方いただきまして、次の発表に続きたいと思います。では。

二部(大月)： 大月に住んでいる二部と言います。いまお話の中でいろいろな取り組みがあって、小さなきっかけからどんどん取り組みが大きくなっていくとき、例えば富士急行と一緒にやるというように、取り組みが形になっていく段階で、先生方同士で相談してやっていくのか、学生の方たちも参加して話し合っていくのかとか、かたちにしていく段階をどのようにやってらっしゃるのか興味があるんですけど。

司 会： では、これにお答えできる方、お願いいたします。どなたでしょうか。北垣さんですね。はい。ことが大きくなっていくにつれて、そのプロセスは先生同士の話し合いで進んでいくのか、学生も一緒になってこうやっているのか、進め方自体についてお話を聞きたいということです。

坂 田： 多分それぞれなんだと思うんですね。それぞれ得意なところとか、興味のあるところで、学生と授業内や授業外の時間を使ってやっていることが少しずつその地域の人たちと交流しながら実りになっていくというのが今の段階です。GPなどで位置づけをすることによって、それぞれ別個にやっていた取り組みが少しず

つつながりつつあるというのが今の状況です。

なにか最初からこういうのをやろうとって頭の中から始まったわけではなく、それぞれ地域に出て行って地域の中で興味のあることをやっているうちに、その中で共通事項があって、じゃあ、一緒にやってみようというかたちで輪が広がっているという感じです。最初から大きいことをやろうとしたわけではなく、地域に根ざして自分たちにできることをやっていたということなんです。ほかに何かありますか。

司 会： 北垣さん、いかがでしょうか。

北 垣： 私の場合は、個人的に本当に責任持てできるのかどうかというのがありますので、そういったときには必ず部門内の方々に相談しながら進めていきます。学生と一緒にできることももちろんありますし、教員の知恵を借りながら一緒に進めていかなければならない部分もあります。そういった線引きというのが非常に難しんですけども、なるべく発展的に続いていくと言いますか、そういったものを丁寧を選びながら、相談しながら慎重に進めているというのが現状です。

いろいろな取り組みを今日ご紹介しましたが、決して順調に來たわけではなくて、非常に長い時間がそれぞれかかっています。一つひとつの取り組みが少し手応えを持って感じられるようになるには、当然試行錯誤は必要ですし、また長い時間がかかる。それはむしろ当然のことかなあと最近分かってきました。

司 会： 二部さんのお聞きになりたかったこと、聞けていますか。はい。もう一つ、どうぞ。

二 部： 物事をリードする方というか、路線をこっちに行こうという、導くような立場の方というのはいらっしゃったりするんですか。

司 会： あるプロジェクトが進んでいくときに、それを導いていく役割はだれが担っているのかという質問でしょうかね。

坂 田： 例えば、今回のGPの場合に限ってお答えすれば、それは話し合いの中で生まれてきました。やっぱりだれかが何かを押しつけて決めるというのではなく、何となくみんなキーワードがいくつかあるわけですね。地域とか、人とか、農業だとか、休耕地が今は都留にいっぱいあって、だとか、自然がとても大切だと、いくつかキーワードがあって、その中で自分たちに何ができるかということと、どうやったらおもしろいかということと、やっぱり数人で何回も話し合って、全体像を練り上げました。だから、得意なものを持っている仲間が何人が集まって、それでみんながどういうことが自分たちにできるかを話し合うことを何回も重ねました。答えになっていますかね。

司 会： ありがとうございます。フィールド・ミュージアムの活動が多岐にわたっているいろいろなプロジェクトが動いているので、いろいろなかたちがあるかと思えますけれど、いずれにせよ、話し合ってそれぞれ得意な持ち回りの方が担当されているというふうに聞こえております。一人目の発表をいただいたところなので、3本柱の「自然に学ぶ、農に学ぶ、地域に学ぶ」の2本目の柱に移って行って、また話題を広げていければと考えております。

## II. 農に学ぶ：自ら食を生み出す ～大学農園の挑戦～

都留文科大学 教授 西本勝美

先ほどご挨拶申し上げました西本ですので、顔はもうよろしいかと思しますので、こちらに引込んで報告させていただきます。報告内容につきましては、この冊子の7ページあたりに文章で載せておりますので、それをちらちら見ながらお聞きいただければと思います。

「農に学ぶ」という環境教育GPの柱の一部として大学農園整備事業という名前で教員や学生が農業にかかわる事業を組み込んでいただいたわけです。この環境教育GPが始まったのでやったというものが一つあります。三つ取り組みがありますが、あとの二つは環境教育GPが採択される以前からやっていたものです。それを環境GPの大学農園整備事業に位置づけることで、さらに拡充を図っていくと考えたわけです。三つ取り組みがあるわけですが、古い順番にその活動の紹介とGPとのかかわりを含めて報告したいと思います。

まず一つ目は上戸沢にありますので、勝手に上戸沢農園と呼ばせていただきます。「月待ちの湯」をご存じかと思いますが、あの「月待ちの湯」の一本上の道です。二十六夜山の登山道の下です。そこに、いま映っているところですが、2004年の3月に大学職員の紹介で、土地を借りることができました。これは大規模な棚田といいますが、段々になっている大きな田んぼがあって、それが休耕地化しているところです。そのうちの一枚です。

広さは450㎡ありまして、坪でいうと136坪ということになります。4畝強といいますが、5畝弱といいますが。私はそれまでほとんど農業の経験がありませんでしたので、その立場からすると広大な土地で最初は途方に暮れたという感じです。現在、この一番手前から写っている一番奥までですが、大きく三つに区分して作付けを分けたりして使っています。これは昨年度末、今年の3月25日の写真です。ご存じだと思いますけれども、この真ん中に植えているのは小麦です。3月の末に青々としているのはほとんど小麦だけでして、このへんに小松菜とか白菜の残りがあるという3月末の状態です。2004年の3月に始めましたので、この3月がきますと、丸5年が終わるということになります。5年間やってきた取り組みです。

この取り組みは私がまったくの個人で始めました。有機無農薬農業をやってみようということでした。そもそもの趣旨はいろいろなことを考えていまして、タイトルにもありますが、「自ら食を生み出す」ということを考えていて、そういう実践に自ら携わることで、今の消費一辺倒の生活スタイルや価値観を見直すこととか、食の安全、農業の問題、それから農業とかかわらせた地域の今後という問題を考えたかったのです。

私、初等教育学科の教員ですから、やはり地域と教育、あるいは農業と教育というようなことを考えるうえで、そういう考えを深めるということを目的にしていました。もちろんやり始めた当初から、個人でと言いましたけれども、ゼミの学生など、学生にかなりかかわってほしい。学生がかかわりやすいかたちを考えていくということはもちろん意識しておりました。一人でも、ちょっとでも携わってもらうことがきっかけになるのではないかと考えておりました。

一番身近なところの学生に声をかけてきたわけです。うちの大学では主に3年生4年生が教員のゼミに属するかたちが多いんですけども、動きやすい3年生のゼミ生に一番積極的に誘いをかけて、かかわってってもらうというかたちで5年間やってきました。

さすがに5年間やってきますと、そこそこ言いますか、少しずつ本格的な農業といえるような実践になってきておまして、今では季節ごとに植えてあるような野菜と小麦、大豆、蕎麦といったものを含めて、年間を通して20品目以上は育てて収穫できるようになっています。

少し写真を見ていただきたいと思います。これは年度末で、ここから一年がスタートするわけ

ですね。これは同じときの小麦のところだけを撮ったものです。3月末から4月にかけて、少しずつ植えるべきものの種や苗を植えていくわけですが、こういうかたちで畝を立てるわけですね。有機無農薬ですので、鋤き込むものは有機系のものでばかりです。これは4月の頭に、ご存じだと思いますけれども、ジャガイモを植えたときです。これは夏野菜の苗をいくつか植えております。

3年生の学生のデビューですが、4月2週目ぐらいから大学の授業が始まりまして、3年生のゼミ生ですから、初顔合わせという感じにもなるんですけども、この写真は4月30日ですね。4月の末からゴールデンウィークというのが、まずうちの学生がこの畑の作業にかかわり始める最初の時期になります。これは学生が小さい耕耘機を使って畝を立てる作業をやっているところですね。これはナスでしょうか。手前、ナスの苗を植えています。

これはスナップエンドウでしたか、その棚を作っているところです。こんな感じですね。ゼミの時間に思い切ってみんなで行こうというかたちです。何をやってんだかということですが、ゼミの時間になるべく全員で行くという機会を何回か設けて、あとは週末や学生の都合のいいとき、あるいは私の都合のいいときに「何日にやるけど、参加できる人は参加して」というときのときもありますし、それから前もって、「このあたりでこういう大きい作業をやりたいから、いつだったらできるか」ということを学生に打診して、いちばん人数が集まりそうな日に設定する。

いかにも慣れぬ腰つきという感じですね。これは学生がお昼休みしているときに撮った写真ですけども、本当に学生が畑に来て作業すると、本当にいい顔になるんですね。天真爛漫といえますか、屈託のないと言いますか、本当に顔の表情というのは変わるんですね。

これ、真ん中にいるのは私です。学生から「あまりにも様になっている」と言われています。これは春先、最初うちの畑ではだいたいスナップエンドウとブロッコリーあたりがまともに収穫できる最初のものになります。これは7月ぐらいの写真ですね。

これはサツマイモですね。これはピーマンでしょうね。これはもうちょっと後の写真ですけども、今年は畝の間に大豆を植えたんです。こんな感じで大豆もよく育ちました。これは最終的には鹿にほとんどやられてしまったんですけども、大豆などもこうやって植えています。

こういう収穫ですね。これはゴーヤです。ゴーヤの棚を組んでいるところです。左に写っているのは、本当にこれを頼りにしているんですが、小さい耕耘機です。これはご存じでしょうけれど、オクラの花ですね。とってもきれいな花です。このときなどは非常に収穫がありまして、学生たちもとても喜んで持って帰りました。

ちょっとここで止めておきます。こういうことをやってきまして、5年目になったわけです。この2008年度は、環境教育GPの一環に位置づけるということで、少しお金も使えるということになりまして、新しいことをやってみようということで、無謀なことをやってみたという話です。

それが「ミニ水田づくり」とでも言えればいいんでしょうか。実はこのあとに「田んぼクラブ」という報告をしますけれども、それも今年で4年目になりまして、これまでの蓄積があったものですから、本当にゼロから水田稲作というものをやってみようということで、水田を作ってしまったという話です。

この上戸沢農園のちょっと日当たりが悪くて使いにくかった南西の角にこのぐらいの区画を設けて、ここを水田にしてみようという取り組みです。学生に携わってもらって、こんな感じで進めていきまして、こんな感じになっていったわけですね。

広さは文章のほうに書いてありますけれども、本当に小さいんです。短い辺が2.8m、長い辺が10mです。28㎡、坪数にすると8.5坪ということですが、こういうふうになりました。これは初めて水を入れたときですが、水路から遠いんです。これは水を入れて、荒代掻きにあたることをやっているところですが、こんな感じですね。このエンジンポンプを水路から50m細いロープで引っ張ってくるということなんです。このエンジンポンプなどをGP予算で買わせていただいたというわけですね。

これはやっとのことで、代掻き。この小さい耕耘機1台しかありませんので、これでなんとか

できないかとやりました。途中で止まったりして大変だったんですが、なんとか植えられる状態にしました。残念ながら植えているところの写真が撮れていないんですが、これは田植えしたあとです。こんな感じです。

これは夏場です。草に埋まっていますけれど、こんな感じです。これは9月の末です。こんな感じです。これは10月の初め、ここまでなんとか育ちました。それで、田植えや稲刈りは量もこれだけです。当然、手植え、手刈りなんです。その先はもっとこだわりました。

これは稲刈りしているところですね。こんな感じで。はざ掛けするところもこの3人の後ろに隠れてしまうだけの幅なんです。本当にこんな少なかったのかと思ってしまうかもしれませんが、これだけです。

でも一応はざ掛けで天日乾燥するというので、この後はこだわらして、これは機械自体が見えていないんですが、「足踏み式脱穀機」です。これで脱穀をしました。この後は別な写真が出てきます。「唐箕（とうみ）」をかけて、昔ながらどころか江戸時代並みの作業をやりました。そういう写真はあとの小麦とか蕎麦のところから出てきます。

時期が後先になります。最近、小麦に力を入れています。大変おもしろいものです。これは5月末の写真です。ちょうど花が咲いたところ。これが6月の末になると、こんな感じになります。いわゆる麦秋というやつですね。麦の秋、たいへんきれいです。黄金色に輝いています。で、いよいよこれは麦刈り。これは7月の頭にやりました。そしてこんな感じで、これは相当量がありまして、こんな感じです。小麦の丈が短いですが、そこそこの量なんです。

これを2週間ほど干します。これはちゃんと写ってますけれども、「足踏み式脱穀機」です。これを使って脱穀しました。小麦の場合は脱穀しますとそのまま粉がはずれますので、とても簡単なんです。ただし、これでやると当然こういう状態になりますので、まずはふるいにかけたうえで、これが登場です。これは「唐箕（とうみ）」ですけれども、実は、これは私が作りました。自家製です。薄いベニヤ板で作ってあるので、とても軽いです。これを作りまして、こういう作業ですね。こういう作業です。これでゴミが完全にとれた小麦が穫れます。

もう一つ力を入れているのに蕎麦があります。これは8月末に、植えてちょっと後で芽が出たところですね。これはどんどん成長していきます。これは11月の頭、収穫近くになりまして、これはこうやって束ねて、これもちょっとはざ掛けにしました。それで、これを今度は手でポンポンたたいたり、しごいたりしてはざして、またこの唐箕の登場です。こんな感じで、いわゆる玄蕎麦ですね。この状態にしまして、なんとこれはこの後、粉にひいて蕎麦を打ってみました。ここまでやってみました、ということです。

これは9月の末の写真ですけど、実は大豆がほとんど鹿にやられてしまっていて、業を煮やしてこういう柵をつくったんですが、ほとんど効果はありませんでした。このぐらいのものでは到底だめだということです。

これは12月、11月に植えた小麦ですね。冬場の収穫はこんな感じです。雪が降ると今度はこうなります。お分かりかと思いますが、標高は多分ここよりさらに200mぐらい高いので、1回雪が降ると本当に3月まで解けません。こんな感じです。小麦はこの下で元気に生き残っていて、雪が解けるとパッと顔を出してくれるというわけですね。これが上戸沢農園です。

次に「たんぼクラブ」の取り組みですけど、実は最初のいきさつはいまそこにお見えの杉本さんが最初に声をかけてくださったのです。そこに文章で書いておられますので、文章のほうでご覧いただけたらと思います。

今年の取り組みは、これまでとは少しスタイルを変えて、農業委員さんから自立して、なんとかすべて自分たちで責任を持ってやるというかたちにしないと活動の継続自体が危ないという状態になってきました。そういうことで、そこにGPのお金も使わせていただくということも含めて、心機一転まき直しを図ろうということをやっていた活動です。

これは場所はさっきのところとは全然違っていて、岡島のところの交差点のところから新しく

できたウエルシアというドラッグストアのちょうど真向かいです。道をはさんで真向かいで、広さは正確に計ってみると585㎡ということで、6畝弱ですね。その大きさの水田をお借りして、本格的な普通の稲作をやっている活動です。

今年は全部自分たちでやろうということで、先ほど終わりましたけれども、種籾の消毒もしました。これは消毒をやっているところで、それからこの後の催芽ですね。そういうことも全部やってみました。そして、これはぬるま湯につけて催芽させているところです。これは最初の播種の作業をやるところで、大原の育苗センターの前でやりました。

こちらに今背中が写っているのが富士農務事務所の田中由紀さんという方で、こういう専門家の方の指導を受けながらやっています。

今年は自主的にやりたいという学生を募ったんです。チラシやポスター、それから何人かの教員が授業で声をかけたりとかたちで募りました。すると15名の学生が三つぐらいの学科から集まってくれまして、教員は5名ぐらいで取り組みました。これは播種作業ですね。

これは数日後、きれいに芽が出たところの写真です。これは田植え準備をやっているところですね。

今年は、さっきの消毒以外はなるべく有機でいこうということで、元肥にするのも、こういう有機系の「米太郎」というものを取りよせて、これを使いました。これをまいているわけです。苗が大きくなってきましたので、荒代掻き。これは都留の農協の営農センターにお願いして、委託でやっていただきました。これは田植え当日です。残念ながら雨でやりにくかったんですけど、全部手植えでやりました。

これは夏の間の水見ですけども、これは曜日ごとの当番にして、何曜日はだれとだれというように二人ずつぐらい割り当てをして、いろいろトラブルもありましたけれど、ほとんど学生たちでやりきりました。水見です。

これは稲刈りの日ですが、この日も残念ながら雨にたたられてしまったんですけども、なんとか全部の量を手刈りで刈りまして、こういうはず掛けにしたということです。

これは2週間、3週間ぐらいたちまして、ちょっと乾き過ぎてさせてしまったんですけども、脱穀ですね。これは農業リーダーの清水さんの機械をお借りしてやりました。これは記念写真です。

これは試食会です。残念ながら日が悪かったのか、学生の参加が少なかったんですけど、おいしくいただきました。

今年の収量は6畝弱と言いましたが、俵数にして6俵ちょっとありました。籾ですけど、いわゆる1畝1俵ということで、なかなかの出来だったんです。栽培中まったく農薬を就没んでした。ということもあって、少しイモチ病が出たんですね。それで残念ながら、精米してみると、くず米がずいぶん多くなってしまいまして、やや食味に欠けるというところがあったんですけど、学生たちは「とてもおいしかった」ということを言っています。

「たんぼクラブ」の取り組みにかかわった学生に感想を書いてもらいました。時間もあって全部は紹介できませんけれど、特徴的なことだけお話しします。やっぱり稲作というのは多分手間がかかるだろうとか、その大変さというのを聞いたことはあったけれども、実際にやることでその大変さがよくわかったという感想が多いですね。「来年も参加したいです」と言っている学生もすでにあります。そしてやっぱり強い印象に残ったのが、水見のことです。実際の学生の言葉を拾うと、「水見も経験して苦勞を知るとともに、その重要性が分かった」とか、「中でも一番大切だと思ったのは日々の水管理です。曜日ごとに担当を決め、水量を管理したのを今はとても懐かしく思います」とか。「作業そのものについても慣れるまでに時間がかかったし、慣れてくると、その作業のつらさにお手上げ状態だった」というようなこともある。「だけど来年もやってみたい」というようなこと。

もう少し詳しく書いている学生がいて、水見のことです。「夏休み、ローテーションを組

んで」というのが、その曜日ごとの当番を決めたことなんですけど、毎日だれか学生が水見に行くというかたちでした。「一日でも放っておくと土が乾いて地割れを起こしたり」、そういうこともありました。「かといって水を入れすぎると」というか、掛け流し状態になってしまったことが何回もありまして、そうすると、ちょっとこの学生は誤解しているんですけど、「水温が下がりすぎて、藻が生える」というようなことですね。そういうことが分かったと。「米を作るということは、ほぼ毎日イネと付き合っていかなければならないということが分かった」という非常に重要な気づきをしているかと思います。そういう感想などを学生は寄せています。最後にほんのちよっとだけ。

三つ目の事業として、田原農園という取り組みがあって、冊子の原稿を見ていただきたいんですが、これはこのGPで大学農園整備事業をやるということで、大学にできるだけ近いところで、事業とタイアップしたような取り組みが考えられないかということで、社会学科の田中夏子先生などに探していただいた土地なんですけども、こういうところを探していただきました。これは文大駅から岡島のほうへ50mほど歩いたところにある線路際の土地です。見てお分かりのとおり、宅地です。宅地なんですけど、持ち主の方が少し畑をやっていたり、やってなかったりしているという、去年の3月末にこういう状態だったんですが、これを田中夏子先生と私で一日ここをきれいにする作業をやりました。こんな状態だったんですけども、最初と同じ角度で見ると、ここまできれいにしました。ここに写っているのは田中先生です。これをどういうふうに使うか考えていったんですけど、なかなか授業と組み合わせてというかたちの使い方は難しいということが改めて分かりました。

歩いて5、6分なんですけれども、5、6分でも離れていると、授業中にちょっと行ってまた帰ってくるということは非常に難しいわけです。そこに書いてありますように、木下邦太朗先生という非常勤の先生が自分の授業で少しでも学生に農業を体験させることをやっていたりします。それは坂田さんや理科教室の好意でS1という部屋のすぐ裏側に小さい農園をつくっていただいて、それを授業と組み合わせてやっていたりします。その先生にこの田原農園の使い方がないかと考えていただいたんですが、残念ながら今年度についてはうまく取り組みはなかなか考えられませんでした。

これは結果的には半分は割って、奥側、線路側の半分をこの田中先生を含め3人の先生方がいま少しずつ野菜を植えています。そして、手前側の半分をやはり木下先生の授業に出ていた何人かの有志の学生にサツマイモを植えてもらって、秋に収穫するというふうには、今年はこの畑を使いました。これは今後どういうふうにしていけるかいろいろ課題があるところです。報告としては以上です。(拍手)

#### ————— 以下 質 疑 応 答 —————

司 会： ありがとうございます。「農に学ぶ」ということで、「自ら食を生み出す～大学農園の挑戦～」ということで、西本さんから発表をいただきました。短い時間ですが、ここで1、2名の方の質疑応答を受けることが可能です。どなたか会場からいらっしゃったらお願いします。はい、どうぞ。

坂 田： 「足踏み式の脱穀機」とか手作りの「唐箕」という機械とか、非常に伝統的な、昔ながらの手法を用いて学生さんたちと一緒に農業体験をされたということなんですけれども、最初にどなたかの質問で、持続可能な社会ということの中には、文化ははいつてこないのかというお話がありましたよね。これがまさにその質問の答えに通じるものかなと思うんです。伝統的な文化を生かし、現代的ではないし、大量生産もできないやり方でやっています。このようにしてやっていくことを通して学生たちはどういうふうに関与するかとか、何を学ぶかとか、そのへんのこと

とが何かあれば、お願いします。

西 本： はっきり言って私の趣味なんですけれども、いま両方写っていると思います。「足踏み脱穀機」は実は見てのとおり新品でして、現在まだ製造販売されているんですね。それからこの奥にあるのが自作の「唐箕」ですけれども、私がこういうものをあえて使ってみたいと思ったのは、機械だったらいつでもできる、だれでもできるし、いつでもできるけれど、こういうものを使ってみるという経験は本当に意識的にエネルギーをかけてやらないとできないですよ。

これをやってみると、私も本当に実感したんですけれど、この足踏み脱穀機は能率がとても悪いです。わずかこれだけの小麦とか米を脱穀するだけでもすごい時間がかかるんですね。ましてこれが一反あったら、どれほどになるかなと想像すると、とてつもないことだと思っわけです。ましてや一反だけなんて昔やっていたわけはありませんから、何反もの、場合によっては何町もの米を、こういうもので処理してしたという、そこに思いをはせる。とにかく単調な同じ作業をどれだけ長い時間続けなければいけないのか、そういうところに農業の本質の一つがあるな、ということが実感として分かるんです。

ちょうど今年ゼミに茨城で米をやっている農家の学生がいましたので、その学生もこれにずっとかかわってくれたんですけれども、いま農家をやっていたらしゃる方だからこそ当然なんですけれども、こういう作業はもちろんやったことはない、初めてのことだということで、何か感慨深そうな感じだったんですね。

何かこういうことを通すことによって、機械化によって見えにくくなった農業というものの根幹にあるもの、人間のかかわり方というのがそもそもどういものなのか、そういうことがすごく感覚的に、実感として分かるような部分があるなと考えています。

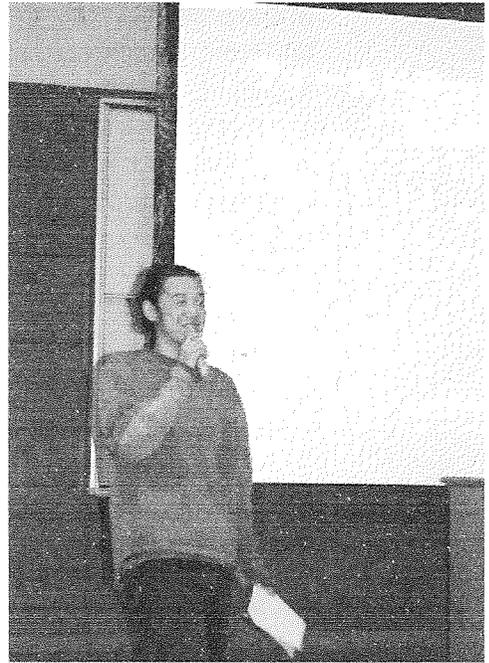
### Ⅲ. 地域に学ぶ：今夜は大家族！

#### 都留フィールド・ミュージアムカフェ奮闘記

都留文科大学 比較文化学科4年 河野 格

僕は社会学科ではないんですが、比較文化で本的に世界のこととかグローバルなこと、戦争問題、紛争問題、貧困問題とかを学んでいます。僕は、世界のことを学ぶにつれて、結局は世界に飛び出しても、その地域のことを学ぶのだということを大学で覚えました。だったら、もう一度自分の足元を見直してみようということで、僕もフィールド・ミュージアムというものに取り組んできました。

今回フィールドミュージアムカフェという取り組みについて皆さんに少しご紹介したいと思います。まずは、フィールドミュージアムカフェとはなんぞや、存在すら知らない人がほとんどだと思うんですけど、この一枚の写真を見て、皆さん、少しイメージしていただきたいと思います。では、どなたかに聞いていこうかと思います。では、藤本さん。この写真を見て、このカフェは何をするかと思いませんか。



**藤本** そうですね。畳があって、板壁があって、見るからに古い農家の一室のような感じがしますね。その中でお茶を飲みながら昔を語り、将来の夢を抱きながら、若者、それからお年寄り、すべての中で未来を見つめる楽しいお茶会のような感じがします。非常になごやかで温かみのある雰囲気のある場所ですね、と思います。

**河野** はい、ありがとうございます。ほぼ正解ですね。僕が説明する余裕はもうないです。では少しカフェの説明をする前に、視覚から皆さんに入ってもらいたいので、2枚目をお願いします。これはカフェの最中です。だれかが何か写真に向かってしゃべっています。で、聞いている人がいて、お茶を飲み、何かを食べていますね。このお二方なんですけれど、小形山という都留市の地区に住んでいらっしゃる30代の方、一人はけっこうご存じだと思いますが。(2枚目をお願いします)

これも同じ場所ですね。前に二人、人が座っています。だれかとだれかがしゃべっていて、それを聞いているゲストというかたちに見えるかと思えます。

先ほど藤本さんがおっしゃったとおりです。カフェというものは、簡単に言ってしまうと、みんなでご飯を食べながら、わいわいしているんなことについて語り合おうというざっくりばらんな井戸端会議みたいな空間であります。

ですが、やはり意図がありまして、そこに書いてありますように、主役という方がいます。その主役は地元の人、地元の自然、地元の暮らしとなっています。その「地元の人、地元の自然、地元の暮らし」なんですけども、この地元という部分は都留市ではなくて、都留市のさらにもっとミクロな、地区ですね。小形山、十日市場、上谷、田原、境、桂町、いろいろとあると思いま

すが、その地区の人、自然、暮らしに焦点を当てて、その人たちと一緒にその地区の自然や文化について語る場で、お茶を飲みながらわいわいする場であるということです。

これは、昨年6月に、清水さんもご協力いただいた十日市場の自治会館で行われたカフェの様子です。皆さんが何かを囲んでお茶をいただきながらわいわいしている様子がうかがえるかと思えます。

カフェは特に何かやり方とかスタイルがあるかと言いますと、そういうことは決まっています。決まっていることは二つあります。一つは料理を参加者全員が一品持ち寄ることです。持ち寄るといっても強制ではありません。皆さん、地元の方々や学生に呼びかけて持ってきていただくという、あくまで任意のかたちをとっていますので、もしかしたら料理がないということも危惧されますが、そのためにカフェの実行委員のほうで、毎回、一つや二つ、汁物だったり、スープだったりといったものを用意させていただいております。過去4回開いておりますが、料理は有り余るほど地元の方が持ってきてくださって楽しい雰囲気になっています。

それともう一つお決まりのことがあります。それは外からゲストを招くということです。そのゲストには、何か特に秀でた者を招いているのですが、ここ最近はミュージシャンに偏っています。この方は河口湖のギャラリー喫茶ナノリウムから来ていただいたナカウエさんです。ナノリウムとはという富士吉田の手前の月江寺あたりで町が企画しているミュージアムでもあり、ナカウエさんにはフォークソングを歌っていただきました。

これもゲストを招くということは決まっていますが、ミュージシャンと決まっているわけではありません。ですが、今までいつもミュージシャンとなっていますので、今後活動を続けていくについては、どんどん別な人、例えば書家であったり、能楽師であったり、マジシャンであったりといったいろいろなスタイルの人を招いていきたいと思っていますところでは。

カフェというのはだいたいどういうものか、皆さんお分かりになったかと思いますが、なんかわいわいする場みたいな感じというイメージ、ぼんやりと漠然としているかと思えます。結局、何をするのかと決まっていんじゃないかと思うかもしれませんが、実行委員や我々自身も毎回何をしようかと言いながら作り出すものなので、漠然としたままのイメージでよいかと思えます。

今年は1月16日に、盛里、中心は朝日馬場になりますが、朝日馬場で第4回目のカフェを開かせていただきました。今回は一部、二部、三部構成になっていまして、第一部として、ここは都留文科大学もかなりゆかりある石船神社でのムササビの保護活動と連携して観察会を行いました。

ちょっと暗くて見えないんですけども、最初は4時半ごろから始まりました。学生と地元の方、それから都留の朝日馬場以外の地区から集まった子どもや親子さん、上野原から来ていただいた学生さんとかを交えて、前に立ってしゃべっているのは社会学科2年の宮崎くんですが、ムササビ観察について彼がいろいろしゃべってくれてくれました。

最初は、これは糞を集めているところですよ。小さい子や学生と一緒にになって、ムササビの糞を探してみようという感じでわいわいやっているような感じです。

こういう感じで、手にある丸い物が糞ですかね。あれはけっこうでかいですね。以上になります。

朝日馬場では、ムササビ観察に焦点を当てましたが、毎回こういうことをするわけではなくて、カフェを開く朝日馬場という土地はムササビというものと一緒に育んできた文化があったからです。朝日小学校というのが近くにあるのですが、そこの生徒たちがムササビを保護するためにエサやりを続けているということもありましたので、そこの地域の特性を生かして、今回のカフェはムササビを出していただくとしたのでした。

これは、学生たちが立てた朝日小学校のムササビの箱に子どもがちょっと乗っかけているところです。

このときはムササビを見て、そこの神社の前で朝日小学校の人たちと、しらいみちよさんとい

う朝日馬場に住んでいらっしゃる女性シンガー——盛里の地区の歌をつくっている方ですね——その方と一緒に寒い夜だったんですけど、歌いながら、ムササビのことについて考えたりもしました。

このように、外で今回の第4回のカフェが開かれて、ムササビ観察がされている最中に、中では準備をしているわけです。この方は朝日馬場に住むシバタさんという方ですが、この方は宮大工の方で、いろいろ今回のカフェの際にご協力をいただいた方です。

会場はお客さんが入る前はこんな感じで準備が整いました。下に敷いてある畳も、夢庵の下にある久保田畳店から廃棄する畳をもらったものです。この畳店は、カフェのことについて説明しに行くといつもお茶やお餅を出してくれます。食べ切れないほど出してくれるんですけども、そういうかたちでつながりをつくって行って、畳もご提供いただきました。

それで、今回は盛里の写真を、学生が歩いて写真に撮ってきたんですね。あとでこれを中心に話が展開される。これは過去4回開いているんですけども、だいたいお決まりのようなスタイルで、地元の自然、その地区の暮らしに焦点を当てているので、ここを切り口にその地元の方とのやりとりをします。その交流、話し合い、語り合いというのは欠かせないカフェの一つのポイントであります。

それでムササビ観察会が終わりまして、皆さんがぞろぞろと、自治会館、盛里コミュニティセンターというところなのですが、帰っていきます。

先ほど言いましたように、料理は一品持ち寄りですので、みんな持って来なかったらどうしようということで、実行委員のほうでけんちん汁をつくっているところです。

当日は、学生、地元のおじいちゃん、おばあちゃん、県外、市内の方から、だいたい60名近くが集まりました。こんな感じでわいわいやっているところです。

それで、先ほど言いましたように、左の彼女が盛里の地区を散歩して写真を撮ってきました。その写真を切り口に子どもと大人とみんなでやりとりをしているところです。今回、主に馬頭観音の話と、馬車が朝日馬場のところを通っていたという話。馬を飼っていたという話を皆さんがしてくれました。馬頭観音のことは朝日の小学生が説明してくれたりもして、なかなかおもしろかったです。この方は地元の朝日馬場の小俣さんという方で、写真を見たら、この方が住んでいるお家が偶然、写真収められていたんです。すごく大きい豪邸なんですけれども、それについていろいろ話している最中でございます。

これは何でしょう。僕も分かりません。だれか分かる人はいませんか。こんにゃくですか。こんにゃくをどうしている感じですか。こんにゃくいも。あく抜き？ いもをあく抜き。すでにこんにゃくになっている。

これは何でしょう。米を入れる場所？ 違う。なんか、どなたか分かる方いらっしゃいますか。ちょっと分からないですね。区分けになっていますが、何かから出てきて。蚕。結局答えが分からない。どんどん謎は深まるばかり。

これもおもしろい神社で、上に面がついている神社ですね。これは裏側は白い鬼のお面がついている神社であります。

結局、答えは分からないんですけども、このような感じで、地元に着して、これなんだ、これなんだと言いながら、地元の方にいろいろ教えてもらいながら、いろいろつながって、生まれて、育んでいくということを毎回しております。

これは一品持ち寄りということで、朝日馬場の方が当日、僕のほうに電話してきて、「おにぎり何個作っていったらいいんだ」と言われたので、「じゃあ、まあ、50個ぐらい」とか言っつつくってもらったところです。

この方は雛鶴峠を越えて、秋山のほうからいらっしゃった秋山郵便局の元局長さんですね。秋山と都留市の朝日のほうは雛鶴姫の伝説というのがありまして、それについて「秋山のほうはな」と熱く話してくれました。

この後、第三部になるんですが、その前にちょっと寄り道をしまして、このカフェが目指すものと意義について、お話ししていきたいと思います。

大きく四つに分けました。一つは人とのつながりです。このカフェという場が人とつながって、さらにまた別の人とつながる出会いの場であるということです。

もう一つが「おらが村自慢」ということで、先ほど言いましたように、地元の地区、人、自然に焦点を当てていますので、その地元が毎回ホスト地区になるわけですね。そして自分の地区を再認識して、もっともっと語ってもらおう、自分の豊かな部分というものを出して、それをアピールして、参加者側もそれを受信していこうという感じが一つの意義です。

もう一つ、ここは大きなポイントだと思っています。これはカフェだけではなくて、ほかの『フィールド・ノート』だとか、シオジの森もそうなんですけれども、都留のフィールド・ミュージアムの最大の特徴は学生ではないかと僕は考えています。学生がどんなかたちにしろ、かわるということが大きな特色なのかと思っています。

もう一つは持続的な社会ということですが、都留は山が多くて、里の暮らしをしてきた。そういうものを発信して、地元の方から聞いたり、または大学の研究者から聞いたり、地元の方もそれを再認識したり、学生側もそれを認識して発信、受信する場として持続的な社会というのを目指していこうじゃないかというある種、夢を見るような空間、そういう里山の知恵とか生活の暮らしというのを見直していく発信の場としてカフェは機能しているんじゃないかと思っています。

最後、第三部は朝日馬場に住んでいらっしゃるしみちよさんという女性シンガーの方がライブをしてくださいました。こんな感じでかなり大がかりな音響になっています。しみちよさんは何回もライブをされていますので、観客の人を巻き込んでワークショップみたいなことをやってくださいました。この方は秋山の郵便局の方ですが、いろいろ楽しくわいわいさせていただきました。

最後から2番目ぐらいに、子どもたちと一緒に歌って、という感じです。

最後は、皆さんと丸く輪になって歌っておしまい、みたいなかたちになったわけです。

足早に駆け足で来てしまったのですが、カフェというのは、こういうものが各地区でまだ4回目です。このプロジェクトはまだ1年しかたっていません。皆さん、ご存じないと思うのは当然かもしれません。今後また2年、3年と続けていって、都留市内でみんなが共有できるものになったらいいかと思っています。漠然としてイメージが湧かないという方も多いと思いますので、まずはぜひ一度お越しください、肌で感じていただければと思います。次は6月までの間に1回は開催されるかと思っていますので、ぜひお越しください。簡単ですが、発表を終わります。(拍手)

#### ————— 以下 質 疑 応 答 —————

**司 会：** ありがとうございます。12時を少し過ぎていますが、最後の質疑応答の時間をとらせていただければと思います。ここまでの発表をお聞きになりまして、会場の方から、質問、提案、ご意見、感想ありましたら、お聞かせください。どんなにかいらっしゃいますか。ではお願いします。どうぞ。

**質 問：** (会場の参加者からカフェの運営資金について質問)

**河 野：** 経費ですね。一応ですね、今回だけではないのですが、毎回お金を徴収させていただいているんです。で、大人1000円、学生800円、中学生500円、子どもは無料です。やはりそういうふうにして賄っていかないと。参加費というかたちですね。参加費というかたちで一応まかなっております。そういうかたちをとらないと、運営側も結構厳しいので、「お茶飲むだけで1000円も払うのか、この野郎」みたいなこともよく言われますが、そこはいろいろお話をしたり、説得をしたりして、一応そういうかたちでやっています。そういうかたちをとらないと運営的

にも厳しいし、長続きもしないので、最初からそういう形をとらせていただいています。

質問： 赤字にならないんですか。

河野： いやあ、それはやばいですね。多分今までの積み立てた経費や、一応プラスになるようにもっていつているので、それで次回の運営を賄うというサイクルでやっています。

司会： ほかの方、もしあれば、どうぞ。

質問： お知らせや何かはどうしているんですか。私はあまり知らないんで、大学でやっているいい催しだとか、学生がやっている催しや何かの情報をとるのがなかなかできないでいます。人の集め方だとか、もう少し考えていただきたいと思います。

河野： お知らせは一応、広報都留に入っているのですが、広報都留の最後のほうのページのけっこう小さいところにあるので、発見しづらい。広報都留自体、皆さん見ていらっしゃるのかどうか分かりませんが、一応そういうかたちで発信はしております。ホスト地区となるところ、今回だったら朝日馬場、前回だったら十日市場、その前だったら法能なんですけれども、その地区の方には、重ねて自治会長さんのほうから、チラシを配布させていただくというかたちをとっております。

司会： ありがとうございます。ラスト、一人二人ありましたら、お願いします。いらっしゃいますか。じゃあ、坂田さんどうぞ。

坂田： とても有意義な活動だと思います。一つ、教員として気になるのは、皆さんこういう場で地域からいろんなことを学んでいろいろ感じて、交流を深めてとても有意義なんですけど、それをどうやって残していくか、伝えていくか。やりっ放しで終わるのではなく、参加した人のなかでその体験を思い出して記録をとったり、考え直すことですごくいろんなことが分かってくる大事な機会だと思うんですけど、その辺はどういうふう工夫されているのでしょうか。

河野： そうですね。そこは考えないといけないところだと思います。ちゃんと毎回、映像資料と簡単な冊子として報告書を作るということはやっております。今度ぜひご覧ください。

司会： では、12時も少し過ぎてしまいましたので、一度、午前の部はここで閉じたいと思います。フィールド・ミュージアムという取り組みで都留文科大学を拠点にいろいろな地域に出ていっての交流が話されました。午前中の部はこれでおしまいですけれど、午後、これから展示交流の時間、昼休みをはさんでの時間がございますので、そこで突っ込んだ意見交換や、実際にどうだったのかという話なども意見を交わさせていただけるのではないかと思います。ではありがとうございます。午前中はこれでおしまいにします。また午後お願いいたします。



## 「みんなで語ろう！ 環境教育 私たちがめざすもの」

基調提案：高田 研（都留文科大学 社会学科 教授）

パネリスト：上田 司（都留市 禾生第一小学校教諭）

しらいみちよ（都留市 歌手）

岡田 淳（初等教育学科4年生）

司 会：青木 将幸（ファシリテーター）

司 会： では大変お待たせいたしました。これより午後の部、全体集会「みんなで語ろう！ 環境教育 私たちがめざすもの」というタイトルの時間を始めたいと思います。90分の時間になりますが、今回のこの90分で進行上の工夫をしようと思っております。会場の皆さんに少しお願いがございます。話を聞いたときに、少しお隣の方とペアで話す時間をとろうかと考えている次第です。

せっかくこういう地域の皆さんと交流しよう、つながろうというふうな機会ですので、もしよろしければ、周りを見渡して、この方、私初めて知るなあという方とか、この方と少しお話ししてみたいなあという方とペアをつくってご近所に座っていただくということを考えています。

例えば、学生さんなど、こうやって右手の後ろのほうに固まっていますけれど、ちょっとばらけていただいて、初めましてのご挨拶から一緒に始めていければと思います。大変お手数ですが、一度席を立っていただいて、ばらばらと移動して、一緒にお話ができそうなお仲間をお見つけください。少々時間をとります。では、皆さん移動してもらっていいですか。はい、お立ちください。お仲間が見つかったらお座りください。

\*

\*

\*

司 会： では、このお仲間それぞれお勧めいただければと思います。2人ではなくて、3人になってしまったところはそれでもかまいませんので、それぞれご近所の方とお話しできればと思います。今回のテーマは「みんなで語ろう！環境教育」という題になっておりますので、今度はがやがやとみんなで語る感じというのはなかなかいいのではないかと感じて、こういう手法にさせていただきました。随所随所で、先ほどの「ペアでお話してください」という流れもあろうかと思うので、よろしくお願いいたします。

では、今回の90分全体集会の概要についてお話をいたします。「みんなで語ろう！環境教育 私たちがめざすもの」というのが今回のタイトルになります。特に学校での学びと地域をどうつなげていくのかという



ころは午前中のディスカッション、フィールド・ミュージアムのお話の中でもいろいろな視点で出されたかと思います。その話の続きの部分も出てくるかと思いますが、午後は午後で、はじめに15分ほどの基調提案をいただくことになっています。その提案を受けて、どう思ったのかということとそれぞれやりとりしていくという流れになるかと思いますが、4時までの時間、どうぞよろしくおつきあいくださいませ。登壇者の方、お一方ずつ、お名前と自己紹介のかたちでいただきたいと思います。では、高田さんからお願いします。

高 田： 本学の社会学科、新しくできました環境コミュニティ創造専攻の教員をしております高田と申します。よろしくお願ひいたします。私は大阪出身の大阪育ちでして、兵庫県と大阪府で長年、小中学校の教員をやっておりました。よろしくお願ひいたします。

司 会： ありがとうございます。では、続いて上田さん、お願いします。

上 田： こんにちは。禾生第一小学校で6年生を教えています上田と言います。自分自身、生まれが石和ということもありまして、都留に住んで12～13年、都留の学校でもそのぐらいで、子ども時代の自然で過ごしたという経験がこの地ではないのですけれども、よろしくお願ひいたします。

しらい こんにちは。しらいみちよと申します。歌を歌いながら、地域のおじいちゃん、ばあちゃんから、小さい子どもたちまで音楽を通してつながりながら、その地域の森づくりをしています。頑張りますので、よろしくお願ひいたします。

司 会： ありがとうございます。最後、岡田さん、お願いします。

岡 田： こんにちは。本学初等教育学科4年の岡田淳です。いま卒業研究でカジカをやっていました。今日は皆さんと話しながらいろいろなことを勉強していきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

司 会： はい、ありがとうございます。この登壇者4名の方にご登壇いただいて、皆さんと一緒に交えながらのディスカッションになろうかと思ひます。はじめに高田さんから基調提案ということで、15分ほどのお話をいただいて、それを聞いてどう思っただかというやりとりをきっかけに始めていきたいと思ひます。では、早速ですが高田さん、お願ひしてよろしいでしょうか。

#### ————— 基 調 提 案 —————

高 田： それでは、最初に口火を切らせていただきます。専門は環境教育をやっております。よろしくお願ひいたします。

我々、大学の教員もそうですし、高等学校、そして今日来ていただいている小学校の先生まで、学校の教員というのは非常にヘルプメッセージを出すのがへたくそな職業じゃないかなと、我ながら思っております。ヘルプメッセージというのは要するに、自分が困ったときに、他の人に助けてもらうということです。

私も小学校に勤めたことがあるんですけども、やはり小学校というのは一般に言われるように学級王国というのですが、学校の中で自分のクラスの子はなんとか自分でなんとかやっていかなければいけないという気持ちが強いですし、それは多分中学校に入っても自分の担任の子どもたち、それから責任を持っている子はなんとか自分でやる。それから困ったときも、なんとか教員で処理しないといけない。問題はあっても学校の中で処理しないといけないという思いが非常に強いので、一般的に言われているように、少し地域社会との壁が高くならざるをえない。そういうところがあるのかと思ひます。

ここ近年というか、もう大分たってきましたが、各学校はインターシップに出さないといけないということで、四苦八苦し始めました。それは我々の大学も実はそうなんですけれども、小学校から、それが始まっていて、特に中学校は多いですね。中学校が地域社会の中でインターンシップさせていただくというのが多いです。それは高等学校でももちろん行われていて、大学もやっている。狭い地域社会の中に出かけて行って、一定期間実習させていただくわけです。もう実習の現場の取り合いですね。うちのつれあいは中学校の英語の教員を今でもやっているんです(辞めかけていますけれども)。その担当をやっていたんですけど、いわゆる学校だったら校区がある。でも校区に商店街がなかったら、隣の学校が侵入してくるんですね。そうすると、商店街で隣との闘いです。先にいかに自分のところの実習生を送り込むか。一生懸命、頭を下げて回っている。「なんで、私、こんなことせんとあかんの」と家に帰ってぶつぶつ……。でもそういうストレスって初めてです。学校から外へ出ないといけないような状況が出てきて初めて、そんなことが起こっているのかと思います。

次の話です。私は大阪の出身で、親父は生粋の商売人です。関東の方はたいていこういうイメージを持っていますね。大阪の人間というのはえげつない。金に汚い。ところがいいですか。大阪は、皆さん、歴史で習ってご承知のように、商人の町なんですね。商売というのは、基本的には現金扱わないんです。分かりますか。売っている小売店だって、問屋さんから商品借りてきて、売って初めてお金ができるから、それで返して回すわけですね。ですから、お金が実際には動かない商売をずっとされているわけです。それで一つのシステムをつくっているわけです。

それはどんなシステムかといったら、お互いに信用しているシステムなんです。ということは、信用がなかったら、大阪で商売は絶対できないんです。だからえげつないやつ、自分だけ得するようなやつは絶対商売できないんです。

うちの親父に小さいときから言われてました。何て言われていたかと言ったら、「これをやったことで、相手が何、得するか考える」と。言い換えたら、ウィンウィンの関係です。自分がここで何かすることで、相手が何の得をしているかということ常々考える。そうしないと、システムが長続きしない、と。自分だけ得するようなことを考えたらいかんということですね。

そう考えたら、武士の商法ではないですけど、やはり学校の教員というのはそういう世界の中にいませんでしたから、いないので、なかなかそこを思いつかない。ものを頼むとなると、お金がいるんじゃないかとか、そうじゃないと、頭を下げて頼んだらなんとかなるんじゃないかと考える。そうじゃなくて、相手が得するからこそ、学校にかかわってくれるというふう考えた方がいい。得する、損するというのは金勘定のような、いやらしい感じがする。でもそうじゃないです。ボランティアだってそうです。自分が何かやる。この地域社会の中で何かやろうというときには、その地域社会の中から何らかを得られるからやっているわけですね。僕、自分を勘定に入れるという言い方をよくするんです。その話をしたら長くなるからやめておきます。15分ですので。

実は、私は環境教育の仕事をずっと、文科省の研修会も含めて最初のころからやってきました。文科省が直接学校の先生方にやっております研修会では西日本と東日本のブロックで年間80人ぐらいの先生方を集めて、最初は4泊5日ぐらいでやっていたんです。今日来てもらっている青木さんにも一緒に手伝ってもらって研修会をやったことがあるんですけど、全国から最後は3泊4日でやって

いたんです。

そのときに、一つは、非常に先進的な事例を皆さんに紹介するというので、事業の紹介、先ほどからやっていますプレゼンをパワーポイントのようなものでやってもらうということもありましたけれども、実際に模擬授業なども毎年やってもらっていたんです。その事例を探さないといけないんです。一生懸命、毎年事例を探すんです。

どんな事例を探すかと言うと、地域に直接かかわって、学校が地域を変えていくような、非常に深い結びつきの中でやっているような事例を探すわけですね。なぜそんなことをやるのかと言うと、環境教育というのは、環境問題を学習するような勉強、それももちろんそうなんですけど、そうじゃなくて、現在は環境教育という言葉を使わないで、「持続可能性のための教育」というふうに言っています。地域もそうですし、もちろん大きく考えると地球全体もそうなんですけれども、いわゆる持続可能性をどんなかたちで実現していくかということについて、一つは、よく言われるように「グローバルに考える」、そしてもう一つは「地域の中でじっくり考える」ということが、そこで動ける人間をつくらないといけないというのが目標です。当然、外の人たちとかかわりながら、それをやっていかないといけないという必然性が生まれたわけです。

ですから、そのところで地域とどういうふうにかかわって学校が動いているかという事例を探さないといけない。ほとんどないですね。ゼロではないです。探してきて毎年やってもらってましたから。愛知県のどここの小学校とか、いくつかいい事例、素晴らしい事例を見つけてくるんです。でも、ほとんどないです。本当に苦労するんです。なぜかと言うと、学校の中だけで子ども相手に授業を組み立てるだけだったら、できるんですけど、やはり外へ出るとなると、行政との問題もありますし、なかなかクリアしないといけないことがたくさん出てまいりますので、なかなか地域とうまくつながってやっているという例が実はないんですね。

話をまた変えますが、高等学校がいつとき大変な退学者を出しまして、高校改革に日本は入っていくんですけど、その目玉の一つとして、地域社会とじっくりつながらないといけないというコンセプトをつくったわけです。それでそういう総合学科という学科をつくって、またその中に現代社会という授業とかいろいろつくっていったわけです。本当に地域とかかわらないといけない。

非常に彼らも苦労したんですけど、私は総合学科の学校に三つかかかわっているんですけども、その一つで、大阪に福井高校という高校があります。そこは面白いことをやったんです。高等学校で、民間の人に授業をしてもらう。高等学校ですから、お金を持ってませんから、ただみたいな値段です。ボランティアで、少しは交通費とかは出ますけど、それでもただみたいな値段で、短期間、何回かの授業をってもらうという話を、そのときに頭を下げて回ったわけではなくて、新聞に広告を出したんです。

そうしたら、めちゃめちゃ人が集まってきた。もちろん全部にやってもらうわけにはいきませんから、実際にまず書類審査でふるいにかけて、その次に実際にお会いして、お話を聞いて、その中から絞り込んで、そのあと最後におもしろかったのは、校内放送、テレビを置いているところで、何分か忘れちゃったけれど、15分か20分ずつ、それぞれの候補者に、私はこんな授業をしたいというプレゼンをやってもらって、多かった順に授業が成立するということにしました。

考えてみたら、そこでしゃべりたい人というのは、別に金がほしいから来てい

るわけではなくて、高等学校で、自分の持っているものを伝えたいという気持ちがあるんですね。その伝えたい気持ちがあって、受ける側の高等学校は来てほしいわけですから、これはウィンウィンじゃないですか。ベつにただでも来てくれる。ひょっとしたら、「しゃべらせてあげるからお金ちょうだい」と言っても来てくれますよ。

それで違う高等学校、大阪府立の松原高等学校というのも、開設のときからずっとかかわっているんですけども、そこで提案したのが、地域に中小の企業があるんですけども、その人とその商品を高校生が開発しようというものです。例えば大阪の東のほうでいうと、文房具の会社とかがあるんです。ですから、例えば、こういうペン、これを高校生だったら絶対ほしいというようなデザインをみんなで考えようというのです。

そのために、その企業で、これをデザインしているプランナーの人をお呼びして、開発のプランニングとはどうしているかという話をプレゼンしてもらって、そして高校生が一生懸命ああでもない、こうでもないと言って何カ月間か考えて、それを高校生にプレゼンさせるんです。

そのときに次をお願いしておくんです。アイデアの何がまずいかいうのをしっかり指摘してつぶしてくださいといいます。徹底的にたたいてもらうんです。たたいてもらって、そのあとまた何カ月かして、最後のプレゼンやってもらって、なかなかいい作品が出てきますよね。

その間、文房具会社にとっては、高校生が考えてくれるので、こんないいマーケティングないじゃないですか。自社の製品をタダでやってくれるわけです。高等学校にしたって、いわゆるプレゼンテーションする技術であったり、いわゆるコンセプトワークのやり方について、直に企業人から聞けるわけですから、非常に勉強になります。そういうウィンウィンの関係が成立するんです。そういうものを僕たちは環境教育の世界で、例えば都留の中でどういうふうにやっていったらいいのか。ちょっとそれをまず最初の提案にさせていただきたいと思っています。以上です。(拍手)

司 会： ありがとうございます。という提案でありました。これは基調提案というかたちですが、これを聞いて皆さんがどう感じたり、どう思ったりしたのかということ、ここは自由闊達にやりとりをしてみたいと思っています。学校の先生はヘルプメッセージを出すのはちょっと苦手なほうだという話からはじまり、インターンなどいっぱいあるけれど、現場の取り扱いじゃないかということ。大事なのは大阪の商人の話から、向こうが何を得をするかということですね。ウィンウィンのシチュエーションといまおっしゃっていましたが、自分にも得るところがあって、相手にも得るところがある。そこを考えようみたいな感じの話があったかと思えます。

必ずしもお金がほしいからやっているわけではないというところで、いくつかの例で高校の例もありました。大阪の福井の学校では、公募すると授業をやりたい人はいっぱいいたということとか、松原高校では商品開発の例があった。大事なのは環境教育とは何なのだ、環境問題を教える教育ではなく、主体的に自分で考えて、地域の中で動いていけるような人間をつくる。こういった人間をつくるには必要なコンセプトはどんな考え方、どんな教育が必要なのかということについていくつか示唆をいただいたかと思えます。

先ほどおつくりいただいたお隣の方と、今の高田さんの話を聞いて、どう思いましたかと、率直な感想をべちゃべちゃとおしゃべりする時間を3～4分とって、

それから全体ディスカッションしてみたいと思います。では、お隣の方と「今の話、どう聞きました？」という感じでやってみてください。

—————\*—————\*—————

司 会： はい、では全体でのディスカッションに入っていこうと思います。「みんなで語ろう！環境教育 私たちがめざすもの」というのはこれのタイトルで、今の高田さんの基調提案をいただいて、皆さん、どう思いますかというところでやりとりをしていただいております。

実質12～13分の短いプレゼンテーションでしたが、その話を聞いて、皆さんどう思いましたでしょうか。そうだと強く感じたんでしょうか。いや違うんじゃないかという意見もあるかもしれませんね。どんな角度からのご意見でもけっこうです。会場から聞いてみての感想とか、思ったこと、共感したこと、共感できないこと、どんなかたちからでもかまいませんので、手を挙げてお話を聞かせいただければと思います。どなたかいらっしゃいましたらどうぞ。いかがでしたか、高田さんの話は。感想を聞かせてもらえますか。

それは大阪の商人の話やろ、みたいな感じでしょうか。どんな感じなんですか。お聞かせください。手を挙げてください。どうぞ。いらっしゃる。じゃあ、マイクを回せるかな。すいません。

小 口（東桂小学校）： 東桂小学校の小口と申します。よろしくお願ひします。いまここで話したことを上手に伝えられるかどうか分からないんですけども、高田さんのウィンウィンということがとても印象に残りました。相手も得をするし、自分たちも得をする。そういうかたちで、無理なくそういう関係がつくれればそれは長続きするし、お互いにとって得るものが多い。そういうものがないのではないかと。

インターンシップについては、中学校ではよく行われているけれども、市内ではたぶん小学校は、谷一小だけではないかという話で、しかもその中でも「地域の子どもだからいいよ」という感じです。ウィンウィンという、子どもいいし、地域の方もいいというところまではいってないんじゃないかという話が出ました。そういうかたちを地域社会の中につくっていくということがこれからの課題だということを感じました。

もう一つ、人と自然というところに置き換えたときに、身の回りにはたくさん人がかかわって、お互いがよくなっていくような自然環境というのはよくしていかねばいけないというところがいっぱいあると思うんです。例えば学校にしても、谷一小にもあるんですけども、それから自分の東桂小では今度、鹿留子どもの森というものがこれからできていく計画なんですけれども、そんな中で学校林の活用についても、ゆくゆくその学校にとって負担になるようなかたちになるんじゃないかという心配がどこにもあるようです。

そうじゃなくて、子どもたちがそこに行って活動すれば、すぐ子どもたちが生き生きする、いろいろな力がつく、そういうものであれば、どんなに忙しくても、学校のほうとしてもそれが続いていくと思うんですけども、そういうのをつくっていくのがなかなか難しいのではないかと。それを上手につくっていかなければいけないんじゃないかということは今、考えています。以上です。

司 会： ありがとうございます。人と自然のウィンウィンの関係みたいなのがつくれるとおもしろいという、大変示唆に富んでいるなあと思います。一度つくったもの

が負担になってくるということも、やはり学校の現場としては課題に考えられているところもあろうかと思えますね。ありがとうございます。ほかの方でももしよろしければ、お聞かせいただける方がいたら、お聞きしたいと思います。ではお願いします。どうぞ。

**清水（都留市）：** 都留市の清水です。いま小学校、学校関係の問題だったんですけど、環境問題は私たち大人が本当に気が付かないうちにどんどん壊してきてしまったというところがありますね。地元に住んでいると、すごく大事なものに気が付かないでしまっている。私、十日市場に生まれて、いま住んでいます。「平成の銘水百選」に今回登録されたんですが、残念ながら、これを大事にできていません。本当に当たり前に水があって、なくなるなんてことはだれもこれっぽっちも思っていませんし、こんなに大事なものっていうのは今まで感じてこなかったんですね。私、少し環境問題をしてきましたけれども、それも発信もしきれなくて悶々としてきたんですけども、やはりこういうこの地域にも、すごく守らなければいけなかったものとか、壊してしまったものに対する気づきをどこかでするために、そのために外部の方から発信してもらい、お手伝いしてもらいたいということもすごく大事かと思うんですね。

そういう意味では、この大学の社会科学、あるいは初教の方たちとか、比較文の方たちというのは、おそらく地域の資源を生かしながらの学びもたくさんあると思いますし、逆に私たち住民にそれを活用していただきながら、私たちが学び返していくというか、これから改めてまた自分たちのところを見直して、きちっと守って次の世代へこれをつなげていくためには、やっぱり大学との連携がものすごく大事だと考えております。

いま少し私も動き始めたんですけども、できるかぎり、そういう意味では大学からもどんどん発信していただいて、私たち住民をぜひ巻き込んでいただきたいなと思っておりますけど、そのへんよろしく願いいたします。

**司 会：** ありがとうございます。特に大学の場合はよそからの学生さんというのが大半ということなので、外部の目でみると、その地域で守らなければならないものなどが見えてきて、一緒に連携できることもあるのではないかというご指摘だったかと思えます。

さて、壇上の皆さんは同じようにどのように感じられたのかを聞いてみたいと思います。壇上にはそれぞれの立場から環境教育にかかわったり、かかわろうとされようとしている方がお立ちになっています。早速ですけど、岡田さんから入ってもいいでしょうか。今の話で学生さんという切り口がありましたけれど、高田さんの話を聞いてどんなふうに思っていますか。お聞かせください。

**岡 田：** 環境教育のゴールとして、行動していかないといけない、行動していく人間を育成するというのが話の中にありました。午前中のお話の中でも、リーダーはだれがやるかということが出てきたと思うんですけど、そのためには地域のことを知っているということ、大学や学校でどういうことをしているかというのをお互い両方の立場を知っているということが大切だと思います。

私は卒業研究でカジカをやっているんですが、それで川に出ていたり、いろいろな調査をしていると、地域の方や地域の子どもたちに声をかけてくださいます。そういういろいろな話を、私たちが知らない、学校で学んでいること以外のことを知ることができたり、元気をもらったりすることができて楽しく調査ができました。

その中で地域の方の本音や、子どもたちが自然とかかわっていくなかでどんな

ことを感じているのかというのを少しずつ感じるすることができます。地域の方、自分たち学生、大学の先生、教えてくださっている先生の立場といういろいろな立場のことを知ることで、保全に向けての活動ができているかと思えます。

最初に言ったゴールとして行動する人間を育成するということですが、やはり地域に自分たちから出て行って、いろいろなことを知るということが大切ではないかと思いました。

司会： はい、ありがとうございます。最終のゴールのところですね。動ける人間をつくることで、地域に出て行って、いろいろな立場、地域の方が考えていらっしゃることを知っていくことが一つの鍵ではないかとお聞きになったそうです。しらいさんも同じくコメントをいただいてもいいですか。

しらい： 高田先生のお話の最初のほうに、ヘルプメッセージというか、「助けて！」と言うのがすごく苦手だというお話が出ましたけれど、それも一つ。そして、「助けて！」って言っているメッセージを受け取る力もすごく弱くなっていると私は思うんですね。それは人と人との関係の中でもありますけれども、自然からの「助けて！」というメッセージもいっぱい出てきているんですけど、それを受け止めるという力を持っている人がまだまだ少ないのかなあという気がします。

私は、音楽を通してこの二十数年、いろんな地域に行って、地域の方たちとつながってきました。また地域の方がつながっていく姿を見てきました。その中で絶対的に欠かせないのは、一つの主人公なんです。それは「助けて！」って言っている生き物なんですよ。北海道ですとシマフクロウという、これも絶滅危惧種に入っておりますけれども、このシマフクロウが棲むところがないんですね。大木が、とにかく北海道は大自然があると言いますけれども、ほとんどなくて、開拓の時代にほとんど大木を切ってますので、本当にわずかなんですね。その大木を家にしているシマフクロウとしては家がないわけです。今は皆さんがドラム缶で手作りで巣箱をつくりまして、コッコが生まれてるんですけども、そのシマフクロウを主人公にしてみんなで森づくりをしているんですね。これも16年、17年目に入りました。

絶対的の主人公がいると、みんな一生懸命できるんですよ。それが単純にただ何か環境を良くしようとか、自然を増やそうということだと、どこかでだれだれは損した、だれだれは得したとか、あの人はこうしたあしたとかという、出てきてほしくないものがどんどんどんどんじわじわ出てくるんですけど、「シマフクロウ、助けよう」っていうのがあると、みんなが自分のできることを一生懸命考えるんですね。そして、それぞれできることを、手をつなごうっていうふうになるんです。

その北海道の場合は、西別川という川の上流にシマフクロウがいるんですがそこには酪農家の方たちがたくさんいるわけです。酪農家の方たちというのは、糞尿を流して川を汚してきた人たちなわけですね。なかなか森づくりを一緒にしようということは、最初は皆さん、本当に口を閉ざしていました。ですけれども、コンサートをしたりしながら、本当の森の大事さとか、汚してきたことは今までのこの時代の流れの中でしょうがなかった、でもこうなったんなら、みんなががんばろうよということ、少しずつ少しずつ、シマフクロウをとにかく主人公に、神様にしながら、続けてきて3年目に手をつなぎ始めました。そしていまはもう三つの町にわたっているんですけど、町同士も全部一緒になって、5月は川と森を考える月間として、植樹祭、これも毎年、植樹を西別側の流域の川幅50m両方を全部森にしていこうという活動で続いています。

屋久島にはウミガメという主人公がいたり、金沢では浅野川というところに昔ゴリがたくさんいたんですけれど、今はほとんどいなくなって、そのゴリのためにみんなというふうにして活動しています。一つの絶対的な主人公がいるということはすごく大事だなと思うんです。しかもその「助けて！」って言っているヘルプメッセージを出している生き物に気づいてあげること。

今も皆さん見ていただいたと思いますけれど、ムササビというとてもかわいい生き物がいます。石船神社というところのムササビがやっぱり「助けて！」って言うてるんですね。そのために今もう一度、みんなで手をつなごうということで、今日は小学校の校長先生もいらして、本当に学校も子どもたちも地域も、おじいちゃんもおばあちゃんも、一緒になろうとし始めてきました。たくさん壁があるなど、私も最初は思っていたんですけれど、でもその壁は絶対取り払われるなど信じてます。それはやっぱり助けてって言っている生き物がいるということにみんなが気づいてくれば、その壁というのは取り払われると思うんです。

です。私の経験の中でしかお答えできなくて、もっといろいろな方法があると思うんです。ただ一つの主人公がいるということはすごく大事なことかなあと思っています。

司 会： はい、ありがとうございます。私がか、あの人というふうな感じの主人公ではなくて、ある種の自然のサイドに「助けて！」って言っている主人公の声を聞いて、そのためにみんなで動くみたいなかたちにすると、比較的動いていきやすいと。環境問題というのは、概念とかやるべきこととしてとらえるのではなくて、リアルに近い感じですかね。そのようにおとらえになるのが一つの方法なのではないかというご提案だったと思います。ありがとうございます。

学校の教員として20年近い経験を持ってらっしゃる上田先生は、お話を聞いてどのようにお感じになっているのでしょうか。お願いできますか。

上 田： 聞いていて、ああそうだよなあと思ったんですけれども、ヘルプメッセージを出すか出さないかという点、自分は小学校の教諭なので、自分のクラスのことを中心に考えるという傾向があります。

ただ普段子どもに言っているのは、自分が困ったときに「ちょっとここ、教えてくれる」というような関係をつくらうね、と話をしています。ということは、困っている人間に対してその周りをどうやってつくっていくのかということがあるんじゃないかと思っています。

そういう意味では、自分たち教員も一人で悩むのではなくて、いまチームで、また外部からの人を招いてということをやって取り組んでいる最中です。先ほどの基調提案の中にインターンシップというのがあったんですけれど、実はこの秋にこの自分の6年生の地域のところへ行って、職業や自分という夢というものについてやってきたんですが、初めての経験だったもので、約26カ所、足を自分で運んで、地域の方と話をしてきました。その中で、実際当日も子どもと動いたんですが、子どもの心が動く場面があるんですが、それは物に出会ったときと、人に出会ったときです。

そう考えたときに、環境も含めて、もし教材としてそれが地域とつながるきっかけとなるならば、これはそれを介して人とか、または地域のものとかに触れて、子どもたちが動くんじゃないかとそのことも踏まえて、思いました。

いま自分たちのところでは、地域の環境にかかわる素材を集めたり、またパンフレットを見せてもらったら、地域でこんなに活動している人があるんだなあということも初めて知ったので、そういうところで自分自身を含めて自分がどう変

わっていったのかという過程を子どもたちにぶつけるところの視点からと感じました。

だから、もしかしたら、こういう問題に関しては自分が教えるという感覚より、先ほど先生が話したように、一緒に何か行動してつくっていくという部分がすごく大事かと。

一番最後、自分がいつも思っているのは、取り組みが終わって終わりじゃなくて、今の自分とどう結びつけるかということで、それは自分の教室の中の友達関係かもしれないし、そういう部分のすりあわせがないと、やってみてそこで終わり。これが分かって終わりではなくて、そこから何かを感じようということなので、インターンシップ的なことでも、子どもたちは実はお店に行って商品の話をしていると同時に、どうしてこの職業になろうとしたのという、その人にも踏み込んだということがあったので、そういうすりあわせがすごく大事だと、話を聞いていて思いました。

司 会： ありがとうございます。具体的なものに会ったとき、もしくは人で会ったとき、その人の心が動くのではないかといいところがありましたね。この出会いというのを26カ所回ってつくってこられたんだなというのを感じております。

高田先生、今までいろいろな方から、基調提案を受けて反応、コメントが返ってきていますけれど、高田さんとしては何か今感じていることはありますか。

高 田： 考えてないです。もうちょっと。

司 会： はい、ではいくつかの環境教育をどう広げていくのか、どうやって展開していくのか、地域と学校が連携していくにはどうしたらいいのかという観点がありました。何人かの方からコメントをいただいたように壁があるのではないかといいふうな話。

高 田： ちょっとだけいいですか。思いついたので。まちづくりの分野で、先ほど先生がおっしゃいましたが、ちょうどいま鹿留のところで、学校にかかわって森をつくらうじゃないかという話があったんですね。それはどこから話が出ているかと言うと、もともとは県から出てきた話ですね。なかなか外側からニーズがあっても、なかなか学校がそれに応えるというのは難しい状況があって、けっこう振られるケースがあります。今回、先生にもご尽力いただいて、学校のほうも連携してやろうかという話にもなりつつあるのですが、ご承知のように今学校改革のほうで、いろいろ忙しくてそれどころじゃないというところもあって、かかわれないのはよく分かるんです。僕、まちづくり系のお仕事、環境でもまちづくりのほうの仕事をするのが今まで多かったんです。大阪におりましたときは大阪府の16万ぐらいの箕面市というところで仕事を受けることが多かったんです。

例えば、防災のまちづくりですが、どういう町なのかというと、防災に強い町というのは、結論から言いますと、地域の社会がしっかりと崩れていない。たぶん都留なんかそんな必要はないと思うぐらい、祭りやいろいろなことでつながっておられるんですけども、私がおりましたところなどは、そういう部分が欠落してしまって、ほとんど隣の家とつながりがないようなところ。神戸にも端的に表れましたように、地震は同じように起こるんですけども、震災から復興した地域というのは、まさに町の祭りがずっと引き継がれたところです。

そういう意味においては、防災というと、環境は関係ないようですが、そうではなくて、非常にかかわりがあります。なかなか防災のことについて小学生の意見、中学生の意見がほしいからといって、一緒に考えましょうという場を、もちろん行政のお金で場を設定して開く。また学校の中でそれをやりましょうという

ことでそれをやるということになっても、なかなか受けてくれないんです。

教育委員会にももちろん相談してです。教育委員会のチャンネルも利用しながら、各学校に箕面市内、16万、小学校は何校あるか忘れましたが、みんな申し込んだんですが、どこからもないんですね。なかなか難しいという状況がありますね。

これは実はもう一つ前に林野庁の関係で、森林関係教育の話です。箕面市というのはこのことと同じように面積の7、8割が森なんですね。雑木林もけっこうありますので、そこをどう管理していくかということ子どもたちと一緒に考えさせたい、それも各小中学校に申し込んだのですが、これも返事がなかったですね。

一つは、先ほどお話がありました、例えば学校林という苦い思い出があって、学校で管理しないといけない。思いのある先生がいらっしやったらいいけど、いらっしやらなくなったら、あとは大変だという話などもあります。

私が言いたいのは、何が問題なのかと言うと、学校がものを考えると、学校中心にものを考えてしまうので、学校があって周囲の社会があると考えてしまう。僕はそうじゃなくて、学校というのはあくまでもポジションというのは、地域社会の角っこにある、ほかの主体もあるんだから、ほかの主体と一緒にやるという必要性があるんだというものの考え方ならいいと思う。いわゆる学校の周辺化、周縁化というんですか。もう一回そのところから地域をつなぎ直すためには学校もかわらないといけないんだという関係性の中で考えていく。例えば、そういう防災のことについても、私のところは学校で勉強だけ教えていたらいいんだということではなくて、地域の防災についても小学生がかかわらないといけない。中学校もかわらないといけないんだというスタンスをつくっていけば、僕はそういうことが可能なのかと思いました。またご意見を言っていたらいいかと思えます。

司会： はい、ありがとうございます。いくつかの視点から出てきておりますが、このあとの流れ、残り後半の時間を壁のほうの話に入っていこうかと思えます。いまの話、いま言いましたけれど、学校が地域と連携して環境教育を普及していったり、問題を解決していこうという人を育てていくうちに、いくつかの壁があるのではないかと考えています。

しらいさん、先ほど壁はいくつもあるとお話をいただきました。それでも必ず乗り越えていけるんだという話も同時にいただいたかと思えます。壇上にいらっしゃる4人の方は、これはすごく大きい壁だなあと、ぜひ乗り越えるべき壁はここだというふうにして考えているのはどこなのだと僕から問いかけをしたいと思えます。

パネリストの4人の方にはこういう、クイズ番組みたいですが、「これこれの壁」みたいな感じで書いていただくようなものとして、特にこの壁は重要な壁だろうということでぜひ乗り越えましょうというふうに提案いただくようにしようと思えます。

パネリストの4人の方にマジックを使って書いていただいている間、先ほどのペア、もしくは2、3人一組の皆さんでお話ししてみてください。こういうのを実行するときに必ずぶつかる壁ってありますね。先ほどの話だと、上田先生からお話いただいた学校の先生が教えるのをやめるというのは、非常に大きい壁だなあと僕は聞いていて思いました。こういう問題はやるんじゃないんだと認識し直すのは、先生にとっては大きい壁なのではないかと推測したりしました。そう

いった壁というのは、具体的な物理的なもの、お金とかいうものだけのものではなくて、心の内側にも壁はあるかもしれませんね。

皆さんはどんな壁があると思いますか。学校が地域と連携して環境教育や環境問題の解決に向かっていくうえでどんな壁があるのだろうかということについて、ご歓談いただいて、その間にお書きいただきたいと思います。

では、パネリストの皆さん、こんな壁があるというのを書いてください。

\*

\*

\*

司会： はい、書き終えたようですね。お話の途中で恐縮ですが、いくつかの壁があるかと思います。前にお座りの4名の方はこの壁を想定されたそうです。では、どなたか発言したい順番からいきましょう。前の方で、気持ちの準備ができている方、どうぞ。では、はい。

しらい： いっぱい壁はあるんですけど、少しずつクリアして、クリアして、クリアして行って、最終的にはやっぱりここ、「心」っていうところに行きます。私は歌を歌うということをしているんですけども、全国いろんなところにコンサートに行くと、必ずその地元の小学校、中学校、高校の子どもたちにステージが上がってもらおうということをしてるんですけど、このときに一番大変なのが、学校の先生を説得するという事なんです。

今日はお隣にもいるし、前にもたくさんいらっしゃるので、非常に言いつらいんですけど、子どもたちにはたくさんそういう経験をさせたいんです。というのは、ステージに立って歌を歌ってスポットライトを浴びると、その子の中で閉じていたものが絶対開くんですよ。もう、ピカッと光る瞬間があるんです。それがすごくね、何ていうのか、感動なんですね。で、それは、お客様として来ていただいている方も必ず感じるし、子どもの中でそれがどんどん変わっていく。

その経験をさせてあげたいと思っても、例えば神戸なら神戸に行って、その周辺の学校に行ってお話をすると、「いや、あの、システムの中に入っていない」とか、「だれが責任持つんですか」という話に必ずなるんですね。今までかなりいろんな学校の校長先生と私、けんかしてきました。たぶんうるさい女だと思っている校長先生、たくさんいると思うんですけど、でも、私は何かと言うと、子どもたちのことを重要視したい。子どもにこういう経験をさせたいということがありますが、なかなかその壁というのは取り払えませんが、けんかをしているうちに、やはりだんだん取り払われて行って、心という部分につながるんです。

そうすると、その校長先生の中にもいろんな壁があって、いや、とにかく今の学校はこういうふうになっているとか、システム、授業の中でないものをやるのはすごく大変だとか。それは私も分かる。でもよし、じゃ、やってみようかとなった瞬間にはそれは全部取り払われるんですよ。「じゃあ、僕が責任持ちましょう」ってなったときには、そういうものはすべてなくなって、学校というのではなくて、人間対人間の中で、じゃあ子どもとにかくいい経験させてあげようというところに行き着くんですね。

私、すべてがそうだと思うんですけど、いろんなことを理由にする人が多すぎる気がするんです。ちょっときつい言い方で申し訳ないんですけど、こうだから、ああだから、役所だから、行政だからとか。こういうふうに決まっているからとか。今までこんな習わしだからとかというものは、やっぱり逃げの理由のような気がするんですね。

最終的にはその子どもだったり、生き物だったり、どうしてあげたらいいんだということを考えていくことのほうが大事で、そこで自分が「よし上着脱ごう」というような心意気、心とか心意気の部分に、もちろんそれはお話をする側の気持ちもあるんですね。あるんですけど、その部分がピツとつながるようになれば、壁というのはなくなると思うんですけど、そこがつながらない限りはやっぱり壁というのがすごく分厚いんですね。

だから本当にその部分で、私たちみたいに話をするほうも熱い心意気でお話をして、それはここのお互いのためじゃなくて、子どものため、とかという、さっきも言ったように、主人公のために、けんかし合って、語り合って、その壁を取り除いていく。その対、目の前にいる二人のことじゃないところで、どうしてあげたらいいんだらうということを考えていくというのが、先ほどの防災のことにしても、環境にしても、人付き合いにしても、やっぱりそこに行き着くと思うんです。

だから一番難しいことでもあるんですけど、お風呂に入ったら、みんな裸になるんですから。警官の人も、議員さんも。だからお風呂に入った感覚の中で、お話をすることができれば、もっともっとその壁というのはなくなっていくような気がしています。まだ私もそこまでできないことはいっぱいあるんですけど、でも、そうしていきたいなと思います。

司 会： ありがとうございます。午前中の発表の中で、フィールドミュージアムカフェという取り組み発表がありましたけれど、あれなど見ていると一緒にお風呂に入っている感じのにこやかな感じの集合写真だったりもしましたね。一緒にものを食べ、一緒に音楽を聴き、共に語り合う時間みたいなものが、ある種のお風呂的な役割を果たしていて、肩書きを脱いで、心を通じ合うような、あんな時間が必要なかなあと聞いていて感じました。ありがとうございます。ほかの方もこんな壁があるんじゃないかということとコメントをください。では、岡田さん、どうぞ。

岡 田： 私は、思いという壁があるんじゃないかなと思いました。先ほど、私はカジカの研究をやっていると言ったんですが、やはり保全策を考えたりするときに、私たちの考えと地域の方がどういうふうに思っているのかというのをすごく考えさせられました。

やっているうちに、地域ではこんな思いがあって、こういうふうにしてほしいんだというのがあるんですが、僕たちにもそれなりの考えがあって、こういうふうにしたいたいというのもあるし、大学の先生に聞くと、こういう方法もあるということもあって、いろんな思いがあって、それを一つにしていけないと、めざすところにはたどりつかないのではないかなと思いました。

やはり根本的な思いというのは、例えば保全活動であれば、この植物を守りたいであったり、この動物を守りたいという思いがあって、その先により高いところの目指すものがあると思うんですが、根本的には同じ思いがあると思います。その思いの壁を崩していくには、先ほどしらいさんのお話にあったように、裸のおつきあいでお話することも大切だと思うし、先ほど高田先生のお話に対しての感想を言ってくださった人の中に、外部から見えることを教えてほしいとか、住民を巻き込んでいってほしいと言うような感想がありましたが、私としても、大学生という立場ですが、内部、地域のことをどんどん私たちにも教えてほしいというのがあります。住民の方々に自分たち学生も巻き込んでいってほしいという思いがあります。お互いを巻き込む中で、それぞれの思い、壁を崩していけれ

ばいいなあということを考えました。

司 会： ありがとうございます。いろんな考え、いろんな思いがありますけれど、その壁を乗り越えていく裸のつきあいみたいなどころであり、お互いのことを教えてほしいんだというふうにしてかかわっていくかかわりがその壁を崩していくような気もいたします。上田さん、高田さん、どちらかお願いできますか。はい、どうぞ。

上 田： 自分は、ここにいることも含めてですが、環境教育というイメージが自分の中でも壁になっているということです。やはり自分がさっきも話したんですが、立場上、分かってなければいけないとか、こうしなければいけないということのほうが先にありまして、じゃあ、そのためにはどうしたらいいのかということから考えていってしまうので、そうすると、当たり障りのないことで終わってしまうのではないかと思います。

基調提案の中にあつた、「環境から」の「から」という部分から何を学んだらいいのかと考え直すと、従来のイメージとは違って、自分たちにできることは、と発想が変わると、少し和らいで何かできるのかなと思います。

司 会： ありがとうございます。ご自身の中にも、我々の中にもあるんじゃないかと聞いていて感じています。環境教育というのはこういうものだというイメージの壁というのが一つあげられました。高田さんお願いします。

高 田： 学校教育の中でタブーにされてきたのが宗教教育と政治に関する教育ですね。環境問題の学習をやっていると、どうしてもそこにかかわってきたりするわけです。例えばうちの学生でも、環境コミュニティということで、コミュニティの問題点についていろいろ調べてきて、何が問題か、何を自分で課題に選ぶかという、一番多いのは圧倒的に皆さん、分かりますよね、学生が何の問題を選んでくるか。いかがですか。

岡 田： 環境に関してですか。

高 田： はい、この都留市の環境に関して、題材に選んでくる。

上 田： 自然を守るとか、そういうことで。

高 田： いや、もっと具体的に。環境の問題で。皆さん、だいたいお分かりですよ。どうですか、皆さん。

岡 田： 水ですか。

高 田： そう、水の問題、水の中でも、ゴミの問題ですね。川を流れるゴミの問題。10人いたら、2人ぐらいがそれをやりたいというふうです。それぐらい汚いです。でもいつまでたっても解決できていない。たぶんいろんなところでいろんな努力されているんだけど、日曜日に一生懸命集まってゴミ拾いされているグループだとか、もちろん行政もいろんな施策をやってこられたようにお聞きしているんですけども、それでも全然解決していない。

そこのところで、何かいろんな角度からこれを攻めようということで、うちの教員の、今年こちらと一緒に働き始めました渡辺は、十日市場のほうでバイクを先ほどの主人公ですか、に選んで、それでやっていきたいというのをやっています。

それからもちろん午前中の発表の中にもありました、坂田のほうはカワラナデシコですね。それで河川の環境をそれを指標にしながらやっていこうという運動もしているんですけども、結局いろんなところで政治的な話にぶつかってくるんです。

さまざまな政治的なものともうぶつかってくる可能性が、環境教育というのは

あるということなんです。これは避けられないことで、当たり前今の今までの行動をしておりましたら、起こってきた問題が、みながそんな悪くしようと思ってやったんじゃないんですけれども、それも振り返ってみると、どうもまずいんじゃないかということはいっぱいあって、それを解決していこうと思ったら、なかなか子どもたちだけの話では収まらなくて、非常に政治的な問題もそこに絡んできたりするわけです。

そのところで子どもたちがそこでアクションを起こそうとなったら、社会に対して、一つの意見をアピールしていくわけですから、まさに政治性を発揮するわけですね。そうしたら、そこにずいぶんと、その運動がかかわってくる政治性に抵触する部分があります。ですからあんまり、タブーにされた、特に地域の問題の中でもあまり語りたがらない部分については、子どもたちが見つけてきても、そのところにかかわるというのはなかなか難しい部分があって、そのところも踏まえて、その子どもたちがかかわるようなシステムをつくっていかないと、子どもたちが意見ほしいんだ、子どもたちの動きがほしいんだというふうなことをやっていかないと、なかなか難しい問題が実際にはあるんですね。

それでも私の今までのここ10年ぐらいの動きを見てましたら、学校よりも実は行政のほうが先に進んでいる部分があって、行政のほうが子どもたちの意見がほしいといいます。政治的な意見がほしいと。ここ、どうしてほしいとか、政治的な話じゃないですか。いわゆる直接民主制じゃないけれど、市民参加ですね。いわゆる子どもは市民としての意見をどんどん言ってほしいという動きは鹿留の森の話も含めて、僕は行政のほうが今は進んでいるのかと思います。逆に学校のほうが、いやまて、そんな問題にかかわったら大変だというので、そこへ出たがらないという部分があって、そのところが壁になっているのかというふうに思います。ただ、環境教育の僕らの領域では非常にここが問われていて、ここが一番問題なんだと常に指摘されています。以上です。

司 会： ありがとうございます。政治、政治性の壁という感じでした。四つの壁を一覧して見たいと思います。お手数ですが、全員の壁を皆さんに提示していただければと思います。こちらから順に、「思いの壁」「心の壁」「環境教育のイメージの壁」「政治性の壁」というふうにして、登壇していただいている4人からはこんな壁があって、それぞれ乗り越えて行くべきではないかという視点がありました。

ここから先の20分ばかりの時間は会場の皆さんの感じていること、考えたこと、いま話を聞いて疑問に思ったこと、そんなことを元にやりとりをしていく時間を持ちたいと思います。ありがとうございます。では会場の皆さんから、ここまでの話を聞いての感想や、感じていること、思っていること、どんなことでも結構ですので、お聞かせいただければと思います。では、どうぞ。

寺 沢： 先ほど高田先生のほうからお話がありましたように、例えば小学校に学校林をつくる。私も3年前まで県庁にいまして、林業普及員をやらしていただきましたが、そのとき、今日お見えになられているのでしょうか、笹子小学校で、学校林をつくったときに、一番感じたのはサポートするのはだれなんだ。学校をサポートするのはだれだというので、考えてPTAじゃないんですね。たまたまですよ。



そのときには笹子は林業研究会というのがありまして、これがおじいちゃん、おばあちゃんだったんです。要するに、笹子において、PTAというのはやはり働き蜂だから、平日は休めないわけですよ。おじいちゃん、おばあちゃんというのは孫のためなら何やったって痛くもかゆくもないというかたちで、おじいちゃん、おばあちゃんが非常に動いてくれたわけです。

1年目はそういうかたちで、例えば緑の少年隊というのをつくりまして、笹子をやったときに、森の教室をやろうといったときに、子ども80人に、行政も入りまして、全部で200人ぐらい、要するにサポートするのが多かったというぐらいのをやったわけです。

2年目はどうかと言うと、おじいちゃんたちに言う、「おお、お祭りだから」という話が来たわけです。これはすごいなと、涙が出るような話でありまして、やっぱり年寄りはお孫のためならお祭りなんだというぐらいの気持ちが出たということなんです。鹿留に林業研究会のようなおじいちゃん、おばあちゃんの老人クラブがあるかどうかは分かりませんが、やっぱりそのPTAとは働き蜂なもんですから、平日出てくれというのは非常に酷な話だと思います。それだったら、老人をもう少しお使いになったらいいんじゃないかという感じがします。

司 会： はい、ありがとうございます。壁を乗り越える力として地域の年配の方、おじいちゃん、おばあちゃんの思いとか、力をお借りしてもいいんじゃないかというご意見だと思います。ありがとうございます。ほかの方、どんなこともでもいいので、コメントいただければと思います。はい、どうぞ。

長谷川： 初教の卒業生で、今日静岡から来ました。普段は小学校の教員をしていますが、富士自然観察の会というところで活動をしている長谷川と申します。先ほど年配者の話があったんですが、自分の経験の話しかできないんですけども、今年度、静岡県の県のほうで森林鑑定団というのをやりまして、県民に森の魅力を知ってもらおうという授業をやったんです。先週その発表を自分がしてきたんですが、自分の所属している自然観察の会で、鑑定リーダーということで、自然観察のリーダーというのを請け負って、県民から広く募集をかけたんです。

やってみて思ったことは、自然に親しむことには一般の人たちには壁があるのかなあと。なかなか集まらないんですね。先ほど年配者の話があったんですが、参加者ほとんどがリタイアをされた60以上、70歳ぐらいまでの、野山を歩きにわざわざ来る人たちなので、とても元気な方たちなんですけれども、先週も発表したときも、そんな意見を自分が言ったんですが、結局、子どもか年配者しか来ない。自分と同世代の30代、40代の参加者が自分の参加した中ではゼロということで、非常に寂しいなあと。

森を知るという授業だったもので、森の魅力は何だろうということを探る取り組みだったんですね。そのためにはやっぱり森のすばらしさ、自然のすばらしさをまず知ってもらおうということ私たちが持たなければいけないんじゃないかという意見を言ったんです。でも、結局集まって来られるのは小学生、幼稚園か、すでに仕事をリタイアされた時間のある方々なので、その子どもと年配者の方たちを利用というわけではないんですけども、活用して、環境教育というか、生涯学習の視点から広めていくことも必要なのではないかということ最近感じています。自分の思いばかりですけども、異常です。

司 会： ありがとうございます。先ほどのご発言にもありましたように、働いている世代、働き蜂の世代はなかなか時間的にもつくるのは難しいというところがあって、では集まってくる人たちの力で何かできないだろうかというところの思いだった

かだと思います。ありがとうございます。ほかの方は何かありますでしょうか。はい、お願いします。

西 本： 西本ですけれども、環境教育という言葉のイメージの壁という話があったんですけれども、環境教育というと、やっているほうも空々しい感じがするというか、結局身に付きはしないのだという、すれた部分というか、そういう感覚であると思うんです。一般的な環境教育ですね。それはなぜかと言うとはっきりしていて、余裕があったら、やってもいいという付け足しでしかないんですよ。そういう部分に環境問題というのが、たいていの人の場合というのは、たしかにそういうふうにできたらいいことだと否定はしようがないから、いいことだということなんですけれど、ちょっと余裕があったら、片手間にやってみようか、でも余裕がなくなったら、そんなことかまっちゃいけないよというふうに分なるんですね。

そんなこと、子どもに教えたってどっちみち自分と一緒にしよ、ということになるわけですよ。例えば、環境にやさしいものを使いましょうといっても、余裕があればそうするけど、別にそれをしないと自分の命に直接すぐにかかわってくるわけじゃないから、切実な問題じゃないわけですね。だからそういうことが環境教育というものの、ある種のいかにわしさというのか、そういう部分が一般的にはあるんじゃないかと思うんです。

二つのことを言いたいのですが、一つは、環境教育というか、環境という方向を向くというのは、本当の姿というのは、付け足しじゃだめなんだということなんだと思うんです。本体部分がそっちを向かないとだめだという。

この例として、私、午前中、学生とやっている農業の話をしましたけれど、僕は実はあれを始めたときは、片手間にできると思ってたんです。片手間にできるというのは、例えば週末に日曜大工という言葉がありますけれど、日曜農業の範囲内でできるようなことを自分もやりたいし、そういうかわり方でもいいから、多くの人が農業にかかわることが必要だと最初考えていたんです。

ところが、朝言いましたように、丸5年やって小麦とか米とか、蕎麦とか、そういうものまでやり出すと、だいぶ考え方が変わってきたんです。これは到底片手間じゃできない。むしろそういう作物を育てることの必要性にかなった生活の仕方が、作物のほうから強制されてくる。それで、本当の話、それに振り回されるようになってきたわけですよ。僕はうちの教員の方は何人かいらっしゃって、どこかふと数時間いなくなることがあるんです。そうすると、畑へ行っているわけです。それで大学の仕事に支障が出ているわけですね。それが本当なんだと思うんですよ。

そういうふうになってくると、それはもう付け足しじゃなくて、そちらのほう本体に近くなってきて、逆にこれまでやってきたようなことのかなりの部分が本当にやらなければいけないことなのかと思えてくるというふうな。それは大学教員というやや余裕のある仕事だと言ってしまえばそれまでですけれども、おそらくそういうことで、本当の環境を考えるとというのは、環境の部分が付け足しではなくて、本体になっていくということだと思うんです。

ただし、そういうふうにできる条件を整えていたり、そこまでの信念の強さを持っているという人はそう多くはないと思います。子どもにそのことをそのまま教えるということはどうやってできないわけです。そう考えていくと、しらいみちよさんのような方の生き様を子どもに見せることだと思うんです。その、どうしてそんな小さい、人間に役に立つわけでもない動物を守るためにあそ

ここまで熱心になれるのか。2000万という大金がポンとどうやって出せるのか。ああいうことが大事だ。ああいうことを仕事にしていよいよ、と自分のお父さんもお母さんも言わないけれど、世の中にはあんな変な人がいるんだという、あんなことをして生きてる人もいるんだということを、本当にその人がそこで生きてしゃべっているわけですから、その迫力のもとに子どもをさらすというか、子どもに、こういうふうにしてこんなことを考えて生きている人も世の中に本当にいるんだよということをまざまざと見せつけるといいますかね。僕はこれ以外にないんじゃないかというふうにつくづく思っています。

司 会： ありがとうございます。付け足しではだめなんではないかというところ、ゆとりがあれば、余裕があればやればよいという環境のことではなくて、本当にちゃんとやっていくと片手間ではできなくなってきて、自分の生活の仕方、リズムみたいなものがある種の変化を帯びてくる感じでしょうか。場合によって、仕事に支障が出てきたり、暮らし方自体を大きく変えなければならなくなってくるようなこともあるけれど、そこがある種の本筋なのではないかというところのコメントと、同時に何かを教える、教材をつくって教えているとか、教科の中で教える、しゃべって教えるというふうな子どもに対する接し方ももちろんあるでしょうが、同時に今もって生きている大人たちの生き様とか、態度みたいなものでしょうか。我々がどういう行動を起こしているのかというのを見せていく部分というのがあるんじゃないかというコメントだったかと思います。

今の話を聞いて、感想、ご意見、コメント、ありましたら、どうぞ。

しらい： 本当に私、自分で馬鹿だなあと思うんです。ただ、なんでこうなっているかと言うと、私自身が小さいときに、山や川で遊んで楽しかったからなんですよ。で、結局、いま環境教育って、教えるとか、育てるとい言葉自体があんまり私は好きじゃなくて、なんでこんなふうになってきちゃったかと言うと、子どもたちが遊んでないという事実がいちばん大きいのかなあと。川で遊んで、恐い思いをしたり、山の中に入っているような生き物を発見したときの感動とか、そういうものが自然にあれば、こんなに教育だなんだってことじゃなくて、その遊んでいた川に、「あれ、魚いなくなっちゃった」って、子どもが自分で気づいて、これはまずいとなっていくことが一番大事だし、たぶん自然なんですよ。

だから、私は本当に小さいときすごく楽しかったし、足元を魚がキラキラッと泳いでいくときの感動とかというのも、体にいっぱいあって。だから今おっしゃっていたように、片手間ということでもなく、私の生きる中で、自然との触れあいというのが欠かせなくて、今ムササビのこととかを一生懸命やるのが、音楽のエネルギーになってるんですね。だから、子どもたちも、いま遊ばなくなったのは、一緒に遊んであげる佐藤さんみたいな大人がいなくなってきたということもすごいあると思うんです。だから佐藤さんなんか私は都留ですごい貴重な人だと、いつも本当に思ってるんです。ああいう、「行こうぜ」っていう大人がいなくなったという大人の責任がすごい大きいかなという気はします。やはりそれは学校とかなんとかじゃなくて、大人と子どもの関係の中で、自然につくり上げていってれば、子どもが自分で気づいていくもんなんですよ。

この間、十日市場である方たちと話している中で、すごい話だと思ったのは、神奈川の子どもたちを都留の川に連れてきて、稚魚を放流するという話をしたときの話です。神奈川の子どもは、上流から来て下流のほうの水を飲んでいるから、川というもの、水というものにもものすごい意識が高いんですね。それで、その子どもたちがまず稚魚を放流する前に何を始めたかと言うと、ゴミ掃除を始

めたんですって。自然に。「えっ、ここに放流するの」っていう気分だったんだと思うんですが、ゴミを拾い始めたんですって。それで都留の子どもたちはそれを見ているけど、最初はぼうっとしているの。で、次の年はゴミ拾いを一緒にやり始めたんですって。次の年は、なんと都留の子どもたちは神奈川の子どもたちが来る前にゴミ掃除をしたんですって。それってすごくいい話じゃないですか。先生が教えなくてもいいんです。子ども同士でもいいんだと、意識がちよっと高い子どもたちを逆に連れてきちゃったりして、子ども同士のやっている中で、ああそうか、川ってきれいにしなきゃいけないんだな。ゴミ捨て場じゃないんだなっていうのを感じてもらって、子どもが自然に動くようになってくるというような、そんなこととか、そういう本当に川の中に入る経験をたくさんさせてあげることで、「教育」とかと言わなくても自然に。

逆に子どもが大人に教えるぐらいに、そういう時代になってくるかもしれない。私はそんなふうに思っています。私はすごい人間でもなんでもないんです。本当に馬鹿なだけで。ただ本当に小さいときの経験が今あると思います。すいません。

司 会： ありがとうございます。

下 澤： 先生方からの発言がありませんので、学校の大家さんとして申し上げたいと思います。小学校は、中学もそうですが、いまはきっと一年中大変忙しいと思いますね。授業をしなけりばならなければならぬ時間数が限られていることもありますし、それから、環境教育のように、なんとか教育というふうに冠のつく教育がたくさん入ってきています。少し前までは安全教育なんていうのもありましたけれど、今は食教育というのもトレンドで入ってきています。環境教育もその一つかと思ひます。

そうしたことに、いま現場の先生方はきっとアップアップしていることだと思ひます。ましてや、森を預けられるとなると、これは一年管理するだけじゃないですね。いまシオジ森の学校では、5年計画で小学生の家族を対象に苗木を植えて、次の年は下草刈りをして、あるいは枝打ちをして、5年間は管理しようということをやっていますけれど、苗木を植えるということは非常に簡単なんです。その後の手入れが大変です。で、そのあとどうしていくかということが大変です。実際に材木として役に立つまでになるには、40年や50年は当たり前、場合によっては60年もかかるわけですね。これを小学校や中学校の負担にしていひんでしょうか。

先ほど笹子小学校の例が出ましたけれど、私はその当時、笹子小学校におりました。先ほどの寺沢さんに、大変助けていただきました。というよりも全部やっけていただきました。私は子どもを学ばせるために山へ連れていっただけ。あとは地域の方たちや行政の方たちがみんな面倒を見てくれました。だからできました。それがなければ、一つの山を、一年だけだったら、まだ校長先生も頑張ってくれるかもしれない。それを何十年かかるか分からないことを、一つの学校に背負わせるということが果たしてできるんでしょうか。すぐ近くに昔から山があつて、地域の力を貸してくれるということだったら、これは比較的容易だと思ひます。

先ほど上田先生が環境教育ってよく分からないというような趣旨のことをおっしゃいましたけれど、私も、学校の中で改めて環境教育と言われると、きっと多くの先生が戸惑うだろうと思ひています。これは当たり前のことだからですよ。

本来、当たり前のことは、家庭や地域ですべきこと。食教育だって、本来は家庭でしなきゃいけないこと。地域でしなきゃいけないこと。そうしたことが次々学校に持ち込まれることは、やっぱり避けなければいけない。本来、学校は知育

をすべきところ。その知育ができないから、学力の問題が云々されているわけでしょう。

ですからもう少し広い視野から学校教育をとらえていかないと、私たちのプロパーからみんな学校にお願いするなんていうことは避けていかなければならない。午前中にも、地域からのすばらしい提言がいくつかありましたけれど、そうしたことを充実することによって、ああ、学校もやってみたいな、そういう応援団がいるんだったら、ぜひお願いしたいというようなふうにしないと、これはいくらたってもできることではないと、私は思います。

私はいまシオジ森の学校で、さまざまなプログラムに取り組んでいますけれども、これはまず参加するスタッフが、先ほど西本先生のお話にもありましたけど、本当に自分にとってかけがえのないもの、楽しいものだ、必要なものだというイメージがなければ続かないと思っていますから、そうした私たちの活動に、「ああ、やっぱりおもしろそうだな、やってみようかな。子どもを連れて参加してみようかな」と、そういう雰囲気が出てきて初めて本物になるんだと考えています。

何かどこかからかけ声がかかったからやる、とかいうものではなくて、切実であればあるほど、自分はそれをしなければならぬ、そうしたほうがいいという思いがなければできないことだと考えていますけれど、会場の皆さんはいかがでしょうか。

司 会： はい、会場の皆さんはいかがでしょうかというところで、ちょうどディスカッションの時間になりました。でも少し時間をとってでも、もし会場の中でお答えいただける方がいたら、それはぜひお聞きしたいと思います。いかがでしょう、どなたかありますか。もしくは登壇者の方からでもいいので、最後、いろんな視点が出された状態ではありますが、いただければと思います。高田さん。

高 田： 校長先生も学校に長いこといらっしゃって、僕も長いこと学校に行ってたんで、非常によく状況は飲み込んだうえでしゃべっているわけですけども、まさに大阪に私おりましたから、とりわけ人権教育ですね、いまは人権教育、昔は部落問題学習であるとか、在日朝鮮人教育であるとか、何とか教育と山ほどある。大変なんです。道徳の時間や特活の時間をなんぼ消費しても足りないぐらいですね。何とか教育というのがあるんですが、ふと考えたんですよ。

生きてる人間は一つで体も一つなんですね。どうしても、教員というのは、教科にしばられちゃうので、文節化しちゃう、分けて考えちゃうんですけども、例えば森にかかわっているいろんなことを働き出して、テーマを森でとらえたっているんな人権の教育もできるし、自然の教育もできるし、人間関係のトレーニングもできるし、様々な問題がとらえられるんじゃないか。ホリスティック教育という言い方で、全体性をもう一回つなぎ直したうえでやってみようじゃないか。それは別に食育という切り口で、食べるということをテーマにしてその学校が皆さんで取り組んでも僕は全然かまわないと思いますし、それは切り口の問題であって、それが学校林だったら、学校林をテーマにして、労働の問題とかいろいろかかるとか、いろいろなところからそこへ切り込めると思うんです。

ですから僕はこれからは食育もすべて含めてやらないといけないうことは、頭の中に先生方は入れないと思うんですけども、やることはそんなにたくさんできないので、テーマを絞り込んでこれはというところで、先生方の思いで、やっていくということなのかということ。それが一つ。

それから学校林の問題で、いろんな日本中の学校林とかかかわって、私、前身が岐阜県の林務におりましたので、林務の職員でしたので、そういう相談を受ける

んですけども、とにかくさっきの話じゃないですけど、学校で全部背負い込むと無理ですね。結局は何もできなくなってしまって、学校林を放置してしまって大変なことになっているという状況が全国的にあります。そうではなくて、これからもし森とかかわるときは、地域の人、だから先ほど言いましたように、地域の中の一つとしてかわるということですね。学校だけがやると大変なことになりますので、それこそ年配者の集団もあるし、ひよっとしたら子どもさんお連れになった若い世代もあったり、いろんな方々、いろんな主体が一つの森にかかわって、そこをどうするかということについてやっていく。そういうものをつくっていかないと、多分先生おっしゃるように、まず無理ですね。そういうことで、いまご協力いただいて、鹿留の一つの事例をつくっていったらと、幼稚園と、小学校さんとで入って、地域の、PTAもありますけれども、これから先、老人会の方とか、いろいろ経験者も入りながらやっていけたらと思っています。

司会： では、ディスカッションの時間、こちらあたりが打ち止めという感じでしょうか。はじめ高田さんの基調提案のところから始まり環境教育というのは動ける人間をつくる教育なんだというところですね。ヘルプメッセージの話があり、信用であり、ウィンウィンのシチュエーションをつくる、お互いが、相手が得をするのは何なんだというのを考えようという話から入っていきました。

いくつかのお話がありましたが、人間のヘルプメッセージも大事だけれど、自然からのヘルプメッセージを受け取れることが大事なんではないかということ、私やあなたの損得を超えたところでもう一つの主人公を立てて、それは子どもたちであったりヘルプメッセージを出している動物であったりするかもしれないけど、少し主人公を立て直しするような感じのアイデアもあるのではないかという話が出てきたかと思います。

それでも学校や地域が連携して、環境教育や環境のことをやっていこうというとき、いくつかの壁があるというところで、環境教育という言葉が持つイメージ自体が一つの壁なのではないかということとか、いずれ政治というものにかかわっていく可能性、思いの壁、心の壁、そんな感じの話から、後半のディスカッションが進んでいったかと思います。

発言の中でいくつか担い手の話が出てきました。シニアの方、地域の子どもたち、子ども子どもというけれど、我々大人サイドの生き方とか、働き方とか、暮らし方、それ自体がある種の転換を見せていく、生き様とか態度みたいなもので見せていく必要があるんじゃないかという話。

同時に、そうやって難しく教える感じじゃないぞ。これはやはり遊びだ。子どものしっかり自然の中で遊ぶ。これは楽しいんだ。何かがあっても変化を自分で感じとれるような自分たちで勝手に気づいていけるような、そんな感じの場づくりというのをわれわれがしていければいいんじゃないかという意見もありました。

あと学校の話は大分出てきたかと思います。学校中心にして考えるとうまくいきにくい。学校が全部やらなければいけない。全部学校に押しつけようみたいな感じになると、必ずこれはできないというのは見えてきたところのラインかと思えます。学校サイドで抱え込まずに、我々の地域、家庭から何か一緒にできることとか、学校サイドもこれなら一緒に乗ってみたいという気持ちになるような取り組みを発信していけたらということを感じております。ここまでのところで90分、限られた時間での話でありました。

ご登壇いただいた4名の皆様、本当にありがとうございました。(拍手)

---

## 終わりの挨拶

---

都留文科大学 社会学科教授 畑 潤

---

お集まりいただきました皆様、今日は午前、午後と一日熱心に参加くださり、大変ありがとうございました。私、社会学科の教員ですが、地域センターに属しております、『センター通信』などにかかわっているということがありまして、昨年に続きまして、閉会の挨拶の役割を負うことになりました。この第5回目の地域研究交流フォーラムのテーマはここに掲げられていますように、「地域とともに 自然とともに 私たちがめざすもの」ということで、環境教育という時代のテーマを実践的に豊かに問い直していくという、そしてお互いの試みや思いを交流していく、そういうことを設定したものでした。このフォーラムは同時に採択されました現代GPの2年目の集約ということにもなります。そういうものとして大事な意味を持つフォーラムであるわけですが、わずかばかり振り返らせていただこうと思います。



第一に午前中の環境教育GPの活動報告についてです。北垣さんの――親愛の念で全部さんで呼ばせてもらいますけれども――北垣さんの自然に学ぶというのはフィールド・ミュージアムの構想を実践によって開いていく貴重な報告だったと思います。この取り組みは、北垣さんの発言にもありましたように、埼玉県の見沼というところ、都市部に残されて緑の豊かなところだそうですね。新しいフィールド・ミュージアムの構想を着想させているわけですね。大田堯先生のご活躍があるということですが、すでに埼玉大学も参加するという意向を示しているようです。

西本さんの農に学ぶというご報告は、西本さん自身は農というものには全く無縁の印象を与える方なんですけれども、すでに学生、教員、有志で、5年間の実績を積み重ねておられるわけですね。そういう西本さんのような人が農に向かっておられるというところが、私は大変おもしろいと思って報告を聞き、また日常、その実践の片鱗を伺わせてもらっています。聞きますところでは、冬菜とか里芋の種取りをしてこの都留の地にふさわしい農業、そういったものを目指しておられるということのようです。

河野さんの地域に学ぶというのは、都留フィールドミュージアムカフェの実践が報告されたわけですが、今日は、都市部ではもちろんのこと、農村部でもお互いに顔を合わせるという当たり前のことがなかなか難しくなっているという状況があると思います。そういうところに多彩な内容をもつ交流の試みがなされているということがよく伝わってきたと思います。

これらの実践は環境教育GPという取り組みが持っている非常に豊かな内容、あるいは方向というものを示唆しているように思われました。

第二に、午後の全体集会ですけれども、「みんなで語ろう！環境教育」ということで、お互いの経験や考えを出し合う。そして地域や学校における環境教育のあり方を探ろうとするものでした。本学の高田研さんの基調提案をもとに禾生第一小学校の上田司さん、地域の方で歌手のしらいみちよさん、文大生の岡田淳さんがパネラーとして発言してくださいました。限られた時間ではあ

りましたけれども、フロアからの参加がありまして、長野、静岡、大月、郡内に限らず、いろいろなところから参加してくださっているようなのですけれども、環境教育という奥深いテーマをめぐる自由な共同の探究という時間を持たたような気がいたします。

高田さんからウィンウィンの角度の問題を提案されましたけれども、さまざまな意欲が眠っているということと同時に、しかし壁があるということをめぐって大事な意見の交換ができたように思います。

そういったことを思いますと、きょうの午後の全体のこの話し合いは午前中のご報告とよく響き合っているような感じもいたします。

それから、第三に午後の展示と交流の時間についてです。これも去年の経験を引き継ぎながら、さらに充実したものになってきたように思います。102番教室を使いまして、フィールド・ミュージアム部門の常設展示、草木染め、カジカの保全、カワラナデシコの保全、プロジェクトX、たんぼクラブ、Social 菜園's club、市立図書館、シオジ森の学校、ほしのさと工房、そういったものの展示があり、またロビーを使ってフィールドミュージアムカフェ、ソローの小屋、Grow Wild Camp、そういった展示がありました。さらには、屋外にテントを張って、昨年にも続きまして岡部鉄工所の薪ストーブの実演の展示も行われました。これらの相当数はすでに年月を重ねつつあるものですし、また新しい実践も始まっているということです。それぞれに貴重な経験と知恵が蓄えられていることは疑いないことだと思います。そしてそれらが久しぶりに顔を合わせるということで、そうしたそれらの交流自体が歴史を持ち始めているという感想を持ちました。

最後、第四に、今日の時代の様相ということと、このフォーラムの持つ意味について一言発言させていただきます。昨年来の世界的な金融危機ということも重なりまして、今日、地域社会にも、それから私たちの暮らし、あるいは若者の人生の見通しという点においても、容易ならざる自体が進みつつあります。そうであるからこそ、ごまかしのきかないものとして、私たちの共同社会の成り立ちというものを見つめ直し、試練の中に真に見通しのあるものを見いだしていきたいわけです。今日私たちがこのようなフォーラムの交流の場を持っていこうとすることには、そのような希望が込められていると考えてよいと思います。一つひとつの実践はささやかなものでありましょう。けれども、そのささやかな実践がもつ値打ち、あるいは生命力を、私たちはお互いにしっかり見つめあっていきたいと思います。今年のフォーラムの、地域とともに自然とともに私たちが目指すものというテーマの設定には、そういう思いが込められていると考えてよいと思います。

このフォーラムはそのように、お互いの実践の意味を確認しあっていく場になったと思います。おしまいに本日登壇してくださった皆さん、それから展示交流の企画に参加してくださった皆さん、このフォーラムの開催を支えてくださった学生諸君、いちいちお名前は挙げませんが、お礼を申し上げたいと思います。また司会を務めてくださった青木将幸さんにも感謝申し上げます。

そしてフロアでご参加してくださった皆さんに心よりお礼を申し上げたいと思います。この交流の場が新しい出会いを促して、お互いの実践をさらに進めていく契機になることを願いまして終わりの挨拶にさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)



# 活 動 報 告

2008年度

# 活動報告

2008（平成20年度）

## Ⅰ. 2008年度の活動について〔概況〕

2008年度は、本センター開設から6年目となり、「第二期」（昨年度の年報第4号の活動概況を参照）の2年目であったが、まず、三部門活動がそれぞれに、新たなウィングを伸ばしてきた点が指摘されよう。フィールド・ミュージアム部門では、富士急行との連携が日本民営鉄道協会も含めた連携へと拡大し、大学前駅の情報発信拠点としての機能がさらに高まったことや、大学の専門性を活かす形での、自治体・住民・大学の協働による「生きもの保全型の川づくり」計画など。発達援助部門では、SAT事業での市内小中学校と大学教員の共同によるケースカンファレンスが具体化に近付いたことや、地域教育相談室へのニーズがQ-Uの基礎的理解から学級経営の方法へとシフトしてきたこと、地域情報教育での宝小と東桂小との遠隔交流授業が実現したことなど。暮らしと仕事部門では、新たに森林再生研修会を開催するようになったことなどである。これらの新たなウィングは、これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが、ようやく形を成したという性格が強く、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認したい。

しかしながら、部門活動が拡充するにつれ、スタッフ・体制の拡充が課題となるのもまた必然である。フィールド・ミュージアム部門からは、急激に増加したニーズに対応するための専任スタッフおよび職員の配置が求められ（現代GPが終了する来年度以降の体制づくりの課題）、発達援助部門のSAT事業および地域教育相談室からも、同様にスタッフの拡充もしくは体制の

拡充が求められている。とりわけ、地域教育相談室については、これまでの河村一品田ラインの活動に加えて、新たに筒井ラインの活動展開を可能にするためには、スタッフの拡充が緊要である。本センターが、法人化した本学の経営戦略の一つの目玉だとすれば、それに見合った整備・拡充がなされてしかるべきであるが、その際には、本センターの開設以来、活動を通して確認・共有されてきた「特色」「らしさ」が堅持されるよう、特段の注意と配慮が求められる。（ちなみに、昨年度の活動概況で整理された「特色」「らしさ」とは次の4点である。①三部門を柱とした活動を展開する ②地域の人々や組織等と連携し、ネットワークを築きながら活動を展開する ③現場におもむき、問題に取り組む地域の人々と共同して活動を展開する ④一時的なサービス提供に止まらず、地域と本学の双方にとって成長・発展につながる活動を展開する）

次に指摘できるのは、いくつかの活動・取り組みの担当教員たちが、授業とのリンクや各種のネットワークの場を通して、あるいは、各種の研修会等への参加促進などの形で、これまでも増して、意識的・積極的に学生参加を促しつつあることである。具体的・現実的な課題は多いが、センターの活動は、より多くの学生に開かれたものになってこそ、その真価が発揮されよう。この点で、地域交流研究教育プロジェクトの一つ（障害を持った人々の、地域での就労に向けた支援のあり方について）からの、「人々の生活の質は『仕事のあり方』のみならず、『暮らしのあり方』にも規定されていること、したがって、（今後は『就労支援』に限定することなく、）人生の課題を幅広く

捉えながら、その課題に答えていくことが必要ではないか」との問題提起は、三部門のすべてに通底する人間観・社会観を表すとともに、諸活動への学生参加の意義の所在をも指し示しているように思われる。

最後に報告を一つ。年度末（3月5日）に島根県立大学と島根県中山間地域研究センターの共同事業「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷』づくり」のスタッフによる「現代GP」の視察を受けた。そして、本学の「現代GP」が一朝一夕の事業ではないこと、長年にわたる地域と本学、地域と学生のつながりが土台にあることを理解

された先方から、「環境や地域に関わる人材育成という、どうしても性急で直接的なものを考えがちであるが、貴学のように、長年にわたって自然な形で地域と大学、地域と学生がつながり、結果的に人材も養成されるというのが、本来のあるべき姿なのではないかと目を開かされた」との感想が語られた。これは、本センターの活動の性格をも言い当てた言葉として、長く記憶に留めておきたい。

（文責・西本勝美〔前地域交流研究センター長〕）

## II. 各部門の活動

### II-1. フィールド・ミュージアム部門

#### はじめに

2008年度は、フィールド・ミュージアムが地域交流研究センター（以下センターと記す）の一部門として位置づけられ活動を開始し6年目となった。この間、地域の図書館など社会教育機関との連携や「つみ木広場シンポジウム」、「シオジ森の学校」の取組、富士急行株式会社との連携事業、地域の写真資料のデータベース化など幅広い活動を展開してきた。こうした具体的な活動を通して、しだいに部門として取り組む活動内容が明確になってきた。

また2008年度は、現代GP（環境教育GP）採択から2年目にあたり、部門の機関誌『フィールド・ノート』もオールカラーでの印刷や配布部数の増加などにより、“フィールド・ミュージアム”の活動内容とその理念が少しずつ学内や地域に浸透し、評価されてきたように思う。また、富士急行株式会社と日本民営鉄道協会との連携事業として都留文科大学前駅の駅舎内がフィールド・ミュージアム部門の情報発信の拠点として整備されるなどの進展がみられた。

さらに長年のフィールド・ミュージアムとしての活動の蓄積から幅広い交流や新たな取組がうまれてきた。たとえば本学の元

学長で都留自然博物館の構想をもっておられた大田堯先生がさいたまの見沼におけるフィールド・ミュージアムを構想されその実現に向けた取組を進めておられる。大田先生は都留文科大学のフィールド・ミュージアムに関心を示され、2009年5月13日から15日に来学されるなど貴重な交流の機会も生まれた。また、国立科学博物館での企画展「シートン展（仮）」（2010年3月開催予定）の企画立案に携わり、現在までフィールド・ミュージアムが集めてきた標本資料や映像資料の整理、フィールドでの映像の記録などの準備を始めたところである。

上記の取組以外に、市民や行政、企業から地域の動植物に関する問い合わせ、連携の問い合わせ（たとえば環境副読本への参加依頼やピオトープづくりへの協力依頼）などが急激に増えた。こうした依頼やフィールド・ミュージアム部門に寄せられる期待は、センターにとって地域交流を幅広くまた確かなものとしていく契機となると思われるが、現在のところそれらの依頼に十分に対応できる体制にはなっていない。なお、現代GPでは事務局員と研究員がそれぞれ1名おり、問い合わせへの対応や展示制作、観察会の実施など具体的な場面で効率的・効果的に部門の事業を進めることがで

きた。2009年度で現代GPは終了するが、今後も地域連携や地域貢献をこれまで以上に目指すのであれば（あるいは現状維持でも）、常勤の専任スタッフおよび職員の配置が必要であろう。

以下に2008年度の活動内容を整理し、最後に今年度の活動計画をまとめた（各プログラム名は、センター発足時に提出したフィールド・ミュージアムの中期構想にもとづいて記した）。

#### (1) 生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

- 1) 大学附属図書館ビオトープの作業を継続した。年間を通して週に1度の割合で移植や剪定、草刈りなどの世話をおこなってきた。現代GPの事業により学内のビオトープ（附属図書館、一号館裏、自然科学棟の林、「ムササビの森」）に掲示板を設置できたこともあり、今年度はさらに学生や職員の協力も得ながらビオトープの魅力を全学に伝える工夫を試みたい。また、博物館概論、博物館学各論の授業とも連携してミニ掲示板を附属図書館ビオトープに設置した。
- 2) 「ムササビの森」の手入れを継続し、とくに冬場にスギやヒノキの枝打ち、導線づくりをおこなった。また現代GPの事業としてムササビの巣箱を3月12日に1個（2009年5月26日に2個）を設置した。巣箱内にはライブカメラが設置しており、今後は巣箱に入ったムササビを学内や富士急行線都留文科大学前駅の駅舎などへも配信する予定である。
- 3) 1号館ビオトープの管理と授業への活用。年間を通して定期的に草刈りや剪定、植樹などを学生や教職員とともにおこなった。1号館ビオトープを教育へ活用するために、授業内で生物相の調査や自然観察、解説板や展示の作成をおこない、春・夏・秋・冬の4回にわたり、展示内容を入れ替えた。
- 4) 『フィールド・キャンパスだより』の発

行。キャンパス内の自然財産の記録と、キャンパス内の自然に親しむきっかけ作りの目的で、2003年から発行している。2006年からはカラー刷りの月刊となり、「教材コラム」「暮らしの知恵」のコーナーも新設し、学内で配布したり、授業で活用している。昨年度も12号発行し、キャンパス内および周辺の生きものの写真を222点、教材コラムも12種類掲載した。

#### (2) 地域の知恵に学ぶ環境復活のプログラム

十日市場中屋敷地区の果樹園の手入れを継続した。また、地主さんのご協力のもと田植えや麦づくりを実践した。苗づくり、田植え、水見、草取りなど一連の作業を学生が中心となって取り組み、麦も収穫後に精麦した。この作業により学生が頻繁にフィールドに出向くようになり、現場での実地の経験を積むこととなった。これら一連の作業は学生にとっても貴重な経験となったようで、土に触れ農業や食の現状を実地に学べてよかったとの感想が昨年度同様に聞かれた。この中屋敷フィールドでは、農作業とともに動物観察の拠点づくりやイノシシやサルなど大型獣との共生のあり方を探る研究にも取り組んでいる。

#### (3) 学内の他団体との交流プログラム

附属図書館展示コーナーにおける展示活動を継続した。附属図書館と連携し展示スペースを活用し、フィールド・ミュージアムの活動、ビオトープの生きもの紹介などを展示した。小口尚良氏が学生、市民と活動している「うら山観察会」の報告ポスターも展示した。授業では、博物館学各論と連携し、「都留さんぽ」と題した企画展を開催、2008年1月30日から3月24日までの日程で展示した。現代GPで研究員をしている西

教生氏も6月に「オトシブミ、チョッキリ展」、10月に「都留でみられる鳥」の企画展を開催した。こうした展示の感想ノートには学生や市民のかたがたから多くの感想が記され、「都留が身近になりました」、「まだまだ知らないところに面白いものがたくさんあることがわかりました。実際に歩いてみます」といった好意的な感想が多数寄せられた。

#### (4) 行政、企業、市民団体との連携プログラム

- 1) 都留市立図書館との共催事業を10月28日から11月9日に市立図書館閲覧室でおこなった。「谷の町・史の里 まちの記録・記憶展」と題し、地域の歩みをセンターでデータベース化した「奥隆行写真コレクション」や「広報つる」の記事、当時読まれた本などを紹介した。
- 2) 富士急行株式会社との連携事業を進めた。昨年度まで都留文科大学前駅の構内に、「チョウの庭」をテーマとしたビオトープを作り継続した世話をし、駅構内の待合室ではパネル展示を実施していた（月1度のペースで展示替えをしていた）。11月19日、フィールド・ミュージアム部門と富士急行株式会社、日本民営鉄道協会、都留市が参加した推進協議会を開催し、都留文科大学前駅の駅舎をフィールド・ミュージアムの情報発信の拠点として整備していくことになった。また、市からの働きかけもあり駅横にビオトープをつくった。このビオトープを「三の側ビオトープ」と名付け、大学のビオトープとを結ぶネットワークをつくり自然に親しむ入り口として整備していく予定である。
- 3) 9月1日、高尾町通りのイタリアレストラン「プオーノ」におけるミニ展示に参加した。都留の記憶をテーマに地域で撮影された過去の写真をパネルにし、参加者との交流をはかるもので、2008年度で3回目となる。今回は、都留市在住の益子邦子氏が所蔵しておられる

都留の貴重な過去の写真が見出され、これらを今後、部門として写真コレクションとしてデジタル化、データベース化していく予定である。

- 4) 「シオジ森の学校」との連携事業。昨年同様、プログラム作成委員と学生ボランティアスタッフとして教員と学生が参加した。森を歩こう、森を育てよう、森の生活を楽しまう、つみき広場、オープンキャンパス等などの講座に延べ30人の学生が参加した。その中でも、森の生活を楽しまう（キャンプ）は本学が主体となっておこなっているもので、一昨年度に引き続き2回目の実施となった。これは、子どもたちとの1泊2日のキャンプを学生が企画・準備・実施するもので、都留市鹿留川大沢で8月9・10日におこなわれた。キャンプの内容は、草木染、森のビンゴラリー、川遊び、ムササビや野ネズミの観察など。参加者は学生16人、小学生18人、森の学校スタッフ4人、大学教員2人。学生にとっては大変苦勞の多い活動であったが、地域の自然や地域住民、子どもたちとふれ合いながら、自然と人間との関係について自ら考える貴重な経験になっている。

#### (5) 資料(標本)の整理と保存プログラム

奥コレクションのデジタル化作業およびデータベース化の作業の成果を写真資料目録として三巻の本に整理、製本した。益子邦子氏所蔵の写真も今後整理をしていく予定である。こうした資料は著作権などの問題を含んでいるため、公開については慎重に部門でも検討を重ねていきたい。また、「奥隆行写真コレクション」の活用については、11月より月に1度の割合でミュージアム都留において郷土研究会のメンバーにも参加していただきながら「地域の記憶を語る会」を開催し、継続中である。さらに、センター内に設置された「オープンアーカイブ」では、授業や

市内の理科教員などに活用していただく標本資料の整理とデータベース化作業に取り組んでいる。

## (6) 学生・教員・市民の参加プログラム

- 1) フィールド・ミュージアム部門の機関誌『フィールド・ノート』を5回発行した(55号から59号)。全学科、全学年の学生が20名、編集作業に参加している。また市民の方も原稿を書いてくださるなど参加の幅がひろがりつつある。印刷部数は500部で、県内外からの購読希望者が増えており、毎号130部ほどを発送している(年間5号の発行のうち、3号分は現代GPの予算で発行している。なお本誌はインターネットでも閲覧できる)。本誌の編集・発行は、記録に残りにくい生活の記憶など生きた資料を保存し、公開するという博物館の機能の一部を果たしていると思われる。この紙面では、今泉吉晴氏と「フィールド・ミュージアムの楽しみ」というテーマで連載を始めた。さらに、年度末には富士急行株式会社と日本民営鉄道協会の支援をいただきB5版の小冊子『富士急行線途中下車の旅』を5000部発行した。2009年3月には『フィールド・ノート』の編集に参加している学生が地域の魅力を整理してマップにまとめA2版の『フィールド・ノートマップ』を発行した。『フィールド・ノート』は、本学のオープンキャンパスでも配布され、オープンキャンパスで冊子を見た高校生がセンターを訪れるなど好評であった。

- 2) 菅野川・鹿留川の保全活動。

一昨年度より、全国的にも絶滅が危惧されているカジカとカワラナデシコの保全のための活動を学生とともにおこなっている。昨年度は、都留市内の菅野川と鹿留川を中心に両種の分布と生息環境の調査をおこなった。その結果、両種の生育地は昔の分布域に比べ大幅に減少していること、個体数減少

の要因としては湧水の減少や河原の攪乱頻度の減少などによる生息条件の悪化が挙げられた。また、2月に菅野川・三吉地域協働のまちづくり推進会から講演会に招待され、カジカとカワラナデシコの調査結果を報告した。地域住民との意見交換をおこなう貴重な経験となった。3月には、鹿留川・川づくり検討委員会の会合に教員が参加し、専門化としての意見を述べた。この会議を契機にカワラナデシコを始めとする生きもの保全型の川づくりを、自治体・住民・大学の協働でおこなう方向で現在計画が進められている。

## (7) カリキュラムとの連携

「地域交流研究Ⅳ」の授業を担当。『フィールド・ノート』での取り組みを活かし、冊子編集が地域交流に果たす役割を検討するということを中心に、地域の方々へのインタビューを中心に冊子を制作した。2008年度受講者は31名で、完成した冊子は、100部を制作しインタビューでお世話になった方々や地域の方々に配布した。この授業に参加した学生からは、「書くという行為が自分と向き合うものであることがわかった」、「地域の方々インタビューに行ったらたかい励ましをいただいたのが嬉しかった」などの感想が寄せられた。

## (8) その他

### 第5回地域交流研究フォーラムの開催

2009年2月21日(土)に開催された第5回地域交流研究フォーラムの企画・運営をおこなった。2008年度は、現代GP(環境教育GP)の活動報告とその担い手たちと市民との交流を目的に、「ようこそフィールド・ミュージアムへ：地域とともに、自然とともに 環境教育 私たちのめざすもの」というテーマで開催した。

## 今後の課題と展望（2009年度活動計画）

2009年度は、2008年度の活動を丁寧  
に継続しながら、フィールド・ミュージアム  
の考え方を整理していく。具体的な取組  
では新たに都留文科大学前駅を起点とし  
た自然観察会（2009年4月26日には  
駅を起点とした自然観察会を開催した。  
14名の市民が参加、また学生もスタッ  
フを含め14名、教員2名が参加し、「私  
もスタッフとして今後参加したいです」  
、「歩きなれた道にこんなにさまざま  
な生きものがいて驚きま

した」、「ほんとうに楽しかったです」と  
いった感想が寄せられた）や、富士急行  
株式会社と連携したエコツアー、小学  
校の校外モデル授業のプログラムに取  
り組む。さらに、国立科学博物館にお  
ける「シートン展（仮）」の展示計画、  
資料収集にも参加することで、これま  
で時間をかけて蓄積されてきたフィー  
ルド・ミュージアムの活動や考え方を  
具体的に検討、整理していく契機と  
したい。

（文責：坂田有紀子／畑 潤／北垣憲仁／  
今泉吉晴）

## II-2. 発達援助部門

### II-2-1. 学生アシスタント・ティチャー（SAT）配置事業

4年目を迎えたSATは、一昨年9月  
から文科省特色GPの資金的援助を受  
けたこともあり、その活動が、都留市  
内のみでなく県内にも広く認知され  
るようになってき

た。

昨年は下記表に示すように市内す  
べての小中学校に、学生を配置し、  
また多くの学生が参加した。

#### (1) SAT参加学生数

##### 1) 学校別

	学生数(延人数)								活動数(延回数)							
	前期		後期		合計				前期		後期		合計			
	A	B	A	B	A	B	C	A	B	A	B	A	B	C		
谷村第一小学校	8	18	9	17	17	35	3	51	99	58	159	109	258	76		
谷村第二小学校	9	16	9	16	18	32		22	106	21	142	43	248			
文大付属小学校		4		4	0	8			45		36	0	81			
東桂小学校	15	14	8	12	23	26		128	124	57	150	185	274			
宝小学校	3	1	3	1	6	2	8	15	7	24	9	39	16	101		
禾生第一小学校	7	1	2	4	9	5	4	63	3	20	8	83	11	88		
禾生第二小学校		10		7	0	17			38		49	0	87			
旭小学校	6		8		14	0		50		78		128	0			
都留第一中学校	4	2	2	4	6	6	3	20	9	15	32	35	41	52		
都留第二中学校	5		4		9	0	7	21		27	9	48	9	93		
東桂中学校		1		1	0	2	4		5		2	0	7	73		
小計	57	67	45	66	102	133	29	370	436	300	596	670	1032	483		
合計	124		111		264 (140) 実人数				806		896		2,185			

#### 1. 取り組みの概要

この取り組みの概要は以下に示すとおり  
である。

都留市教育委員会の協力の下、市内小中

学校に対して学生アシスタント・ティー  
チャー（SAT）を派遣し、放課後の学習支  
援と、「学力不振」「不登校傾向」「障害」  
等による困難をもつ子どもへの個別的な支  
援を学生に体験させることによって、重層

的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展を図る。

また、この事業を通して大学と小中学校との協力・連携を強めるとともに、現職教員に対しての研究的支援・学習機会の提供を行う。これには大学と学校現場とが共同し、地域をベースにした実践・研究を進展させるためのケース・カンファレンスをはじめとする研究協議会の開催も含まれている。

これらの運営にあたっては運営協議会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行うこととしており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教員養成教育モデルの開発として位置づける。

## 2. 活動の内容

### (1) SAT-A・Bタイプの活動の内容

昨年度は市内ほぼすべての学校においてAタイプの活動を行ったが、どの学校もSATの活動を高く評価しており、また学生の熱心さに助けられたことが共通に総括されている。

以下にいくつかの学校の総括を紹介する。

#### ①谷村第一小学校

全体：OSATの活動は多くの児童が楽しみにしている時間である。

○学生にとってはよい経験となっている。

○学生はとても意欲的に参加している。

#### (Aタイプ)

毎時間の活動を「学習活動」だけでなく「ふれあい活動」も取り入れることにより、児童の意欲が高まった。

#### (Bタイプ)

教育実習と比べ、長時間であるため、児童学級の成長のようすをとらえることができ、教職の意義についての理解が深まった。

#### ②谷村第二小学校

全体：○学生が学校にはいることにより、子どもにとっても教師にとってもよ

い刺激になった。

#### (Aタイプ)

児童ひとりひとりにきめ細かな指導をおこなうことができ、児童の基礎、基本の定着に有意義であった。

○学生が教材を工夫したり、プリントを用意するなど意欲的な活動が見られた。

○子どもたちとの交流活動を積極的に行い、児童理解に努めていた。

#### (Bタイプ)

○TT授業を行うことにより、理解の遅い子などにきめ細かな指導をおこなうことができ、基礎的・基本的な内容の習得に役立った。

○学生にとっては、教師の具体的な授業を参観することができ、発問や指導方法の参考にすることができた。

などである。

以上のようにおおむね昨年度も良好な活動が展開でき、確実に定着しているが、他方でいくつかの課題も明らかになっている。

①新しくはじめたSAT-BタイプはTT的な活動を主に行うものだが、事前の打ち合わせが十分でなく、教師の指導計画も知らないまま活動に参加せざるを得ない場面が散見されたこと。

②各学校の必要なSATの人数と学生の希望が大きく異なり、学校によっては十分な活動が展開できないところもあった。

(東桂中学校)

③〈学校参加〉の授業とSATの活動は一体的に取り組みれてはじめて意味を持ってくるが、すでに単位取得をしまっている学生にとって、〈学校参加〉の授業への参加を促す方法を新たに検討する必要がある。

④GP終了後の「足」の確保など。

(文責：佐藤 隆)

### (2) SAT-Cの活動

平成20年度の臨床教育フィールドワークは、学生27名の参加で、小学校3校、中学校3校、計6校でおこなわれた。

この活動は子どもとの個別対応を目指してはいるが、これまで主に学習に困難を抱えた子どもの在籍するクラスに授業時間帯にTT（チームティーチング）として入り、クラス全体を視野に入れつつ、必要に応じてその子どもに援助を行うということが中心になってきた。そのため、子どもの内面や生活状況に目を向けるまでには至りにくく、具体的な関わり方や、目に見える効果への注目、あるいはたんなる学校・子ども体験の段階に留まる傾向も見受けられた。昨年度は、そのような活動の反省をもとに、より充実した活動にするためのいくつかの改革を行った。

そのひとつは、これまで個別対応といながらも、実際は、クラスに入ってTT的に活動を行う形式が多くなっていったことを踏まえ、前年度末に各学校から個別対応の必要な子どもをあげてもらい、その子どもにより合った学生を担当につけるという作業を行った。それにより、学生も、「自分の担当の子ども」という意識が、これまで以上に強まり、TT的にクラスに入る形になったにせよ、より自覚的に、丁寧に子どもと関わっていくようになったように感じられる。学校側も、個々の子どもをより丁寧に観察し、どのような援助が必要とされているのかを管理職、担任、SAT担当などを含めてともに考えていく雰囲気ができつつあるように感じられる。

また、これまで、SAT-A、SAT-Bといった、全学的な実習体験の中のひとつに組み込まれ、各学校での担当も、それらと同じ先生にいただいていた。しかし、昨年からは、この活動独自の担当者をつけていただき、その担当者と私たち大学教員が交流を深めていくことを試みた。それにより、この活動の他との違いを、先生方がこれまで以上に感じ取ってくださり、より子どもにとって有効な学生の活動のあり方を考え始めてくださっている。このような中で、複数の学校から、学校と大学教員とで、共同で個別の子どもに関するケースカンファレンスを持ちたいという声も上がってきている。それは地域、現場に根ざしたこの

活動の深まりとして貴重なものであろう。

活動の形式としては、TT的にクラスに入りながら担当の子どもへの援助を行うもの、特別支援学級に入り、担当の子どもに臨機応変、個別対応を行うもの、保健室登校や相談室登校をしている複数の子どもに同時に関わるもの、そして、別室登校や不登校傾向の子どもに、1対1で個別に関わるものなど多様な形があった。子どもたちは、発達障害や環境的要因による落ち着きのなさ、何らかの心理的要因による不登校傾向など、様々な困難を抱えていた。

最後に、昨年度心がけた点は、ケースカンファレンスのあり方である。ケースカンファレンスとは、ひとりの子どもに関して、関わったものが報告し、皆でそれを検討しあうものである。これまで、月1回おこなってきた、大学におけるケースカンファレンスのあり方を、かなり模索した1年であった。その中から子どもへの理解や自分自身の関わりの意味を深めていく。活動の経過を報告することの多かったこれまでの反省から、昨年度は、思いに残る1回の活動の様子を丁寧に報告してもらった形式を数回取り入れてみた。昨年度の報告全体を振り返ってみると、あえてそういう形式を取らなかった回の報告も、子どもとの具体的なエピソードとそのときの自分の感情に焦点を合わせ、その意味を感じ取ろうとする姿勢が確実に増えているように感じられる。ずっと見逃してしまうような日常の中の一こまも、丁寧に見ていくと、そこに子ども理解、そして、自分を理解していくヒントが隠されているものなのである。

この活動に対する学生の満足度は、かなり良好だが、本当の意味でよい実習体験にしてゆくために、まだまだ課題は残されている。日々の活動においても、学生と学校現場の意思疎通、学校現場と大学の連携もまだまだ不十分である。学生にとっても子どもたちにとっても、そして学校現場、大学、地域にとっても意味のある活動にしていくために、更なる模索を続けていきたいと思っている。

(文責：筒井潤子)

## II-2-2. 地域教育相談室

### (1) 活動の概要

地域教育相談室の活動は本年度で6年目を迎えた。公開講座の開催及びスタッフを教育委員会主催の研修会や校内研の講師として派遣することにより、相談室の存在や役割がさらに認知されてきている。本年度行った活動は、大きく分けて以下の5つである。

- ①来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ②教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③校内研究等への講師派遣及びサポート
- ④公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

#### ①電話&FAXによる相談活動の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
学級経営・学級集団の育成・授業の進め方	0	2	4	0	6
児童生徒の問題行動についての対応	0	0	0	0	0
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	4	8	27	23	62
その他の事務的対応	18	15	65	48	146
合計	22	25	96	71	214

#### ②メールによる相談活動及び事務処理の概要（応答を1回とカウント）

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
研修会の進め方・事務処理	11	16	69	124	220

#### ③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
学級経営・学級集団の育成・授業の進め方	1	0	0	0	1
児童生徒の問題行動についての対応	0	0	0	0	0
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	2	0	0	0	2
研修会の進め方・その他	1	1	0	0	2
合計	4	1	0	0	5

### (2) 相談、研修依頼件数と種別

平成20年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。

①の「その他の事務手対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。

②は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計した。

①～④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた。

④訪問による相談活動（研修会講師）の概要

相談内容	地域別訪問件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	1	3	13	7	24
Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション	6	4	9	25	44
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	0	2	13	14	29
その他	6	2	3	0	11
合計	13	11	38	46	108

⑤形態別による相談活動の概要

形態	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
電話&FAX	22	25	96	71	214
メール	11	16	69	124	220
来室	4	1	0	0	5
訪問	13	11	38	46	108
合計	50	53	203	241	547

(3) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室の公開教育講座として、今年度は以下の3講座を開催した。

1) 第1回公開講座

①日時と内容：2008年5月31日（土）

I部 10：30～12：30

「Q-Uを活用した学級集団の理解と対応」

講師：品田笑子（都留文科大学地域交流研究センター特別非常勤講師）

II部 13：30～16：00

「Q-Uの結果をもとにした学級経営の検討の仕方～K-13法の演習～」

講師：武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）、浅川早苗（都留市立禾生第一小学校教諭）、深沢和彦（南アルプス市立大明小学校教諭）

②場所：都留文科大学1号館 1301教室・1302教室

参加者：34名

③概要：I部では、「楽しい学校生活を送るためのアンケート：Q-U」について、実施の仕方、留意点、結果の解釈と対応のポイントについての講義を行った。II

部では、実際のQ-Uアンケートの結果をもとにグループで学級の状態を分析し、問題点や級状態の改善のための具体的な対応策について検討する「K-13法」の手順を、体験を通して学んだ。

④参加者：山梨県内外の小中学校、高等学校、教員志望の学生など、34名が参加した。

⑤参加者の感想から：参加した現職の教員の感想を読むと、Q-Uのデータの活用が分かって良かったという感想が多かった。研究主任という全体をリードする立場の教師や市の指定研究で実際に活用して学級経営をしなければならない教師にとってはすぐに役立つ内容であったと思われる。山梨県内でもQ-Uを実施している自治体や学校が増えていることを考えると意義のある講座ではないかと考える。また、学生にとっては、学級経営という視点で現職の教員と交流ができる場でもある。感想からは、現場で活躍する教師の姿に刺激されたり、自分が現場に出たときの学級経営のヒントをもらったりしている様子が伺え、教師教育という点からも貴重な機会であったと考えられる。

## <参考> 参加者の感想（抜粋）

- ・生の事例で勉強することで、現場の先生方の引き出しの多さを見ることができ、大変参考になりました。自分のものになるように何度も繰り返して行きたいです。（教師志望のOB）
- ・勤務校の校内研にかかわりがあるので、勉強のつもりで参加しました。一度ではなく、何回も参加した方がよいと感じました。未知の方々とお会えたことにも感謝します。（中学校教員）
- ・研究主任としてQ-Uを取り上げているのに、知識や経験が不足していたので、とても勉強になりました。ありがとうございました。Q-Uを実施するだけでなく、分析と対策を練ることの大切さを改めて知りました。（中学校教員）
- ・学級集団の特徴と対応のポイントの説明が分かりやすかったです。また、SGEとのからみもあり、具体的な手だてが想像しやすかったです。午前の部の内容が午後の演習に生かされました。
- ・今年度、市の指定研究でQ-Uを導入しなければならないことになり、Q-Uそのものを知らなかったので危機感を感じて本講座を受講しましたが、特に対応の仕方が大変勉強になりました。今日の研修で得たものを、ぜひ、学校へ持ってかえって実践したいと思います。（小学校教員）
- ・午前のQ-Uについての講習があつてこそ、午後の演習の深まりがあつたなと感じました。もっと広くこういった講習を教育にかかわる者が学習し、客観的に、そして、教師間で問題意識を持って行かなければならないと思います。（小学校教員）
- ・Q-Uはやるだけでは意味がなく、みんなで話し合いをする中で解決策を導き出すことに意味があるのだということに気づきました。勉強になりました。（小学校教員）
- ・久しぶりにQ-Uの講座を聞いたのですが、学生の頃とは違う視点で話を聞いている自分に気づきました。K-13法はいいなとつくづく感じました。初対面の人も仲良くなれました。学校現場もこうあってほしいです。（小学校教員）
- ・Q-Uについてとても分かりやすく、具体的にお話ししてくださり、理解が深まりました。とくに“ルールとリレーションの確立状態から見た学級集団の特徴と対応のポイント”は具体的で、学級のイメージがはっきりしました。午後の事例研究も大勢の先生方の考えを聞き、すぐに使わせていただけそうな方法がありました。（小学校教員）
- ・今なぜQ-Uが幅広く活用されているのかを深く知ることができました。午後の分科会では、実際に事例研究をして教員として活躍されている先生方の生の声を聞くことができ現場に出るときの参考になりました。（学生）
- ・Q-Uについて何も分からない状態で参加したのですが、とても分かりやすく体験しながら理解を深めることができました。現職の先生方や先輩方とコミュニケーションをとりながらの演習は、とても貴重な体験となりました。（学生）

## 2) 第2回公開講座

### ①日時と内容：2008年11月27日（木）

#### I部 18：15～19：00

「学級づくりを促進するソーシャルスキル教育」

講師：品田笑子（都留文科大学地域交流研究センター特別非常勤講師）、  
武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）

#### II部 19：15～20：45

「ピンチをチャンスに変える教師と保護者の関係づくり」

講師：河村茂雄（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

### ②場所：都留文科大学2号館 2101教室

参加者：108名

### ③概要：I部では、学級集団や学校生活を活用してできるソーシャルスキル教育の実際を、体験を通して学んだ。II部では、

難しくなった保護者との関係づくりや具体的な対応についてタイプ別にそのポイントを学んだ。

④参加者：この公開講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学校、教員志望の学生などを中心として、神奈川県、長野県、新潟県からも参加者があり、合計は108名であった。

⑤参加者の感想から：I部については、教師を目指す学生だけでなく現職の教員からも具体的な学級づくりの方法を楽しく学べてよかったという感想が多かった。講義だけでなく体験を通して学ぶ構成であったことがよかったのではないかと考える。また、2部はマスコミで取り上げられている保護者対応がテーマだったので関心が高く、河村先生のポイントを押さえた講演に不安を感じていた参加者も希望が見えてきたようであった。

## ＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・少人数なので討論は難しいと思っていたが、品田先生に教えて頂いた方法を即実践して討論できる学級にしていきたいと思います。
- ・35年のベテランと言われていた現職ですが、今日お話し頂いたすべてのタイプの保護者への対応がうまくいかず、関係を改善できないまま2学期まで来て悩んでいました。個人面談を控え、不安神経症一歩手前でしたが、本日母校の講座に参加し、怖さが少しなくなりました。ありがとうございました。  
(50代教員)
- ・とても参考になりました。教師が子どもたちだけでなく保護者の方々にも配慮しながら対応していかなければならないという現実には少し残念な気持ちです。しかし、ポイントを押さえた対応をすることでお互いが気持ちよく関わることもできるのだと言うことを知り、これからの自信にもなりました。  
(20代教育関係者)
- ・I部ではワークシートを使って活動しながら楽しくソーシャルスキル教育について学ぶことができました。私は将来教師を目指しているのですが、担任になった時にどのような学級づくりを行っていけばよいのか不安だったのでとても参考になりました。自己を振り返ることもできたので良かったです。また、私は、保護者との関係が原因でうつになる保護者が増えているというニュースを聞いて、自分も同じようになるのではと不安でした。しかし、河村先生の対応の4ステップを知り、ずっと気が楽になりました。(学生)
- ・品田先生のお話を聞きながら、自分が教員になっている姿を想像していましたが、やはり教員という職業は魅力的だと感じました。実践的な具体策を知ることができ、今日学んだソーシャルスキルの方法などはすぐにでもやってみたいと思いました。また、全体を通してコミュニケーションの大切さを実感し、まずは自分自身がスキルを身に付けること、苦手分野を意識することから始めたいと思いました。  
(学生)
- ・今話題になっている「保護者対応」について基本から鉄則まで丁寧に教えていただいたため、今の学校・家庭・保護者の現状が理解でき、とても参考になりました。「保護者対応」のロールプレイを品田先生の授業で初めて行い、知識だけでどうにかなるものではないと身をもって知ったので、今回得た知識も腐らせるのではなくちゃんと自分の者にできるよう仲間内などで勉強していけたらと思います。(学生)
- ・I部では、楽しみながらソーシャルスキルが身に付く内容で面白かったです。ただ「自己紹介しなさい」という場合、話が盛り上がりすぎず本来の自分を表現しきれないことがあります。今回は具体的で興味深いテーマを話し合うので自ずと本来の自分を示せたように思います。また、印象を伝えてもらう「☆いくつ」では、自分で想像していたのとは違った内容が返ってきて意外で面白かったです。II部は、保護者対応の現状に驚きました。教師としていかに対応していくか、高いスキルが必要だと思いました。  
(学生)
- ・とても役に立ちました。この講座を聴くまで、保護者対応についてすごく不安がありました。「どうしたらいいのだろう」とか「やっていけるのだろうか」とか言う思いでいっぱいでした。しかし、河村先生の話聴き、時代が変わったと言うこと、若い教師が受けやすいクレームなどの細かい部分を知ることができ、希望が見えました。(学生)

### 3) 第3回公開講座

#### ①日時と内容：2009年2月12日（木）

18：15～20：45

「明日から使える構成的グループ・エンカウンター講座」

～ふれ合い・認め合い・支え合う学級集団を育てるために～

講師：品田笑子（都留文科大学地域交流研究センター特別非常勤講師）

武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）

#### ②場所：都留文科大学コミュニケーションホール

③概要：学級開きで使える構成的グループエンカウンターのエクササイズを中心に体験を通して学んだ。

④参加者：教師を目指す都留文科大学学生及びOBが30名参加した。

⑤参加者の感想から：参加者のほとんどが自分が学級で実際に展開することを想定し、問題意識をもって参加していたようである。小学校の新採教員は中学年を担当することが多いので、中学年の学級開きを中心にしたプログラム構成にしたことがよかったのではないかと考える。

## ＜参考＞参加者の感想（抜粋）

- ・私は4月から神奈川県で教員をすることになっています。先日、教育委員会の方と面接があったのですが、いきなりその場で「先生」と呼ばれ、非常にとまどってしまいました。でも、実際に4月からは「先生」と呼ばれます。そしてすぐに学級開きです。実際どのようにしていけばよいのか分からず不安でいっぱいでした。しかし、今回の講座では、最初の段階から教えていただき、大変多くの学びがありました。品田先生の現場での実際の失敗談や気づきを話してくださり、効果的な一方で様々な配慮が必要なことを知りました。私だけ、誰かだけがハッピーではなくクラスみんながハッピーな学級づくりをしていきたいと思います。やっぱり「感じ事典」はうれしいですね。ぜひ私も実践しようと思います。
- ・何回かエンカウンターを経験させていただきましたが、体を動かしたり、言葉に出したりして自分を様々な形で表現し、それをお互いに共有しようということは改めていいものだなあと感じました。しかし、私は自分のことを表現したり、人前で話したりすることは苦手です。初めてのエンカウンターの際はかなりの抵抗がありました。回を重ねていくごとに楽しめるようになりましたが、今だに抵抗はあります。子どもたちの中にも自分を表現することが苦手な子がいると思います。時には傷つけてしまうかもしれないという危険性を常に意識しながら、配慮をしていくことが大切だと思いました。今回紹介していたエクササイズはどれもすぐに実践できるものばかりでした。
- ・今回の講座に参加し、実際に教員になったときに活用してみたいと強く思いました。しかし、その反面、子ども達の実態をしっかりと把握した上でエクササイズを選ばなければいけないし、そのエクササイズを実践することで子どもたちの関係がどのように変化するのか吟味していかなければならない難しさがあると思いました。私は母校に教育実習に行き、3年生を担当しました。そのクラスに、子どもたちの中に入って行けない、どちらかという大人（教師）とのかかわりを求める子がいました。私がそばについて援助しても仲間とうまく関われず、話すことができませんでした。この子には無理なく参加できるようにスキルを高める必要がありますが、今回の講座で紹介していただいた「感じ事典」「神様ですか」を活用すると参加を促すことができるかもしれないと思いました。エクササイズ体験が中心でしたので理解しやすかったです。また参加してみたいです。（学生）

## （4）その他の教育関係団体との連携

### 1) 南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。3回目の会議では、地域教育相談室の活動やQ-Uの結果をもとにした学級コンサルテーションの事例を紹介した。Q-Uを活用すると学級の状態が理解しやすいことを知り、関心を持つ参加者が多かった。

### 2) 富士吉田市教育委員会

「富士吉田問題を抱える子ども等の自立支援事業」に昨年度より副代表として協力し、年5回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座と事例研究の仕方について研修を担当した。市内の小中学校からは事例研の講師をを依頼された。

### 3) 南アルプス市教育委員会

5月にQ-Uの基礎講座の一斉研修の講師を10月～11月にかけては研究指定校4校のQ-Uの結果をもとにした授業研究の助言者を務めた。また、12月には研究指定校1校のQ-Uの結果をもとにした全学級に対する学級経営のスーパーバイズを行った。

### 4) 山梨県総合教育センター

初任者研修講座では、Q-U基礎講座と構成的グループエンカウンター講座を担当した。5年目研修（希望者を含む）では、Q-U基礎講座とK-13法による事例研究の仕方の研修を担当した。児童・生徒理解講座では構成的グループエンカウンター1日講座を担当した。

### 5) NPO親子の心Q&A

6月と11月に計5ケースのカウンセリングを行った。

(5) 講師派遣先 ※午前と午後で内容が異なる場合は午前の内容で整理した。

### 1) Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント

<b>山梨県内</b> 富士吉田市立吉田小学校、南アルプス市教育委員会、忍野村立忍野小学校、富士吉田市教育委員会、山梨県総合教育センター（2回）
<b>山梨県外</b> 高知市教育センター（2回）、杉並区立西田小学校（2回）、秦野市立本町中学校、熊本県教育センター、鳥取県教育センター、鈴鹿市立長太小学校、佐賀県教育センター、茨城県教育センター、長野県教育センター、鎌倉市立深沢中学校、鈴鹿市立若松小学校、千葉市教育センター、大和市教育研究所、綾瀬市教育研究所、三重県教育委員会、高知県心の教育センター、練馬区教育センター、相模原市教育センター、我孫子市教育研究所、厚木市立森の里小学校、厚木市教育研究所、大分県教育センター、鈴鹿市教育委員会、相模原市立藤野小学校、台東区立台東育英小学校、那須塩原市教委区委員会、郡山市教育センター、武蔵野市立千川小学校、神奈川県湘南三浦教育事務所

### 2) Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ

<b>山梨県内</b> 富士吉田市立下吉田第一小学校、南アルプス市立小笠原小学校、南アルプス市立南湖小学校、南アルプス市立白根百田小学校、南アルプス市立八田中学校、南アルプス市立櫛形中学校
<b>山梨県外</b> 横浜市立並木第一小学校（6回）、三重県木曾岬小学校（2回）、三重県いなべ市立阿下喜小学校、千葉市教育委員会、相模原市立鳥屋中学校、江戸川区立第二松江小学校、荒川区立第四中学校、福岡県苅田町立片島小学校、苅田町立白川小学校、小田原市立白鷗中学校、杉並区立西田小学校、苅田町立与原小学校（2回）、伊勢市立有しゅう小学校（2回）、横浜市立峯小学校、川越市立泉小学校、苅田町立南原小学校、厚木市立緑が丘小学校、苅田町立馬場小学校、苅田町立苅田小学校、三重県木曾岬中学校、いなべ市立治田小学校

### 3) 構成的グループエンカウンター

<b>山梨県内</b> 山梨県総合教育センター
<b>山梨県外</b> 葛飾区総合教育センター（4回）、世田谷区立奥沢小学校、足立区立加平小学校、葛飾区立小菅小学校、八王子市小学校学級経営研究会、練馬区立大泉北中学校、渋谷区教育センター

### 4) ソーシャルスキル教育

世田谷区立給田小学校、伊勢市立有しゅう小学校、川越市教育委員会、三重県教育委員会教頭研修（3回）、鈴鹿市教育委員会、亀山市教育研究所、津市特別支援研究会、静岡県養護部会大会、いなべ市立阿下喜小学校、木曾岬小学校、栃木県高根沢市立北小学校
--

### 5) その他

荒川区立第四中学校（道徳公開）、宇都宮市教育センター（不登校予防の学級経営）、横浜市児童理解研究会（特別支援教育を促進する学級経営）、都立荻窪高等学校（学校適応プログラム検討）
--

## (4) 活動のまとめと今後の課題

### 1) 地域のニーズについて

相談室への依頼が増加し、その役割や存在が広く認識されて来ていることが窺える。中でも相談室の活動の中心となったのは研修会などへの講師派遣である。昨年に比べ

ると、Q-Uの結果をもとにした事例研究や学級経営コンサルテーション、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキル教育などの依頼が増加した。Q-Uについての基礎的理解が進み、その結果をもとにした具体的な学級経営の方法に関心が移りつつあると思われる。

また、単発の依頼ではなく同じ学校や教育委員会から複数回の依頼が増えてきおり、継続的なサポートを求める傾向が推測される。さらに、南アルプス市教育委員会との連携では4校で授業研究とQ-Uの結果を関連させた取り組みが行われ、年度末のまとめでは不登校の減少が報告された。この成果を受けて、今後は同様な取り組みが増加することが予測される。今年度は他に在学中にQ-Uの学習をした卒業生から近くに指導者がいないのでアドバイスをしてほしいとデータが送られてくるケースもあった。これについても今後は同様のケースが想定される。

電話、FAX、メールによる相談は事務的な内容や研修会の内容や進め方、校内研究の方向性に対するアドバイスなどが多く、事例研究や学級経営コンサルテーションなどはほとんどが訪問しての対応であった。ケースが深刻になればなるほど直接対面してでないと十分な対応が難しいことから当然の結果と言える。しかし、緊急の場合は電話にならざるを得ず、スタッフが相談室にいる時間帯では対応しきれなかった。

公開講座では、保護者対応についての講座への参加者が多かった。もう一度、同様の内容で開催してほしいという要望や、いじめや非行、授業スキルなどをテーマとした講座の希望が寄せられた。体験を通して学ぶ内容に対するニーズも高かった。

## 2) 今後の課題

公開講座開催についての情報は大学のホームページに掲載するとともに、近隣の教育事務所に依頼し、各校のポストにチラシを入れてもらう形を取ってきた。しかし、チラシを見ての参加者は多くなく、ホームページを定期的に見ている人も少ないため、十分に情報が行き渡っていないのが現状である。今後は、近隣の学校に関してはダイレクトメールで知らせるなどの改善が必要ではないかと考えている。

また、研修会や講演会の講師依頼が増加し、同じ時期に重なったため、断らざるを

得なかった。さらに、事前に資料やプログラムの準備、Q-Uの結果分析が必要なことが多く、かなりの時間を要する。特にQ-Uの分析は学校全体になると20学級を超える場合もあり、1学級を30分程度と考えても10時間を超える膨大な時間となる。ニーズに十分に應えるためには、体制の見直しが必要である。

## <H2 1年度の活動計画>

### 1. 研修会の企画・運営

- ・公開講座を年2回程度実施

### 2. 講演・実技研修会などによる学校教育サポート

- ・山梨県総合教育センター、南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育委員会主催の研修会への講師派遣
- ・校内研修会への講師派遣
- ・学生及び大学院生を研修会スタッフとして派遣

### 3. 地域の活動への協力

- ・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
- ・富士吉田市「問題を抱える子ども等の自立支援事業」連絡協議会への参加

### 4. 相談活動

- ・教師の学級経営のコンサルテーション及びスーパーバイズ
- ・教師・教育関係者個人の臨床的問題への対応
- ・卒業生の学級経営サポート
- ・大学院生の教育臨床活動のサポート
- ・SCの活動へのスーパーバイズ

### 5. その他

- ・都立荻窪高等学校との学校適応援助プログラムの共同研究
- ・横浜市スクールスーパーバイザー
- ・那須塩原市教育委員会との連携
- ・三重県教育委員会との連携
- ・郡山市教育委員会との連携

(文責：品田 笑子)

## II-2-3. 地域情報教育

### 1. 活動指針

2007年度(平成19年度)から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中に、新しい分野として「地域情報教育」に対する取組みが取り込まれたことにより、私たちの活動において大きな礎を築くことができました。

この取組みは、本学情報センターの開設以来、地域の小中学校への情報教育支援を目標に、平成10年にインターネット接続のアクセスポイントとして開放した事を機に今日に至っている。今年度は地域交流研究センター予算より、遠隔授業用の機器や印刷製本に対しての支援を受け、新たに宝小学校への機器設置をすることができ、既に設置済みである、都留第二中学校、東桂小学校も含め、遠隔授業実施可能校として3拠点を設けることができた。また、遠隔授業の運用やExcel・Accessの利用例等に対する手引書を作成し、小中学校の担当者に配布した。

私たちが目指す「地域情報教育」における活動の指針として、次の三つを掲げる。これらの活動に対しては、情報センタースタッフ、「情報メディア演習Ⅰ」・「情報メディア演習Ⅱ」の受講生との協同事業として取り組んでいる。

#### (1) 小中学校への情報教育支援

- ・都留市情報教育研究委員会(教育委員会、全小中学校情報教育担当者)への参加
- ・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
- ・それぞれの学校の情報教育への支援

#### (2) 遠隔授業の実施と支援

- ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施
- ・小中学校間の交流プログラムの支援
- ・e-learningへの取組み

#### (3) ホームページ作成と運用における支援

- ・小中学校の公式ホームページの作成支援
- ・定期的な更新に関わる運用支援
- ・小中学校ホームページ作成担当者への研修支援

### 2. 平成20年度の活動

#### ☆平成20年7月31日(木)

都留文科大学現職教員教育講座・教員免許状更新講習講座への遠隔配信支援

- ①『「読解力」を高める授業づくり』  
ーPISA型読解力の本質とく比べ読みー  
によるテキストの批評ー  
午前9時10分～11時50分  
講師：鶴田清司

- ②『惹きつけ、つなげる授業づくり』  
午後1時20分～4時  
講師：不破 修

2号館101教室の講座を、別会場(東桂小学校コンピュータ室)へネットワークを利用して中継して遠隔講義を実施した。

#### ☆平成20年8月22日(金)

会場：都留文科大学  
都留市教育協議会「情報化と教育」研究会への出席  
研修「情報モラルについて」  
講師：杉本光司

#### ☆平成20年11月

宝小学校への遠隔授業用機器の新規設置

#### ☆平成20年11月6日(木)

小中学校の情報環境についての打ち合わせ  
出席者：市役所情報システム担当、教育委員会担当、(株)ジーンズ、リコー販売(株)  
大学情報センター(杉本、重森、関戸、君田)

- ①メールアドレスについて
- ②ホームページについて
- ③インターネット回線について
- ④遠隔授業について
- ⑤大学内ポータルサイトへのアクセスについて

☆平成20年11月11日（火）

会場：都留市ふるさと会館第三研修室  
都留市情報教育研究委員会への出席  
協議

- ①小中学校のホームページについて
- ②遠隔教育用機器による授業について
- ③教師用PCの進捗状況について
- ④中学校PC入れ替えに関わる仕様書の件について
- ⑤意見交換並びに連絡等
- ⑥その他
  - ・市内小中学校用の大学発行のメールアドレスの配布について
  - ・小中学校のホームページ用サーバーの設置について

☆平成21年2月12日（木）

会場：都留市教育研修センター  
都留市情報教育研究委員会への出席  
協議・研修

- ①CMSソフト "Plone" によるホームページの作成について
- ②授業支援ソフトについて
- ③意見交換並びに連絡等

☆平成21年2月13日（金）

宝小学校と東桂小学校との交流授業のためのリハーサル

☆平成21年2月20日（金）

午後3時50分～4時40分  
宝小学校と東桂小学校との交流授業の実施  
内容：児童会役員による学校紹介プログラム  

- ・自己紹介（宝小学校、東桂小学校以降この順序で進行）
- ・児童会活動について説明と質疑応答

宝小学校：『笑顔いっぱい、元気いっぱい、友達いっぱい宝小』のテーマのもとで、「あいさつ運動」、「たてわり班活動」、「ボランティア活動」についての実績報告をした。

東桂小学校：『元気いっぱい！思いやりのある東桂小児童会』のテーマのもとで、「元気よく体を動かそう」、「思いやりの心をもって行動しよう」、「きれいな学校にしよう」という目標について、それぞれの具体的な活動報告をした。

宝小学校の教室には、市内の小中学校の情報教育担当の先生方も集まり、初めての小学校間の交流授業を熱心に見守っていた。初めての学校間を結んだ交流プログラムであったが、参加した子どもたちは「緊張したけど楽しかった」、「ビックリした」、「もっといっぱいしたい」等の感想も寄せられ、出席した教員からも、今後の継続的な活用についても期待が寄せられた。また、子どもたちが帰宅後、宝小学校で行った話し合いでは、宝小学校の先生や情報教育担当の先生方からも、「インターネットを利用した仕組みについて」、「もっと気軽に使用できる方法について」、「映像を利用する方法」等についても質問があり、この取り組みに対する大きな期待が寄せられた。

「取組み参加者」

宝小学校児童会役員：

小池辰也、山中迅、武井春香、中江知穂、鈴木和裕、小野瑞希

東桂小学校児童会役員：

池谷茜里、清水裕斗、平井裕也、相川果穂、奥脇開斗、天野裕貴、吉見裕希、佐藤衣純、佐藤祐大

情報メディア演習Ⅰ・Ⅱ受講生：

伊藤真、置田純、大橋洋和、奥村友生、横山敏紀

情報センター：

杉本光司、重森収、関戸章雄、君田和子、大輪知穂

取りまとめ：

林 武史（宝小学校）、長門知広（東桂小

学校)

### 3. 平成21年度における活動予定

- ①遠隔授業用機器の設置（設置校については都留市情報教育研究委員会で討議）
- ②遠隔授業・交流プログラムの実施

- ③小中学校教員の情報教育研修会の実施
- ④小中学校の公式ホームページの作成と支援
- ⑤CMSソフト“Plone”の外部講師による研修会の実施

（文責：杉本光司）

## II-3. 暮らしと仕事部門

### 1. 2008年度の活動報告

#### 1) 県民コミュニティカレッジ講座の企画協力(担当：高田研)

①目的：地域交流研究センターがNPO法人大学コンソーシアムやまなしと協力して開際する公開講座である。今年度は「“自然の力”をまちの力に」と題して、「自の力」(土・水・風・森・木)を活用した「市民参加」のまちづくり・環境づくりについて、各地の先進的な事例と経験を紹介しながら、現場経験豊富な講師陣が受講者の方々とともに具体的な展望を拓いていきたいと考えた。そのため「まちづくり」や「環境づくり」に携わる自治体職員、NPO、市民活動団体等の方々と、教職員の方々を中心対象として講習を試みた。「ストップ温暖化『一村一品』大作戦」全国大会金賞受賞（本年2月）であった都留市からのメッセージを発信する。

#### ②経過：

- ・第1回 田村孝次・カントリーシステムズ代表 「土の力」のつなぎ方  
ー食の有機的なりサイクルシステムを目指してー  
平成20年10月9日(木)午後7時から午後9時30分
- ・第2回 渡辺豊博・社会学科 教授  
「水の力」が市民を結ぶ  
ー水環境をめぐるグランドワークを通して市民力を醸成した物語ー  
平成20年10月16日(木)午後7時から

午後9時まで

- ・第3回 平林祐子・社会学科准教授  
「風の力」で村をつくる  
ー自然エネルギーを活用したまちづくりー

平成20年10月30日(木)午後7時から午後9時まで

- ・第4回 泉 桂子・社会学科講師  
「森の力」がまちを守る  
ー水資源または環境保全としての森と人の関係ー

平成20年11月13日(木)午後7時から午後9時まで

- ・第5回 高田 研・社会学科教授  
「木の力」が子どもを育てる  
ー木育・森林環境教育のスズメー  
平成20年11月20日(木)午後7時から午後9時まで

各回の内容は次の通り

第1回：「食」の「安全・安心」が今私たちの「食環境」で大きな話題になっている。この「食」の中でも野菜は、畑から作られており、「有機や無農薬」をキーワードに畑での農薬使用は劇的に見直されている。この「食環境」の「安全・安心」をめざす取組みのひとつとして「残飯を飼肥料に」という実践的な環境保全活動を紹介すると共に、『食品残渣リサイクル計画』平成17年度内閣府地域再生計画に認定されたこの残飯の有効なりサイクルシステムの実践的な取組みについて、現在までの状況、地域ぐるみの取り組みとその仕組みを紹介した。

**第2回：**静岡県三島市にある源兵衛川では、英国で始まったグラウンドワークの手法を活用して、とかくバラバラな市民・NPO・行政・企業の力を結集することによって、見事に昔の「原風景を再生」した。約30年近く、雑排水が垂れ流され、ゴミ捨て場化していた川が、市民の努力により、現在では、蛍が乱舞し、子どもたちが川遊びに興ずる美しい水辺環境に変身した。その多様で先進的なアプローチや合意形成、資金確保などのNPOマネジメント、調整役のグラウンドワーク三島の役割、各事業への具体的な取り組み手法などについて講演した。

**第3回：**風力発電は、自然エネルギーの中でも採算が取れる発電方法として90年代から世界各国で飛躍的に増えてきた。日本でも、北海道・東北地域を中心に各地で「ウィンドファーム」ができ、「市民風車」などの試みも広がっている。環境保全と経済発展が両立する新しいタイプの産業であり、同時に、過疎の町のまちおこしにもつながっている。このような風力発電の現状と可能性について、具体的事例をもとに講演した。

**第4回：**山梨県内には都市の水道局が所有する「水源林」が集中的に分布し、その面積は2万haを超え、全国でも群を抜いている。また1世紀以上前からその管理が行われてきたことも大きな特徴である。21世紀に入り、世界的に「森と水」の関係が注目を集めるようになり、それはどうしてなのか、また山梨の「水源林」は全国的、世界的に見てどのような意義を持つのかを解説した。

**第5回：**今年の夏に保育園の子どもたちと学生が、二人で森を散歩することを目的にしたキャンプを開催した。その中で、子どもと学生は、暗い森の中で見つけた鮮やかな赤いキノコや、色を変える不思議なナナフシの肢体に共に心を動かし、また、雨の中を泥だらけになって遊んだ。そんな共に育みあう「共育」の事例を交えながら、

自然と教育についての講演を実施した。

**③今後の課題：**参加者は各回12～40名であった。大学職員、市民、学生のほかに市、県の行政関係者が参加し、各講義で実際に紹介された事例について質疑応答が行われた。参加者を増やすことが今後の課題である。（『地域交流センター通信』第15号に参加者の感想あり）

## 2) 山梨魅力メッセンジャー事業の活用 （「地域交流研究Ⅲ」）

**①目的：**山梨の風土をなす基幹である森林と水（河川）を軸として、歴史的・地誌的に地域を理解し、自らの生活を見直すことを目的とした。具体的には地理的特性から河川の氾濫、あるいは明治期の官民有区分による入会山の官への囲い込みなどに悩まされてきた山梨の人びとは、そのような困難に直面しながらも地域の発展とは何かを今日まで懸命に模索してきたことを講義のテーマに据えた。このような山梨県の風土を理解することは、学生諸氏が大都市で就職、あるいは地元へ帰郷しても「地域」を見つめるヒントを提供してくれると考えたからである。

**②経過・活動報告：**今年度の授業では山梨県の山梨県観光部主催の「やまなし魅力メッセンジャー事業」と連携し、2回の県内フィールドワークを含む15回の授業を1月末に終了した。履修者148名、メッセンジャー資格取得者46人であった。

**③今後の課題：**履修者が多数で、フィールドワークには3台のバスを用意したが、乗車率は5割程度であった。土曜日のため部活やアルバイトで欠席する学生が多数であった。来年は参加意欲のある学生を絞り込むことが貴重なフィールドワークを円滑に運営する上で重要であると痛感された。（『山梨日日新聞』2009年2月10日に記事掲載、『地域交流センター通信』第15号に参加者の感想あり）

2008年度「地域交流研究Ⅲ」（山梨魅力メッセンジャー事業）講師一覧

2008年10月10日(金)	都留市の自然と生き物	北垣 憲仁	都留文科大学
2008年10月17日(金)	山梨と富士山	横尾 幸江	自然体験計画 ひめねずみ社
2008年10月24日(金)	昆虫を中心とした富士山の自然	渡辺 通人	河口湖フィールドセンター
2008年11月 7日(金)	富士山麓地域の文化	堀内 亨	山梨県立博物館
2008年11月21日(金)	勝沼のワイン産業	大村 忠雄	丸藤葡萄酒工業㈱
2008年11月28日(金)	山梨の農政	上野 公紀・遠藤 順哉	山梨県農政部果樹食品流通課
2008年12月 5日(金)	山梨の歴史 明治以降の水害	小畑 茂雄	山梨県立博物館
2008年12月12日(金)	郡内の織物業と現在	前田 富雄	㈱前田源商店
2008年12月19日(金)	ミネラルウォーター	舟木 俊行	富士山泉水㈱
2009年 1月 9日(金)	甲州印伝	上原 勇七	印傳屋
2008年11月 8日(土)	フィールドワーク郡内方面	①富士吉田歴史民族博物館	
		②さかな公園	
		③尾県郷土資料館	
2008年12月 6日(土)	フィールドワーク国中方面	①山梨県立博物館	
		②万力林	
		③大日景トンネルワインカーブ	
		④メルシャンワイン	

2) 森林再生研修会の開催

①目的：山梨県の森林率は78%、都留市のそれは80%以上であり、地域の森林を知ること、何らかの「仕事」や「暮らし」を考える契機になれば、との思いで研修会を実施した。

②経過：

- ・第1回：山梨県史編纂室林業担当 有井金弥氏  
テーマ「山梨県恩賜県有財産」  
(平成20年10月20日)

「恩賜県有財産」は「恩賜林」「県有林」ともいわれ、山梨県の森林面積の5割を占めている。明治44年に天皇家から御下賜された森林である。一般的に「明治40年、同43年の大水害による県内の被害状況に心を痛めた明治天皇が山梨県に御下賜してくださった」と言われるこの森林の成立について、詳しい解説があった。「名譽の柿の木」に象徴される当時の水害のすさまじさや、官民有区分（森林の土地所有区分）を行った藤村紫朗県令について、当時の資料をひもときながら、わかりやすく話していただいた。参加者は約30名で、学生、職員、教員の他、森林の入会利用に関心のある市民、市職員、県有林

管理の当事者である県職員など多様であった。研修会終了後は有志で「第2部」と題して引き続き勉強会を行った。

- ・第2回：東京大学大学院農学生命科学研究科 竹本太郎先生

テーマ「学校林」(平成20年10月20日)

竹本氏は現在学校林研究の第一人者ともいえる新進気鋭の研究者である。学校林は地域と濃密な関わりを持つ学校が元来それらの基本財産として有していた森林である。林業経営が壊滅的ともいえる状況を迎える今日、学校林の位置づけは基本財産から環境教育の場へと変容しつつある。このような現状を竹本氏の全国にわたる実地調査、およびビデオ教材に基づいてわかりやすく解説していただいた。中には大月市の笹子小学校も登場し、郡内地域も学校林活動が活発に行われていることが感じられた。参加者は約20名、学生、教員の他、学校林活動を行っている小学校教員(そのOB)、県職員、市職員などであった。研修会終了後、有志で笹子小学校の学校林を見学した。

- ③今後の課題：新しい担当者となって初めての研修会であり、進行に不手際が多かった。今回の反省を活かし、事前準備を

しっかりし、スムーズで効果の高い研修会となるよう、以後注意していきたい。特に有井氏からは「時間が足りなかったのもう1度機会があれば研修会を持ちたい」、また竹本氏からは「機会があれば

またこちらの学校林のことを調査したい」などの感想があった。(『地域交流センター通信』第15号に参加者の感想あり)  
(文責：泉桂子)

### Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

#### Ⅲ-1. 第5回地域交流研究フォーラムの開催

2月21日(土)に第5回地域交流研究フォーラム「フィールド・ミュージアムへようこそ! 地域とともに 自然とともに 私たちがめざすもの」が、地域交流研究センターと現代GP(環境教育GP)の共催で開催された。以下にその概要を報告する。

午前中は、都留文科大学における環境教育の取組の紹介として、環境教育GPの活動報告がおこなわれた。始めに都留文科大学フィールド・ミュージアム構想と環境教育GPの概要説明がおこなわれ、次に環境教育GPの3つの柱:Ⅰ. 自然に学ぶ(自然環境教育)、Ⅱ. 農に学ぶ(食・農・循環の学習)、Ⅲ. 暮らしに学ぶ(人・町・自然をつなぐ地域研究)に沿って、具体的な活動報告がなされた。北垣憲仁氏(本学地域交流研究センター特別非常勤講師)による「フィールド・ミュージアムの広がりとお会い」、西本勝美氏(本学初等教育学科教員)による「自ら食を生み出す~大学農園の挑戦~」、河野格さん(本学比較文化学科4年生)による「今夜は大家族! 都留フィールドミュージアムカフェ奮闘記」のそれぞれの報告は、都留という地でフィールド・ミュージアムの思想と実践が着実に定着しつつあることを実感させる有意義な内容であった。

午後は大学生や地域の方々による展示・交流会がおこなわれた。フィールド・ミュージアム、フィールド・ノート、カジカとカワラナデシコの保全活動、太陽光発電によるエコイルミネーション、フィールド・ミュージアムカフェ、ソローの小屋プロジェクト、Grow Wild Camp、たんぼクラブ、

Social 菜園's Club、社会学科のプロジェクト研究、市立図書館による展示、シオジ森の学校、岡部工業所の薪ストーブ、ほしのさと工房の天然酵母パン、の14団体から個人的かつ楽しい展示が出展され、来場者との活発な意見交換がおこなわれた。いずれも地域に根ざし、地域との交流を育みながら続けている意義のある取組で、今後もこのような形で交流が深められることが望まれる。

午後の後半は、全体集会「みんなで語ろう 環境教育 私たちがめざすもの」というセッションがおこなわれた。まず本学社会学科教員の高田 研氏により基調提案がなされ、パネリストの上田 司(都留市禾生第一小学校教員)さん、しらいみちよさん(都留市在住 歌手)、岡田淳さん(本学初等教育学科4年)にそれぞれの経験・立場から“地域や学校における環境教育のあり方”について発言・提案していただいた。司会・進行役でファシリテーターの青木将幸氏のおかげで、参加者の間でも活発で有意義な意見交換ができ、参加者全員が何かしら、共感できるキーワードや地域や自らの課題、希望、ヒントを見出せたのではないかと思われる。

今年のフォーラム参加者は昨年の110人に比べ、77人とやや少なめではあったが、参加いただいた地域の方々からは大変すばらしい意味のある取り組みである、との感想をたくさんいただいた。その一方で、参加者相については、フィールド・ミュージアムや地域づくりに興味・感心のある限られた層に留まっている感がある。この地域交流研究フォーラムが、大学と地域をつな

ぐ交流の場として機能し、より多くの方々に参加いただき、意義のある交流が持てるよう、今後、企画内容や開催時期等についてさらなる検討が必要なのかもしれない。

最後に、フォーラム開催にあたり、地域

交流研究センターおよび環境教育GPのスタッフを始めとして、大勢の方々に協力・支援いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(文責：坂田有紀子)

### III-2. 各種講座の開催

#### (1) 都留文科大学現職教員教育講座

##### 1. 講座の趣旨

夏季集中講座では、このところ続けて、教師の子ども理解をめぐる問題を中心に行ってきましたが、今回も標記のように『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで開催いたします。本学では、一人ひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることが決定的に重要であるという認識のもと、これまで研究を進めてきました。

今日、子どもの「勉強離れ」「学校離れ」が進むなか、教師には、授業の場面だけでなく、地域や家庭での生活も視野に入れ、子どもの現実をトータルにとらえながら、学習の意味や学習指導のあり方を深めていくことが求められています。同時に、子どもが楽しく、学ぶことに意味があると感じながら行う学習と、そうではない学習とは自ずとその効果に違いが出てくることは明らかですが、そのためには、子どもにとって学校が安心して過ごせる場でなければならないこともまた明らかです。それを実現するために、子どもの発達を支えるすべての人々の協働をどのように作り出していくのかということもまた、重要な課題となっています。

##### 2. 日程と内容

- ①テーマ：教師の子ども理解と学習指導
- ②日 時：平成20年7月30日（水）～  
8月1日（金）
- ③場 所：都留文科大学
- ④プログラム（次の通り）

##### 【第一日目】7月30日（水）

『開会挨拶と講座説明』 西本勝美  
(本学教授・地域交流研究センター長)  
『総論1 学校の現状と課題』 西本勝美  
(本学初等教育学科教授)  
『総論2 子ども理解と生活指導』  
筒井潤子(本学初等教育学科専任講師)

##### 【第二日目】7月31日（木）

講座A：「読解力」を高める授業づくり  
〔主に小中向き〕 鶴田誠司(本学初等教育学科教授)  
講座B：惹きつけ、つなげる授業づくり  
〔主に小中向き〕 不破 修(本学非常勤講師)

##### 【第三日目】8月1日（金）

講座C：子どもの課題意識と問題解決能力を育む 木下邦太郎(本学非常勤講師)  
講座D：〈書くこと〉を取り入れた〈読むこと〉の指導〔主に中高向き〕 牛山 恵(本学国文学科教授)  
講座E：第二言語習得研究から英語教育を考える〔主に中高向き〕 奥脇奈津美(本学英文学科講師)  
講座F：経済データを利用した学習指導〔主に中高向き〕 村上研一(本学社会学科講師)

以上の内容で、現職教員講座を開催した。免許更新講習と暫定的に重ねる試みであったが、大きな混乱は幸いなかったといえる。また、内容的にも参加者の反応から見て、おおむね満足できるものであった。

### 3. 今年度の予定

今年度もほぼ同じテーマで平成21年7月29日(水)～8月31日(金)に現職教員講座を行う予定である。参考までに以下に講座の趣旨とおおよその内容を示す

#### 【講座の趣旨】

夏季集中講座では、ここ3年ほど教師の子ども理解をめぐる問題を中心に行ってきましたが、今回も標記のように『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで開催いたします。

2004年末にPISA調査結果が発表されて以来、日本の子どもたちの学力をめぐるさまざまな角度から「問題」とされてきました。とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのか、一方でフィンランドの子どもたちの「学力の高さ」をどう評価するのかなどが、常に話題の中心にあったことはご承知の通りです。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策がそれぞれの学校や教師に求められているのが現状だといわざるを得ません。

それでもPISA調査をはじめとしてさまざまな調査によって、一人ひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることが決定的に重要であるということが次第に明らかになってきました。したがって、教師には、授業の場面だけでなく、地域や家庭での生

活も視野に入れ、子どもの現実をトータルにとらえながら、学習の意味や学習指導のあり方を深めていくことが求められています。同時に、子どもが楽しく、学ぶことに意味があると感じながら行う学習と、そうではない学習とでは必ずとその効果に違いが出てくることは明らかですが、そのためには深い教材理解と教育方法についての工夫がますます強く求められているといえます。

#### 【第一日目】7月29日(水)

『講座の趣旨について』

説明：杉本光司(地域交流研究センター長)

『子ども理解と学習指導Ⅰ』

筒井潤子(本学准教授)

『子ども理解と学習指導Ⅱ』

佐藤 隆(本学教授)

#### 【第二日目】7月30日(木)

『子ども理解と国語科学習指導』

—子どもたちと本の世界へ—

藤本 恵(本学准教授)

『子ども理解と算数科学習指導』

—子どもの目線に立った論理的思考力の育成—

植村憲治(本学教授)

#### 【第三日目】7月31日(金)

『今求められる情報教育リテラシーⅠ』

杉本光司(本学教授)

『今求められる情報教育リテラシーⅡ』

杉本光司(本学教授)

(文責：佐藤 隆)

## (2) 市民公開講座

### (2) - 1 「講座」編

今年の市民公開講座は本学比較文化学科の全面協力により『東アジアと日本—ヒトと文化の交流の現在—』を総合テーマにし、本学附属図書館4階学習室において、全4回シリーズで行われました。

講座では、東アジア、特に中国、台湾、韓国といった近隣諸国と日本の関係を、古

典芸能、現代文化、戦争の記憶、越境と交流という各テーマで取り上げ、日常のニュース等では取り上げられない関わりを、文化・ヒトの交流という視点から行いました。

・第1回 11月12日(水)は山本芳美准教授による「韓流VS華流—ブームをささ

える台湾の動向とともにー」

参加者：9名

- ・第2回 11月19日（水）は笠原十九司教授による「戦争記憶の対話と和解を目指してー日中韓3国共通歴史教材『未来をひらく歴史』の試みー」

参加者：16名

- ・第3回 11月26日（水）は白栄勲氏（本学比較文化学科非常勤講師）による「中日韓三国関係の中の中国朝鮮族」

参加者：14名

- ・第4回 12月3日（水）は鳥居明雄教授による「日本の古典芸能とアジアー能にみられる中国文化ー」

参加者：17名

## (2) - 2 「音楽」編

「イギリスの伝統歌曲とクリスマスコンサート」ー英国大使館合唱団都留公演ー

“British Embassy Choir in Tsuru”

指揮：Steven Morgan

解説講師：西出公之（英文学科教授）

日 程：11月22日（土）

13：30～13：50 歌詞解説

第1部 イギリスの伝統的楽曲

14：00～14：50

第2部 クリスマス・コンサート

15：10～16：00

第1部では、13世紀に起源があるとされているSumer Is Icumen In（夏が来た）を含むイギリスの伝統的な楽曲をはじめ、日本でも良く知られた曲が演奏されました。第2部では、教会音楽やクリスマスソングが演奏されました。

参加者：89名

（文責：杉本光司）

## (3) 県民コミュニティカレッジ講座（開催案内パンフレットより）

【テーマ】“自然の力”をまちの力に

【概要】「自然の力」（土・水・風・森・木）を活用した「市民参加」のまちづくり・環境づくりについて、各地の先進的な実例と経験を紹介しながら、現場経験豊富な講師陣が受講者のみなさんとともに具体的な展望を拓いていきます。「まちづくり」や「環境づくり」に携わる自治体職員、NPO、市民活動団体等のみなさん、また教職員のみなさんにも受講をお勧めします。

「ストップ温暖化『一村一品』大作戦」全国大会金賞受賞（本年2月）の都留市から、「“自然の力”をまちの力に」のメッセージを発信します。

【対象】一般市民、自治体関係者、教員、学生など、どなたでも聴講いただけます。

【内容】

第1回 10月9日（木） 2101教室  
午後7時～9時

テーマ：「土の力」のつなぎ方

ー食の有機的なりサイクルシステムを目指してー

講 師：田村孝次（カントリーレイクシステム代表）

「安全・安心」。この言葉が今私たちの「食環境」で大きな話題になっている。「食」の中でも大事な野菜。元はと言うと・・・畑である。

今「有機や無農薬」をキーワードに農薬の使用が劇的に見直されている。

「残飯を飼肥料に・・・」この思いは、実践的な環境保全活動、また、残飯の有効なりサイクルとして、『食品残渣リサイクル計画』平成17年度内閣府地域再生計画に認定されました。現在までの状況、地域ぐるみの取り組みとその仕組みをご紹介します。

第2回 10月16日（木） 2101教室

午後7時～9時

テーマ：「水の力」が市民を結ぶ

－水環境をめぐるグラウンドワークを通して市民力を醸成した物語－

講師：渡辺豊博（本学社会学科教授）

約30年近く、雑排水が垂れ流され、ゴミ捨て場化していた川が、市民の努力により、現在では、蛍が乱舞し、子どもたちが川遊びに興ずる美しい水辺環境に変身した川があるとしたら信じられますか。静岡県三島市にある源兵衛川では、英国で始まったグラウンドワークの手法を活用して、とかくバラバラな市民・NPO・行政・企業の力を結集することによって、見事に昔の「原風景を再生」しました。その多様で先進的なアプローチや合意形成、資金確保などのNPOマネジメント、調整役のグラウンドワーク三島の役割、各事業への具体的な取り組み手法などについてお話します。

第3回 10月30日（木） 2101教室

午後7時～9時

テーマ：「風の力」で村をつくる

－自然エネルギーを活用したまちづくり－

講師：平林祐子（本学社会学科准教授）

風力発電は、自然エネルギーの中でも採算が取れる発電方法として90年代から世界各国で飛躍的に増えてきました。日本でも、北海道・東北地域を中心に各地で「ウィンドファーム」ができ、「市民風車」などの試みも広がっています。環境保全と経済発展が両立する新しいタイプの産業であり、同時に、過疎の町のまちおこしにもつながっています。

す。このような風力発電の現状と可能性について、具体的事例をもとにお話します。

第4回 11月13日（木） 2101教室

午後7時～9時

テーマ：「森の力」がまちを守る

－水資源または環境保全としての森と人の関係－

講師：泉 桂子（本学社会学科講師）

山梨県内には都市の水道局が所有する「水源林」が集中的に分布しています。その面積は2万haを超え、全国でも群を抜いています。また1世紀以上前からその管理が行われてきたことも大きな特徴です。21世紀に入り、世界的に「森と水」の関係が注目を集めるようになりました。それはどうしてなのでしょう？ また山梨の「水源林」は全国的、世界的に見てどのような意義を持っているのでしょうか？

第5回 11月20日（木） 2101教室

午後7時～9時

テーマ：「木の力」が子どもを育てる

－木育・森林環境教育のススメ－

講師：高田 研（本学社会学科教授）

この夏、保育園の子どもたちと、学生が二人で森を散歩することを目的にしたキャンプをいたしました。暗い森の中で見つけた鮮やかな赤いキノコや、色を変える不思議なナナフシの肢体に二人は共に心を動かします。また、雨の中を泥だらけになって遊びました。そんな共に育みあう「共育」の事例を交えながら、自然と教育のお話をさせていただきます。

（文責：泉 桂子）

### III-3. 『地域交流センター通信』の発行

#### 1. はじめに

『地域交流センター通信』の刊行は、年2号ということで定着し、2008年度は計画通り14号（2008年12月10日）と15号（2009年3月18日）の2号分を発行した。発行部数

は例年どおり各3,000部である。

配布に関しては、卒業式のときに卒業生全員に配布する（15号）ほか、全学科など学内の各箇所、市内の諸学校、市外小中学校、県内高校、市の諸施設、市議会議員、本学名誉教授、同窓会（30部）などに届け、

また図書館入り口、2号館ロビーなどにも自由に持っていけるように配置している。

なお、全号とも大学ホームページで読めるようにしており、インターネットによる読者がいることも反響によって知ることができる。

## 2. 本年度の編集態勢について

近年、地域交流研究センター事業と関連する諸実践が豊富なものになってきており、そうしたことを視野に入れながら地域交流センター通信を効果的に充実させていくために、編集態勢を強化する必要があることを確認してきた。その具体的な対応策として、本年度から新たに「副編集長」を置くこととした（本年度は、泉桂子氏がその任に当たった）。このことは本年度の重要な前進点である。

## 3. 発行日について

年2号の発行であるが、その1号分は3月の卒業式を目安にしている。その関連でもう1号分は、10月末に発行することが期待された。しかし諸般の編集作業を夏休み中に進行させることには困難さがあり、10月に入ってからの編集実務作業ということにせざるを得なかった。紙面割付の確定、原稿依頼と入手、入力、校正作業、レイアウト、印刷屋との確認作業などの過程を経ると、12月発行ということになってしまう。

まったく異なった発行サイクルを検討もしているが、大学の年間スケジュールの基本構造を考えると、現状のような発行スケジュールが妥当と判断される。

## 4. 原稿料について

都留文科大学関係者以外の執筆者には原稿料を出すようにしている。その額については、文字数を基本にし、表紙・裏表紙の絵や巻頭文に対する相応の配慮を加え、内規を設けて執行している。

## 5. 各号の特徴

### 〔第14号〕

36ページの編集となった。

巻頭文は、絵本作家の津田櫓冬氏にお願いすることができた。「子ども時代からの森羅万象・・・」というタイトルで、私たちが生まれ育ってきた町や村の生活と風景を改めて思い起こすことの意味を考えようとするものである。

特集1は「地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発」ということで、特色GPの実践の展開に光をあてた。本学とフィンランド、カナダとの交流研究も積み重ねられてきているが、現代の教育問題へのシャープな問いかけが見えてくる。また本学のSAT（学生アシスタント・ティーチャー）の展開が具体的に伝わってくるものになった。

特集2は、「フィールド・ミュージアムの展開と『現代GP』（山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み）」とした。継続している「シオジの森の学校」の実践、回を重ねてきた「都留フィールドミュージアムカフェ」の取り組み、新しい事業「GROW WILD CAMP」の実践、市民が保有している写真コレクションの発見とその活用・保存に向けての動き、都留市立図書館との共同事業（「谷の町・史の里」展）、市民と市行政とフィールド・ミュージアム部門の共同事業「三の側ピオトープ」づくり、観察会など、多方面の事業展開を特集した。また都留文科大学が関わる田畑を絵地図風に表現することも試みた。

この号のトピックスコーナーでは、地域交流研究センターの事業ではないけれども、地域交流として共有していきたい諸実践をとりあげている。「つる子どもまつり」の「市民連絡会」の動きは、大事な問題を伝えてくれている。

### 〔第15号〕

32ページの編集となった。

本学の社会学科が拡充再編され、「環境・コミュニティ創造専攻」（環コミ創造専攻）

が創設され2年が経過したが、地域交流研究センターと深く共鳴する性格をもつ専攻なので、特集「自然を生かし地域をつくる一環境・コミュニティ創造専攻(社会学科)がひらくフィールド」を組むこととした。

巻頭ということで、あたらしく着任された高田研氏と渡辺豊博氏に対談をお願いした。都留市民と大学との関わりについての感想とともに、意欲的な提案も語られている。継続している、障害者通所授産施設東部授産園「みとおし」の事業への参加、専攻の授業「プロジェクト研究Ⅰ」の内容、教員や学生が取り組みを継続している農業実践、環境社会学関連のフィールドワークの報告、本学で始まった「森林再生研究会」の内容、継続している「フィールドミュージアムカフェ」、環コミ創造専攻が担った県民コミュニティカレッジ講座「“自然の力”をまちの力に」など、改めて環コミ創造専攻の存在を確認することができた。

2月21日に開催された第五回地域交流研究フォーラムは、編集作業としては厳しいものであったが、どうしても掲載する必要があると判断し、その息吹を伝えた。

トピックスコーナーでは、特色GPの重要な取り組みであった第二回フォーラム

「地域を基盤にした教師教育改革—フィンランドと日本—」の内容を伝えた。その他、着実に試行を進展させている光ファイバーを使った実践の、東桂小学校と宝小学校とをつなぐ「遠隔交流授業」の様子、地域教育相談室の公開講座、クリニックラウンジとしての福祉活動、「文大ボランティアひろば」の発足、富士急との連携事業の展開、地域交流研究センターが開講する授業内容、などを伝えた。なお、「市民第九演奏会」の記事内容も地域交流の大事な視野を形成するだろう。

## 6. 2009年度に向けて

第16号(11月末～12月初旬)、第17号(2010年3月)の2号を発行する。

この間、特色GP、現代GPを前面に出した編集を行ってきているが、両者とも最終年度に入るので、そのことも念頭におきつつ、地域交流研究センター会議で、16号、17号の編集方針を検討していく。なお第16号に関しては、埼玉県見沼フィールド・ミュージアムとの交流を考え、巻頭文としてすでに大田堯先生から聞き取りを行っている。

(文責：畑 潤)

## IV. 地域貢献活動

### IV-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度(平成20年度)は10月31日(金)、富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に第11回目の集会が開催された。日程については、3年前から、本学教員が参加しやすい桂川祭期間中の開催を配慮していただいている。

今回の第11回集会は、第1分科会：幼保

小部会、第2分科会：小中部会、第3分科会：中高部会、第4分科会：小中高児童生徒部会、第5分科会：行政・地域団体・学校部会、第6分科会：特別支援教育部会、第7分科会：PTA部会、の7つの常設分科会が設置され、それぞれ2本程度の実践レポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第1分科会に高田理孝(初等教育学科)、第2分科会に筒井潤子(初等教育学科)、第4分科会に田中夏子(社会学科)、第5分科会に西本勝美(初等教育学科)、第6分科会に森博俊、第7分科会に吉住典子(初等教育学科)と、第3分科会を除く6つの分科会に本学教員を充てる

ことができた。

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」（地域の子どもは地域で育てる）をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有している。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留というより広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれなかと事務局と意見交換もしているが、実現は難しいようである。

この点で、3年前から、集会に先立つ10

月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前打ち合わせをおこなう機会を設定していただいたのであるが、主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一步進められたと言える。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はきわめて高く、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。このような形での本学教員の「地域教育」への貢献が切実に求められており、実際に、本学教員が果たせる役割が大きいことを再認識させる結果であった。引き続き、事務局（富士・東部教育事務所地域教育支援担当）との連携を密にしながら、より発展的な協同のあり方を追求したい。

（文責・西本勝美）

## IV-2. 都留市子ども教室事業

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会社会教育課生涯学習担当が事務局を担って実施している5年目の事業である。「学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、本年度までの5年間、本学教員の西本勝美（初等教育学科）が大学側のコーディネーターを担当してきた。なお、昨年度（平成19年度）より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となるなかで、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、

本年度はこの運営形態での2年目となる。

本年度（平成20年度）は、東桂小、谷二小、宝小、旭小の4拠点校から、年間で計62件の学生指導員派遣の要請があったのに対し、計34回、延べ52名の学生を派遣することができた。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、4地区の住民の協力体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小学校が体育館やグラウンドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない場合も多く、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約もあって、活動に参加できる学生の実数は比較的少数であるが、リピーター学生が少なくないのも大きな特徴であろう。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取

り組みではあるが、3年次以降の教育実習やSATとはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と

発展は重要な一環を占めることになる。なお、『地域交流センター通信』第14号(2008年12月発行)の紹介記事には参加学生の感想も掲載されているので、ぜひ参照されたい。

(文責・西本勝美)

### IV-3. 文大ボランティアひろば

本事業は、本年度(平成20年度)に新たに開始された取り組みである。本年5月に、都留市社会福祉協議会の森嶋美子氏と、地域交流研究センター長の西本勝美とで相談・打ち合わせをおこない、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなった。ただし、福祉系の学部・学科を持たない本学では、授業とタイアップした取り組みは難しく、「大学ボランティアセンター」の設置はさらに難しい。そこで、学内にある学生ボランティアサークルを土台として、緩やかな「連絡協議会」的な会合を持つところから始めることになった。相談過程で重視し、両者で共有した「原則」は、①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない、②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない、③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である、といった事項であった。本事業の発展的継続にあたっては、常にこれらの「原則」に立ち戻りつつ、取り組みを見直していくことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会(森嶋氏)からの呼びかけと日程調整を経て、本年6月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の3団体である。会合の内容は、前回の会合以降の各団体からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域のボランティア・コーディネーターか

らの意見など。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、サークル各団体にとっては、近場のボランティアニーズを周知できること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて各団体の活動が活性化されることが大きい。また、会合の名称については学生たちの発案に委ね、最終的に「文大ボランティアひろば～だれでもどうぞ～」(略称:ぼらひろ)と命名された。この名称は、各サークルには所属していない個人としての学生や、一般の住民の参加も歓迎するという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は6月以来、基本的には第4水曜日の午後6時15分から本学3409教室にて開催されることとなったが、回数を重ねるにつれて、各サークルの活動を超えて、参加サークルや個人が協働しておこなう活動への期待も高まり、「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける」活動に取り組むことになった。学内の5カ所に回収ボックスを設置し、各サークルが当番で回収している。さらに、年明けからは市内の授産施設「みとおし」との関わりがつけられ、「障害を持たれた方々の余暇活動支援」について、新たな一歩を踏み出そうとしている。なお、『地域交流センター通信』第15号(2009年3月発行)の紹介記事には、各サークルからの一言も掲載されているので、ぜひ参照されたい。

(文責・西本勝美)

## V. 地域交流研究教育プロジェクト

### V-1. 障害のある人びとの、地域での就労にむけた支援のあり方について

#### プロジェクトメンバー

- ・田中夏子(代表・本学社会学科)
- ・森 博俊(本学初等教育学科)
- ・平林祐子(本学社会学科)

#### 1. プロジェクトの目的と経過

就労機会の創出や就労環境の改善は、障害を抱えた人びとが、地域で暮らしていくために不可欠の要件の一つである。本プロジェクトは、障害者就労支援の実践的な研究と、地域の人々との学びあいを目的に掲げ、主として以下の二点を当面の目標とし、2004年度にスタートした。

第一に、障害のある当事者及びその家族、支援者、さらに事業者を含むネットワークの形成によって、立場の異なる関係者が意思疎通を深め、狭義の福祉的就労にとどまらない働き方をめざした、実験的取り組みを行っていくこと、第二にそのプロセスに学生の参加を促すことによって、理論的にも、経験的にも「共生」に対する学生たちの理解を深め、市民としての、共生的な生き方を考える機会を設けること。

プロジェクトの遂行にあたっては、外部協力者として、「親の会」の皆さん、知的障害者通所授産施設 東部授産園関係者、都留市社会福祉協議会のボランティアコーディネーター、東部圏域地域療育事業関係者より、協力、アドバイスをいただいている。また、2005年以降、上記協力者と大学関係者として、「地域で、障害を持つ人たちの働く場を創るためのネットワーク」を構成し、日常的な交流および学習会、視察研究等の開催を行ってきた。

#### 2. 2008年度の活動課題

##### (1) 年度当初の確認事項

2008年度初め、これまでの活動を見直す過程で、人々の生活の質は「仕事のあり方」のみならず、「暮らしのあり方」にも規定さ

れていること、したがって、今後は、「就労支援」に限定することなく、人生の課題を幅広く捉えながら、その課題に応じていくことが必要ではないかとの意見が出された(例：子育てに不安を抱える市民の悩みを「親の会」の相談事業につなぐ／生活上のリスクについて学ぶ機会をつくる／社会参加の回路を地域で生み出すなど)。そこで、これまで使用していたプロジェクトチームの名称を「地域で、障害を持つ人たちの働く場を創るためのネットワーク」から、「仕事と暮らしネット」とし、さらには「障害のある人」を対象としつつも、地域に暮らす人びとすべての暮らしや仕事のあり方も検討対象としていくねらいから、「障害を持つ人たちの」といった規定も取り払うことで合意した。

##### (2) 当面の活動課題

上記のネットの性格を反映すべく、当面、以下の三つを計画・実施することとなった。

- ①「生活上のリスク」をめぐる学習会を企画・実施：障害のある人々をターゲットとした悪質商法への対処を、学生参加のもと、寸劇を通じて学ぶ。
- ②地域での「研修的就労の場」の拡大：市民協力者の開拓を通じて、職場研修の場づくりを行う。
- ③仕事起こしの可能性の探求：近隣地域の先進例のスタディーツアーを行い、都留での応用可能性を考える。
- ④月例の情報交換、学習会の開催：学内関係者、「親の会」、知的障害者通所授産施設 東部授産園関係者、都留市社会福祉協議会のボランティアコーディネーター、東部圏域地域療育事業関係者による定例会を、原則として毎月第三木曜日に開催する。
- ⑤学生の関わり促進：授産施設で毎月実施しているレクリエーション活動「土曜活動」へのボランティア参加を初め、学習会等に学生の参加を呼びかけていく。

### 3. 2008年度活動概要とその成果

#### (1) 生活上のリスクをめぐる学習会の企画・実施

「親の会」から、①携帯を持って以降、勧誘の電話が頻繁に入るようになったこと、②そうした勧誘への対応が持つリスクが当事者に理解されにくいこと、③障害を持つ人々が悪質商法のターゲットとなりやすいことなどが、月例会で指摘されていた。この指摘を受け、プロジェクトの一環として以下の流れでリスク回避の学習を企画・実施することとした。なお、本学習会の企画・実施にあたっては、大学の授業との連携をはかり、若干ながら学生参加を得ることが可能となった(3-5参照)。まず企画段階では三名の学生が関わった。しかしながら、当日プレゼンテーションでは日程的な制約もあり、一名の参加にとどまった。架空請求、点検商法、マルチ商法、アポイントメント商法等、五つの典型的な悪質商法を寸劇化し、学生が演者となった後、施設のメンバーにも演者となってもらいロールプレイによる学習を行った。

#### (2) 地域での研修的就労の場の創出

前年度、マナー講座の一環で協力をいただいた市内のファミリーレストランで、授産施設メンバーによる計6日間の研修が行われ、授産施設から地域の中に仕事を求めていく際の課題が検討された。課題として挙げられたのは、①メンバー自身が授産施設の中で培った自信、スキルの継続的拡充が難しいこと、②短期間でのスキル習得への対応が難しいこと、③受け入れ側事業者側への事前の働きかけが十分できなかったことなどである。

この後、地域への研修的就労の拡大は滞っており、事業者側へのインセンティブを地域的な制度として作る必要があるのではないか、などを意見が出され、大阪市、横浜市等の先進事例を検討することとした。

#### (3) 仕事起こしの可能性の探求

プロジェクト関係者が各自で取材、訪問

した、障害のある人たちによる仕事起こし事例について報告しあい、都留での応用可能性をさぐった。

①横浜市 若者サポートステーション(行政/民間提携)：仕事世界への参加に困難を抱える若年者を対象に、職場見学、職場体験、就労の流れを提供する支援事業に、プロジェクトメンバー、田中が同行し、リサイクルショップ、惣菜加工、介護、食品スーパーでの店舗業務等を見学。サポートステーションの支援対象となっている若者が、仕事に触れながら、自らの関与のあり方を構想していくプロセスについて学習した。

→都留の場合、県内の若者ジョブカフェとの連携が必要とされた。

②上野原市 オリジン弁当(民間営利)：法定雇用率を超えて障害のある人を雇用(130人中5人)する企業現場を、プロジェクトメンバーの授産施設職員が見学。当初は八王子管内で雇用率未達成ワーストワンの「実績」だった企業が、奮起した点が、他の企業の取り組みに際して参考となり得る。現在では、定着率も良好であることから、何がその安定性をもたらすのか、議論した。現場の長の理解と企業あげでの支援体制、関連工場間での経験の交流により、首都圏53箇所での雇用実績を形成。「特例子会社」方式によらない手法として着目。

→都留の場合、特定子会社の誘致等は困難。また「共生」の観点からも特例子会社には疑問。小規模な職場がそれぞれの工夫でハンディを抱える人々と共に働く仕事文化を創ることが望ましいとすれば、オリジンの経験は示唆的。

③甲府市 県労働局(行政)：知的障害のある人々の就労機会の拡充のため、行政の事務仕事を見学、検討(コピー、日刊紙の資料冊子作り、不要書類の回収・裁断等)。

→都留の場合、市役所や大学等で、事務的な仕事領域においても工夫如何でハンディのある人の就労機会の拡大が可能であることを発信する必要が確認された。

#### ④横浜市 コミュニティキッチン ポラン

(民間非営利)：2009年3月にオープンした惣菜弁当で支援母体は、神奈川生活クラブ生協の関連団体、ワーカーズ・コレクティブ協会。同協会は、労働市場から排除されてきた女性たちが、自ら働く場を切り開いてきた経験に基づき、「働きにくさ」を抱える人々の個々の条件や人生を尊重した職場の創出に取り組んできた。七名の就労メンバーのうち、知的、精神、その他三名の当事者を含む。

→就労支援事業は多くの場合、当事者と非当事者が二分される組織によって担われるが、ポランにおいては、種別は異なるものの全員が排除当事者という認識に立った運営のため、「共に働く」という理念が、実体化されている。

→都留市の場合、コミュニティビジネスとして商店街スペースを利用した実験的な取り組みができないか、検討可能とされた。

⑤千葉市 共進社：家電製品の回収、分解、部品販売を通じて、障害特性を活かした事業を展開。特に分解作業は、これまで障害のある人たちにとっては、困難とされてきた分野だったが、綿密なマニュアル化と個別指導を通じて、高精度な分解作業を達成。また同社では、分解を軸としたリサイクル事業立ち上げのコンサルティングを行っており、各地で共進社に続く事業体が発足していることにも着目した。富士吉田にも同様の例がある。

→都留の場合、町の電気屋さん、クリーンセンター等、複数の関係者に、具体的な「事業提案」を通じて、障害者雇用の課題を理解いただく機会と心得ることが議論された。

#### (4) 月例の情報交換・学習会の開催

研修の打ち合わせ、制度に関わる情報交換、「仕事起こし」の現場見学の報告会、神奈川LD協会の教材ビデオを使用した学習会等を10回にわたって開催した。また、山梨県ジョブコーチ養成講座に引き続き参加をし、県内関係者との意見交換をはかった。

#### (5) 学生の関わりの促進

「就労支援」ボランティアは、学生になじみのある活動ではないため、まず、障害を持った人たちが、学校卒業後に置かれている状況、仕事を通じた社会参加を希望してもその社会的障壁が大きいこと、そうした現状を生み出す制度的な困難があることなど、一定の知識提供と、地域における活動の場の紹介が必要とされた。そこで以下のプロセスで、障害のある人々の仕事と暮らしにおける困難について、理解と参加を呼びかけた。

①社会学科の基礎科目「現代社会と市民参加」において、郡内地域における障害者就労の実態についての学習を二回行った(第一回目は、志村裕一氏によって、「環の拠点」併設の「チャレンジドリーム」(都留福祉作業所と連携)で行っている障害者仕事起こしサポート事業について、また第二回目は、渡辺典子氏によって、「けやき園」(授産施設)で進行している仕事学習と地域づくりの取り組みについて)。学生たちは、教職との関係で、特別支援学校での実習を経験する者も少なくないものの、学校卒業後に障害を持った人たちが置かれる社会的排除の状況についてはほとんど知る機会がなく、また関わりの回路も持たないことから、上記二回の講師によるレクチャーは、一定の関心を喚起するところとなった。しかし、その関心を具体的な活動に結びつけるために、あらためて以下の具体的な呼びかけを行った。

②同科目において、山梨県消費者生活センターの堀川氏によって、若者むけの「悪質商法」への対応方法をレクチャーいただいた際、障害のある人々がこうした商法のターゲットとなっている実態を紹介し、自分たちが学んだことを、社会的にハンディを持った人たちに、どうわかりやすく伝えることができるか、その考察を課題とした。具体的には、悪質商法をめぐる「ミニ演劇」を想定し、授業の中で「台本」およびその演者を募った。「台本」については、五十以上のアイデアが

寄せられ、演者の希望も三名から寄せられた。学生には台本のセレクト、書き直し、リハーサルを経て、2009年3月9日月曜日、授産施設「みとおし」においてプレゼンを行った（企画段階での参加学生3名、当日1名—資料①）。

③定例の土曜活動への学生ボランティアの参加が安定しないことから、2008年度12月以降、「文大ボランティア広場」に授産施設職員が参加をし、学内のボランティア団体関係者と直接交流する場を持つこととした。その結果、学生の参加は、教員や授業を介した場合よりも促進され、毎月、複数の学生の参加が見られるようになった。しかしながら、当初のように、活動の企画・運営・準備段階から学生が施設関係者とともに組み立てを行う形とはなっておらず、この点、施設関係者からは課題として提起された。このことが、後述する新しいネットワークの呼びかけにつながっていく。

④社会学科の専門科目「NPOマネジメント」担当の楨先生の協力を得て、学生の関わり促進の取り組みを行うこととなった。具体的な活動は、2009年度のものとなるが、「社会的企業」ケーススタディとして

授業に「みとおし」のスタッフとメンバーの一部に参加をいただき、運営実態の報告を行なった。

### 3. 今後の展開

学生ボランティアによる土曜活動、授業での呼びかけ、文大広場でのネットワーク等を総合的に活用する中から、親の会、支援団体、福祉関係者に限らない、幅広い市民、学生との交流機会の拡充が、必要であり、また可能な段階に来ているのではないかと、との声が上がってきた。

これをうけて授産施設「みとおし」の関係者（当事者含む）、文大ボランティア広場関係者が中心となって、あらたなネットワークのよびかけを行うこととなった。具体的には、「就労支援」に留まらず、障害を持つと持たないに関わらず、地域での暮らしの豊かさを探求していこうというものである。当面は、月一回の交流の場の創出によって、当事者やその支援者の留まらない市民が、相互に知り合い、具体的な共同作業を通じて、社会関係の構築をはかることを目的としている。6月より準備会を月2回にわたって開催している（資料②）

### 4. 本年度の予算

本年度に必要な予算 → 決定額	
・資料収集	5千円 関連書籍、資料
・備品	0千円 文具、レク活動等の必需品
・専門家からの知識提供に対する報酬4名	8万円 講演料、ヒアリングの際の謝礼
・見学等、交通費	2万円 レンタカー、高速料金等
・役務費	0万円 講演会開催などの際のテーブル起こし代
計 105,000円	

以下 参考資料

#### 資料①学生が台本化した「悪質商法撃退劇」の一例

マルチ商法 AさんとBさんは友だちです。

A「最近私、肌きれいになったと思わない？」

B「うん」

A「実はいい石鹸見つけたんだ。顔ダニって知ってる？」

B「ダニ？知らない」

A「毛穴の中に住んで増えていくダニなんだけど、これがあると肌のトラブルがえるんだ。そうだ、あなたの肌にもいるか見てみなよ。これ顔に当ててみて。(セロファンを渡す)」

B「うん（セロファンを押し当てる）」  
A「あ、ほら。いっぱいついてる。このくっついてるやつを拡大したのがこれね（ダニの写真をみせる）これをほおっておくと肌トラブルの原因になるの。これを退治するのが私が使ってるこの石鹸なんだ。本当なら医薬品として売られててすごく高いんだけど、知り合いにこれを作ってる会社の人がいるから特別に安くしてもらってるんだ。あなたも買わない？」  
B「うーん」

A「この石鹸の性能は私の肌が証拠だよ。お試しで1回使ってみな。めっちゃお得なんだから」  
B「うん、じゃあ買ってみようかな」

**アドバイス** 友だちにはことわりなくいものですがやんわりと…。

B「うーん、でもダニってこんなふうにも目で見えるかなあ。今お金貯めてるどころだし、今使ってるせっけんも気に入ってるから私はいらぬや。ごめんね。」

資料② 授産施設「みとおし」職員 佐藤氏によるよびかけ文

障害を持たれた方々の余暇活動支援

(1) 提案に至るまで（現状）

●東部授産園みとおしでは、障害を持った方の余暇活動の場として「土曜活動」を開いている。この活動は月に1回、みとおしのメンバーが企画をたて、当日、学生が参加する形をとっており、内容は大まかに午前中は調理実習、午後はメンバーの考えたレクリエーションを行っている。約3年が経過する中で、メンバーも学生と会うのを非常に楽しみにしていて、当日は普通の働いている姿からはうかがえない様子も見え隠れしている。

そんな中、メンバーによる自治会の中で、「もっと、地域の人たち（学生さんも含めて）との交流したい」という要望が出された。確かに現在のような学生との交流は、メンバーにとって大変重要な機会ではあるが、活動自体が「みとおし」の中で完結したものとありがちなことは否めない。

●最近、学生を広く募集するにあたって、文大の榎先生に相談、協力をお願いしているところ、先生との話の中で、現在のような「みとおし」完結型だと参加した学生さんが定着するのが難しいのではないかと指摘をうけた。「学生に楽しさ、魅力を感じてもらうには何が必要なのか」も一つの課題である。

地域の障害を持った方々と（サポートする人とも）興味がある、出会う機会がほし

いという学生はたくさんいるが（講義でもたずねられるが）都留市ではそういった場所は少ないらしい。

●障害を持った方の父兄の多くが、地域の方々との（交流）、出会う場がほしいと思っている。

(2) 目的

- 障害の有る無しに関わらず、普通に楽しく安心して過ごせる場作り。
- 障害を持たれた方々の余暇活動の充実。社会参加の促進。
- ボランティアの育成を図り、地域における支え合いの輪作り。

(3) 提案

昨年からの地域交流研究センター、都留市ボランティアコーディネーターで始まった月一回の懇談会では、学生ボランティア団体、市民の方々との意見交換、情報交換の場を持つことができ、とても有益と感じている。こうした情報交換、意見交換の段階を経て、実際に具体的なアクション【定期的なイベントの企画・運営、学習会等】を共にできるネットワークを作ってみてはどうだろう。

ネットワークの構成員は、障害を持っている人が地域で暮らすために何が必要か、関心を持ってくれる学生、市民、施設関係者、親の会、当事者、市内の事業者、学校関係者など、いろいろな人が想定される。

イベント一つをやるにしても、考え方の違いを出し合い、アイデアを豊かなものにしていくことができ、関わる自分たちも成長

できると考える。

(文責：田中夏子)

## V-2. 「地域の自然と地域の人々から学ぶ実践的環境教育『シオジ森の学校』との連携」

### プロジェクトメンバー

- ・坂田有紀子 (本学初等教育学科教員)
- ・一柳 英隆 (本学非常勤講師、財団法人 自然環境研究センター)、  
協力：シオジ森の学校

少ないことが原因の一つであると思われる。そこで、本プロジェクトでは、教員の卵である本学初等教育学科の学生が、「シオジ森の学校」に大学生スタッフとして参加し、自然環境教育についての実践的な経験を得ることを目的とする。

### 1. プロジェクトの目的と概要

小学校における環境教育の重点の一つとして、自然体験を積極的に取り入れ、豊かな感受性を育成することが挙げられている(文部省 環境教育指導資料)。一方、小学校における環境教育の問題点として、専門的知識・技能を持った教員が少ないこと(H13年度 神奈川県体験的環境学習推進事業報告書)が挙げられている。これは現場の教員、元をたどれば教師の卵である学生の自然環境に関する知識や自然体験が圧倒的に

### 2. 活動内容とその成果

H20年度は、プログラム作成委員兼講師として坂田が、講師として一柳氏が、現地ボランティアスタッフとして学生が参加した。20年度は7つの講座が開催され、述べ35人の学生が参加した(表1)。

シオジ森の学校への参加はH17年度から始まったものであるが、最初の2年間は、学生はスタッフとして講座当日のみ参加し、企画・運営には携わってこなかった。当初、

表1 シオジ森の学校 平成20年度講座一覧

講座名	講座対象者と内容	期 日	講 師	参加学生数
A シオジの森を歩こう	①シオジの森散歩	7/26	安富 芳森 (森林インストラクター)	0
	②シオジの森の花を楽しもう	9/20		0
	③シオジの森の紅葉を楽しもう	10/25		4
B 森で楽しもう	①シオジの苗木植樹	5/31	天野 立実 (大月森林組合参事)	0
	②下草刈り、川あぞび	8/2		0
	③テーブル作成	9/27	橋村 純吾 (木工作家)	0
	④シオジの森の散策	10/18		0
B2 テーブル作り	間伐材を利用したテーブル作り	5/31 9/27	橋村 純吾 (木工作家)	0 0
C つみ木の王国	ヒノキの間伐材で作った7000個のつみ木で遊ぶ	6/21	下澤 直幸 (大月市教育相談センター)	7
D1 森の生活を楽しもう	都留市鹿留における動物観察や川遊び	8/9~10	坂田有紀子 (都留文科大学)	17
D2 森の生活を楽しもう	上野原市西原での手作りテント生活や間伐体験	8/19~20	中田 無双 (北都留森林組合)	0
オープンキャンパス	森のコンサート・つみ木の王国・木工教室	1/31	下澤 直幸 (大月市教育相談センター)	7

森の学校が学生スタッフに期待したのは、高い専門性、つまり、“自然観察の指導や補助”であったが、実際は指導というより、“子どもの話し相手、講師のアシスタント”が主な役割となっていた。学生たちは子供たちに積極的に話しかけ、子どもたちと上手にコミュニケーションを取っていたという点では、一般参加者やスタッフの都留文科大生に対する評価は非常に高かった。しかし、当初期待されていた専門性を活かし

た指導という点では不十分な点が多かった。そのためH19年度からは学生の自然観察や野外活動における指導技術の向上を目的として、学生の企画・運営による動物観察キャンプを都留市鹿留川でおこなっている。H20年度は、学生17人、子ども18人、一般参加者（大人）4人、森の学校スタッフ3人、講師2人（坂田・一柳）の参加があった（プログラムは下表を参照のこと）。

#### 当日のプログラム

時刻	8月9日（土）	時刻	8月10日（日）
9:00	集合（都留文科大前駅）・出発	4:00	ムササビ帰巢観察
10:00	開校式と説明 （キャンプの趣旨、日程の説明、自己紹介等）	6:00	朝食の支度
10:30	草木染め	7:00	朝食（オープンサンド）
12:00	昼食（弁当持参）	8:00	森で遊ぼう（ビンゴラリー）
13:00	テントの設置、風呂準備	10:00	後片付け
14:00	川遊び&川の生きもの観察、 ドラム缶風呂	12:00	閉会式 （参加者の感想、記念撮影、アンケート）
16:00	夕食の支度（カレー、サラダ、飯盒炊飯）		
17:30	夕食		
19:00	動物の観察&ナイトウォーク （ムササビ、野ネズミ、昆虫トラップ）		
21:00	就寝		

企画、段取り、事前学習、準備、当日の指導などを全て学生主導でおこなうことを目標に4月から準備を重ねた。打合せを何度もおこない、下見や教材研究、テント張や火起こしの練習、必要物品の準備・救急法の実習など、様々なケースやトラブルを想定しての入念な準備を重ねた。当日は急な雷雨によりプログラムの変更等があったが、臨機応変に対応でき、無事全てのプログラムを楽しく安全に成し遂げることができた。学生たちにとっては大きな負担と試練を課す活動であったが、本番で子ども達と笑顔で接している姿はとてものもしく、キャンプをやり遂げた後の彼らの表情からは、彼ら自身がこのキャンプを通して大きく成長した様子が伺えた。子どもたちや一般参加者からも概ね好評をいただいた。

以下に参加者の声を記す。

- ・お姉さん、お兄さんがやさしく声をかけてくれてうれしかったです。また来たいです。
- ・ネズミとかいろんな虫を見つれたり川に入ったりして楽しかった。
- ・夕立があつてすこしがっかりしたけど、みんなでおいしいカレーが作れてよかった。
- ・スタッフの皆さんはじめ学生の方々いろいろお世話になりました。子どもたちにはやさしく丁寧に指導して下さり、子ども達も十分満足していました。プログラムも自然を満喫できるように工夫されていて、子ども達の顔が生きいきとしていました（森の動物、川の生きものにふれ合えて満足でした）。楽しい2日間をありがとうございました。

（文責：坂田有紀子）

### V-3. 「食育に関する研究—血圧と塩との相互作用について」

プロジェクト責任者：

吉住典子(本学初等教育学科教授)

#### 1. はじめに

平成2005年に食育基本法が制定された。これは、近年の日本の食を取り巻く環境に伴う様々な問題に対処するため、「食育」に関する施策を総合的にかつ計画的に推進し、現在および将来にわたる健康で文化的な国民の生活と豊かで活力ある社会の実現に寄与することを目的としている。それを受けて都留市においても、政策形成課を中心にして、2007年3月に「食育つる推進プラン」が策定された。その策定委員会の議長を吉住が引き受けた。また、その委員会での提出資料から、都留市の疾病別受信件数(ベスト10)(国保レセプト統計2006年5月)として、高血圧性疾患がトップであり、群を抜いて件数が多いことが分かった。高血圧性疾患は生活習慣病の一つであり、生活習慣病は現在、国民医療費(一般診療医療費)の内、約1/3を占めており、その対策が求められているため食育基本法が制定されたといっても過言ではない。

特に、日本人は塩分摂取量が多く、年々摂取量が少なくなっているといっても、1日平均12g摂取しているとされている。現在、10gを国の目標としている。また、WHOでは、1日平均6gが望ましいとされている。高血圧性疾患と診断されると、まず減塩食事を勧められる。ところが、最近では、食塩摂取量と高血圧の因果関係を疑問視する研究調査や減塩の危険性を指摘する論文も発表されている。

一方、生活習慣病の原因は、過食であることは知られている。しかし、過食という感知能力をヒトは持ち合わせていないので、豊富な食べ物が身近にある社会になった現代において対処する方法が無く、つつい食べ過ぎとなってしまっていると思われる。特に、油脂の入った食べ物、塩分が含まれている食べ物はおいしく、食が進んでしま

うことも一因であろう。

また、過剰な食事を摂取すれば、塩分の摂取もより多くなることは当然である。

最近、一部の食品に対してカロリー表示を義務づけてあるが、実生活においては、自分の必要カロリー量を正しく認識し、考えている人は少ないと思われる。ましてや実行している人はほとんどないと考えられる。

生活環境科学系研究室では、食育つる推進プランの中での重点目標「生活習慣病の予防に努めましょう」を取り上げた。生活習慣病の予防には、人間の身体を中心に据えた食の取組における科学的論理と測定が不可欠であり、地域と交流を持つ大学の研究課題として最適であると考えた。日常生活の中で、個人が容易に自分の食生活を管理・運営する方法を導き出すことが本研究の目的である。

#### 2. 予備実験

上記目的のために、2007年度に実験を開始した。

食品成分表やカロリーガイドブックなどの書物や写真などでカロリーを認識することはできるし、レストランでカロリー表示を行って見ることではできるが、自宅の食事でカロリーを確認することはほとんどしていないと思われる。

そこで、毎日の食事に対するカロリーや塩分への意識を高めるためには、一定カロリー一定塩分の食事を摂取してその量と味を眼と舌で学習し、直感を養うことが重要であると考えた。さらに、塩分を計測することができれば、認識精度を高めることができる。また、生活していく中で、食事の味付けはほぼ一定であると考えられる。もし、減塩食事の味付けがあまり薄く感じないようであれば、このことは量の問題に変換することができる。

2008年1月40才以上の健常である市役所職員5名と大学職員5名、計10名による実験を開始した。

被験者は、7日間3食ともタイヘイ社製の一定カロリー減塩食事を摂取し、その後7日間、通常の食事を摂取して、実験開始日の朝から体重 (Kg)、血圧 (mmHg)、尿中塩分量 (g/日) を測定する。最初の7日間に関しては、間食なし、カロリーの無いお茶だけは飲んでも良いが、アルコールも禁止とした。体重、血圧は起床後と就寝前の2回/日、尿中塩分量は起床後の1回/日である。

#### 一定カロリー減塩食事：

タイヘイ社製の糖尿病用食事（朝食）、腎臓病用の低タンパク、低塩分食事（昼食、夕食）を活用した。カロリー/日 (1,534Kcal～1,576Kcal)、塩分/日 (4.8g～5.6g) 約3,000円/日/1人

#### 血圧計：

オムロン社製デジタル自動血圧計(2万円/個) を研究室で用意し、被験者に使用してもらい、実験後回収した。

#### 減塩モニタ：

河野エムイー研究所製（3万円/個）を使用した。医療機器では、無いので医師の診断や治療には使えないが、家庭内で尿中塩分量を容易に測定できる機器である。この機器は、摂取した塩分のほとんどが分解し、尿中に排出される理論を基礎にして、1日分の塩分を起床後の排尿時の塩分から類推するものである。

実験結果として、一定カロリー、一定塩分の食事摂取で測定した尿中塩分量がほとんど一定である被験者が7/10名であった。この結果から、尿中塩分量さえ測れば自分の食べたカロリーが推測できるし、塩分もおおざっぱではあるが、推測できると考えられる。また、血圧に関しては、減塩食事による変化がまったく見られず、血圧と減塩は無関係であると結論せざるを得なかった。これは被験者が健常者であることも考慮に入れて本実験では高血圧患者や高血糖患者に対する実験を行う予定を立てた。

### 3. 本実験

2008年度、本地域交流センターの研究教育プロジェクトの支援を得て、予備実験の成果を踏まえ、被験者を30名に増員して実験を行った。

予備実験での結果から、学習の観点を重視するため、予備実験の14日間の実験期間を21日間に延長し、最初の7日間は操作に慣れてもらうための通常食事、次の7日間は一定カロリー減塩食事で学習と測定を行い、それを踏まえて最後の7日間を学習後通常食事と予定して、3週間分の日誌を人数分作成した。その日誌には、体重、血圧に加え、万歩計を配布して記入をお願いした。さらに、通常食の場合に、メニューを記入してもらった。実験後、研究室でメニューからカロリーを算出した。また、空腹感と満腹感なども数値化して記入してもらった。感想の欄も作った。

また、尿中塩分量は1日換算分なので、その時の塩分濃度(%), 尿量も加えて記述する項目を設定した。当初、被験者は中高年の高血圧患者や高血糖患者および健常者と考えていたが、市役所事務職と大学の事務職では集まらなかった。そこで、年齢を下げ、教員、学生も入れて30名確保した。市役所職員5名ずつ3回に分けて、各3週間ずつ実験を行った。ところが、血圧計および減塩モニタが20個しか用意できなかったことと、タイヘイ社製食事の保存冷凍庫の容量と配布日時などから、実験期間が11月10日頃から12月25日頃までとなり、その間、イベントや忘年会などで外食の機会が多く、また被験者が3倍に増えた関係で担当学生や、市役所の担当者の仕事が煩雑となり日誌の紛失まで生じてしまった。さらに学生は生活時間が不規則で、結果として3週間の実験を実施できない被験者が2人あり、27名のデータしか集まらなかった。タイヘイ社製食事だけで計60万円（送料込み）かかった実験だった。人件費ゼロで、市役所の政策形成課の鬘櫛美咲さんには市役所分を一手に引き受けて頂いた。

実験結果についてはメニューからカリリ

一を算出したデータを加えた日誌のまとめを個人ごとに作成して返却し、今後の食生活に活かしてもらうようにした。

実験結果の一部の主要部分を表にまとめた。

尿中塩分量は個人によって変動があるが、食事のカロリーが一定になるとほぼ一定になる。ということは、概算であるが、尿中塩分量から前日摂取した食事のカロリーが逆算できることになるのは、疾患が有る無しに関わらず、減塩モニタが塩分よりもカロリーのモニタになることを示していることになる。表から見る限り、血圧、万歩計による運動量の変化はカロリー摂取量による変化は見られなかった。

さらに、一定カロリー食事後の尿中塩分量は概算であるが、就寝時～起床時の時間によっても異なってくると思われるので、時間による分析を行い、結果を大学紀要に発表する予定である。

#### 4. 2009年度に向けて

2009年度は、2008年度の本実験を踏まえて、一般市民を対象とした実験を20名行う予定である。しかし、この実験は計測機器を使用すること、間食やアルコールの禁止といったかなり大変な生活を強制することになるので、被験者の選択、実験の説明の理解、食事の配給、実験の実施、という一連の実行が難しいことも考慮に入れなければならない。

生活習慣病になると検査入院をして、生活を見直すことも行うが、予防にはならない。また生活が入院という日常生活とは異なるため、学習にならないことが多い。

日常生活の中で体験学習という位置づけで、カロリー一定減塩食事を摂取し、尿中塩分量を知ることが出来れば、食育そのものであり、一生の食生活に役立つものであると思われる。

表 通常食事およびカロリー一定減塩食事における血圧、尿中塩分量、歩数比較

被験者	通常食事 2週間	一定食事 1週間	通常食事 2週間	一定食事 1週間	通常食事 2週間	一定食事 1週間
	血圧(mmHg)	血圧(mmHg)	尿中塩分量(g)	尿中塩分量(g)	歩計/日	歩計/日
1 最大値	157	150	12.9	8.7	8500	5300
1 最小値	53	60	6.1	5.6	1300	1480
1 差分			6.8	3.1		
2 最大値	145	147	13.3	8.8	7148	3724
2 最小値	68	68	5.4	4.8	1684	1420
2 差分			7.9	4		
3 最大値	148	141	10.3	11.1	11045	4215
3 最小値	74	73	6.1	5	1213	2352
3 差分			4.2	6.1		
4 最大値	128	120	13.4	7.6	14000	11500
4 最小値	64	63	8.3	4.7	3400	3000
4 差分			5.1	2.9		
5 最大値	152	140	15.7	9.8	7125	16883
5 最小値	71	75	9	7.7	4239	6054
5 差分			6.7	2.1		
6 最大値	130	117	12.9	7.3	7004	4381
6 最小値	71	67	5.3	5.5	2318	1098
6 差分			7.6	1.8		
7 最大値	135	120	12.4	9	8604	37144
7 最小値	50	52	4.7	6	2078	1052
7 差分			7.7	3		
8 最大値	145	157	10.5	6.3	4994	9501
8 最小値	57	57	4.4	4.8	1745	2857
8 差分			6.1	1.5		
9 最大値	134	133	11.5	8.9	12686	11971
9 最小値	75	74	7	6.4	2840	6081
9 差分			4.5	2.5		
10 最大値	130	124	13.1	8.3	5828	5250
10 最小値	61	63	6.8	6.5	1145	4328
10 差分			6.3	1.8		

被験者	通常食事 2週間	一定食事 1週間	通常食事 2週間	一定食事 1週間	通常食事 2週間	一定食事 1週間
	血圧(mmHg)	血圧(mmHg)	尿中塩分量(g)	尿中塩分量(g)	歩計/日	歩計/日
11 最大値	129	129	10.9	8.7	6600	6029
11 最小値	71	75	7.8	6.6	4258	3267
11 差分			3.1	2.1		
12 最大値	134	126	14.4	9.3	5214	6707
12 最小値	72	67	6.5	7.8	2368	2979
12 差分			7.9	1.5		
13 最大値	142	142	14.2	9.6	13546	4004
13 最小値	81	80	9.4	6.4	2354	2069
13 差分			4.8	3.2		
14 最大値	152	163	13.7	9.3	11500	10500
14 最小値	86	78	4.6	5.5	7500	7500
14 差分			9.1	3.8		
15 最大値	117	119	13.9	8.4	11874	13785
15 最小値	51	53	6.6	6.2	4705	2329
15 差分			7.3	2.2		
16 最大値	172	155	13.9	9.2	4258	5120
16 最小値	90	89	8.1	6.4	1826	2501
16 差分			5.8	2.8		
17 最大値	149	145	12.2	6.9	17798	9177
17 最小値	72	61	5	5.4	4436	5147
17 差分			7.2	1.5		
18 最大値	169	155	15.1	8.2	8917	10468
18 最小値	81	88	7.4	6.4	4374	7024
18 差分			7.7	1.8		
19 最大値	130	137	15.3	9.8	8231	8112
19 最小値	71	74	7	9.1	6335	6500
19 差分			8.3	0.7		
20 最大値	105	104	10.1	5.9	10732	11108
20 最小値	58	58	5.8	2.7	1558	5408
20 差分			4.3	3.2		
21 最大値	115	117	10.6	5.3	2875	2096
21 最小値	58	60	6.5	3.5	1484	1062
21 差分			4.1	1.8		
22 最大値	136	121	15.6	7.5	11667	11002
22 最小値	69	60	7.5	4.1	2274	2800
22 差分			8.1	3.4		
23 最大値	141	141	16.2	9	7800	8900
23 最小値	70	72	10	7.1	3700	3200
23 差分			6.2	1.9		
24 最大値			12.7	6.7	10118	10324
24 最小値			4.5	5.4	2317	8679
24 差分			8.2	1.3		
25 最大値	115	107	12.6	6.2	10964	6315
25 最小値	60	63	6.4	5.9	973	1723
25 差分			6.2	0.3		
26 最大値	142	125	11.7	7.7	16000	12000
26 最小値	76	72	7.9	5	4000	4000
26 差分			3.8	2.7		
27 最大値			12.4	6.5	10052	11395
27 最小値			7.6	4.3	5938	8013
27 差分			4.8	2.2		

(文責：吉住典子)

(付) 2008 (H20) 年度地域交流研究センター担当教員

西本 勝美	初等教育学科教授	地域交流研究センター長
佐藤 隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長 発達援助部門担当
畑 潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長
坂田有紀子	初等教育学科准教授	フィールド・ミュージアム部門担当
泉 桂子	社会学科専任講師	暮らしと仕事部門担当
杉本 光司	情報センター教授	地域情報教育担当
今泉 吉晴	本学名誉教授・ センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
北垣 憲仁	センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
品田 笑子	センター特別非常勤講師	地域教育相談室担当



---

2009年7月22日 発 行

編 集 者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学  
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1  
電 話 0554-43-4341

印 刷 所 有限会社 印刷エトリ  
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-24  
電話 0554-43-3451

---